

乙 其ノ他ノモノ

萬分ノ二・五

第三種 商品ノ賣買取引

甲 銘柄又ハ等級別ニ相對賣買ノ方法ニ依リテ行ヒ履行期ニ於テノミ差金ノ授受ニ依リテ決済ヲ爲シ得ル取引ニ屬スルモノ

乙 其ノ他ノモノ

萬分ノ一・二五

賣買ヲ解約スルモ其ノ税金ハ之ヲ免除セス(大正十一年法律第六十二號改正)

第六條 (同上)

第七條 國債證券ノ賣買取引ニハ取引税ヲ課セス(同上)

第八條 取引所ノ取引員又ハ會員ハ取引税ヲ課セラルヘキ毎月分ノ賣買取引ノ賣買各約定金高ヲ種別及其ノ區分毎ニ記載シタル申告書ヲ取引所ヲ經テ翌月十日迄ニ政府ニ提出スヘシ

取引所ハ前項ノ申告書ヲ調査シ其ノ當否ニ付意見ヲ付シ前項ノ期間内ニ之ヲ政府ニ提出スヘシ

前項ノ規定ニ依リ取引所ヲシテ申告書ノ調査ヲ爲サシムル爲取引員又ハ會員ハ第一項ノ期日前相當ノ期間内ニ申告書ヲ取引所ニ送付スヘシ

申告書ノ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ申告高ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ハ其ノ課税標準額ヲ決定ス(同上)

第九條 取引所ノ取引員又ハ會員ハ毎月分ノ税金ヲ取引所ヲ經テ翌月末日迄ニ政府ニ納付スヘシ(同上)

第十條 政府ハ取引税ノ納税告知書ヲ取引所ニ交付シ取引所ハ之ヲ其ノ取引員又ハ會員ニ送達スヘシ此ノ場合ニ於テハ取引所ニ交付シタル時ヲ以テ其ノ取引員又ハ會員ニ送達アリタルモノト看做ス

取引所ハ其ノ取引員又ハ會員ノ納付スヘキ税金ヲ取纏メ前條ノ納期内ニ之ヲ政府ニ送付スヘシ(同上)

第十一條 取引所ノ取引員又ハ會員カ廢業脱退其ノ他ノ事由ニ因リ其ノ資格ヲ失ヒタルトキハ課税標準額ノ申告及取引税ノ納付ハ前三條ノ期限ニ拘ラス直ニ之ヲ爲スヘシ(同上)

第十二條 取引所ハ其ノ取引員又ハ會員ノ取引税ノ納付ニ付保證ノ責ニ任ス

第十三條 取引所ハ賣買手数料及賣買取引ニ關スル事項ヲ帳簿ニ記載スヘシ

第十四條 收税官吏ハ取引所、取引所ノ取引員又ハ會員ニ就キ其ノ賣買手数料又ハ賣買取引ニ關スル帳簿書類ヲ検査シ又ハ監督上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得(同上)

取引所税法

第十五條 取引所第二條ノ申告ヲ怠リ又ハ詐リタルトキハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス因リテ脱税シタルトキハ脱税高三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス

第十六條 取引所ノ取引員又ハ會員第八條又ハ第十一條ノ申告ヲ怠リ又ハ詐リタルトキハ百圓以下ノ罰金又ハ十圓以上ノ科料ニ處ス因リテ脱税シタルトキハ脱税高五倍ニ相當スル罰金ニ處シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス但シ税金二十圓未滿ナルトキハ罰金額ヲ百圓トス(上同)

第十七條 取引所法第二十五條ノ規定ニ違反シタル行爲アリタルトキハ取引税ニ關シテハ取引所ニ於テ賣買取引ヲ爲シテ脱税シタルモノト看做シ其ノ税金五倍ニ相當スル罰金ニ處シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス但シ税金二十圓未滿ナルトキハ罰金額ヲ百圓トス

前項ノ場合ニ於テハ委託者ニ對シ約定金高トシテ計算シタル金額ヲ以テ賣買各約定金高トス(上同)

第十七條ノ二 取引所ニ於ケル賣買取引ニシテ第五條ニ規定スル賣買取引ニ該當セサルモノニ付差金ノ授受ニ依リテ決済ヲ爲シタルトキハ取引物件ノ種別ニ從ヒ其ノ最高稅率ノ取引税ヲ課セラルヘキ賣買取引ヲ爲シテ脱税シタルモノト看做シ其ノ税金五倍ニ相當スル罰金ニ處シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス但シ税金二十圓未滿ナルトキハ罰金額ヲ百圓トス

前項ノ場合ニ於ケル稅額ハ賣買各約定金高ニ依リ計算ス(同上ヲ以テ追加)

第十八條 取引所ノ取引員又ハ會員ノ爲シタル第八條又ハ第十一條ノ申告不當ナル場合ニ於テ取引所之ヲ正當ナル申告トシテ政府ニ提出シタルトキハ百圓以下ノ罰金又ハ十圓以上ノ科料ニ處ス因リテ脱税スルニ至ラシメタルトキハ脱税高五倍ニ相當スル罰金ニ處ス但シ税金二十圓未滿ナルトキハ罰金額ヲ百圓トス(上同)

キハ罰金額ヲ百圓トス(上同)

第十九條 取引所又ハ取引所ノ取引員若ハ會員左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ百圓以下ノ罰金又ハ十圓以上ノ科料ニ處ス(上同)

一 取引所第八條又ハ第十一條ノ場合ニ於テ申告書ニ意見ヲ附セス又ハ申告書ノ提出ヲ怠リタルトキ

二 賣買手数料又ハ賣買取引ニ關スル帳簿ヲ調製セス、其ノ記載ヲ怠リ若ハ詐リタルトキ又ハ帳簿書類ヲ隱匿シタルトキ

三 收稅官吏ノ質問ニ對シ答辯ヲ爲サス若ハ虛偽ノ陳述ヲ爲シ又ハ其ノ職務ノ執行ヲ拒ミ、之ヲ妨ケ若ハ忌避シタルトキ

第二十條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用キス

第二十一條 取引所ノ取引員又ハ會員ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法ヲ犯シタルトキハ其ノ取引員又ハ會員ヲ處罰ス(上同)

第二十二條 北海道府縣及市町村ハ取引所營業稅ニ對シ本稅百分ノ十以内ノ附加稅ヲ課スルノ外取引所ノ業務ニ對シ租稅其ノ他ノ公課ヲ課スルコトヲ得ス(昭和六年法律第十四號改正)

附則

本法ハ大正三年九月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第二十二條ノ規定ハ大正四年四月一日ヨリ施行ス

本法施行前ノ賣買取引ニ關シテハ仍従前ノ規定ニ依リ取引所税ヲ徴收ス
本法施行前ニ爲シタル賣買取引ニ係ル賣買手数料ニシテ本法施行後ニ收入スルモノハ取引所營業稅
ノ課稅標準額ニ算入セス

明治三十九年法律第十二號ハ之ヲ廢止ス

附則 (大正十一年法律第六十一號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(大正十一年八月二十三日勅令第三百八十
九號ヲ以テ大正十一年九月一日ヨリ施行)

本法施行前ニ爲シタル取引所ノ賣買取引ニ付テハ其ノ取引ノ結了ニ至ル迄仍従前ノ例ニ依ル

附則 (昭和六年法律第十四號)

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○印紙税法

(明治三十二年三月十日法律第五十四號)

改正

- 同 明治三十四年四月 四 日法律第十六號
- 同 四十年三月二十九日法律第二十七號
- 同 四十二年五月十七日法律第四十二號
- 同 四十三年三月二十五日法律第四十二號
- 同 四十四年三月二十八日法律第四十一號
- 同 四十四年三月二十八日法律第四十一號
- 大正十一年四月十八日法律第四十七號
- 同 十二年三月二十七日法律第十二號
- 同 十四年三月三十日法律第二十二號
- 昭和二年三月二十九日法律第七號
- 同 六年四月一日 日法律第五十二號(自動車交通事業法)
- 同 七年九月六日 日法律第二十五號(商業組合法)
- 同 八年三月二十九日法律第三十三號(漁業法)
- 同 十一年五月二十七日法律第十四號(商工組合中央金庫法)

第一條 財産權ノ創設、移轉、變更若ハ消滅ヲ證明スヘキ證書、帳簿及財産權ニ關スル追認若ハ承

認ヲ證明スヘキ證書ヲ作成スル者ハ此ノ法律ニ依リ印紙稅ヲ納ムヘシ

第二條 削除(昭和二年法律第七號)

第三條 削除(昭和二年法律第十二號)

第四條 左ニ掲クル證書、帳簿ニ關シテハ證書ハ一通毎ニ、帳簿ハ一冊一年以内ノ附込ニ對シ左ノ

印紙税法

印紙税ヲ納ムヘシ(昭和二年正、第七號改正)

- 一 不動産、鐵道財團、軌道財團、自動車交通事業財團
又ハ船舶ノ所有權移轉ニ關スル證書(昭和六年法律第五十二號自動車交通事業法ニ依リ改正)
- 二 消費貸借ニ關スル證書
- 三 請負ニ關スル證書
- 四 運送ニ關スル證書
- 五 備船契約書
- 六 委任狀
- 七 約束手形
- 八 爲替手形
- 九 銀行預金證書
- 十 産業組合又ハ産業組合聯合會ノ發スル貯金證書
- 十一 産業組合聯合會、漁業組合、漁業組合聯合會、
商工組合中央金庫、工業組合、工業組合聯合會、商
業組合、商業組合聯合會、輸出組合又ハ輸出組合聯
合會ノ發スル出資證券(昭和七年法律第二十五號、昭和八年法律第三十三號)

記載金高五十圓以下ノモノ	二錢
同 百圓以下ノモノ	三錢
同 五百圓以下ノモノ	十錢
同 千圓以下ノモノ	二十錢
同 一萬圓以下ノモノ	五十錢
同 一萬圓ヲ超ユルモノ	一圓
記載金高ナキモノ	二錢

業法ニ依リ(昭和十一年法律第十四號商工)
改正(組合中央金庫法ニ依リ改正)

- 十二 船荷證券
- 十三 運送貨物引換證
- 十四 倉庫證券
- 十五 保險證券
- 十六 株券
- 十七 債券
- 十八 相互保險會社ノ發スル基金證券
- 十九 株式申込證
- 二十 社債申込證
- 二十一 地上權、永小作權又ハ地役權ニ關スル證書
- 二十二 使用貸借、貸貸借、雇傭、寄託又ハ定期金ニ
關スル證書
- 二十三 信託行爲ニ關スル證書
- 二十四 無盡ニ關スル證書
- 二十五 定款又ハ組合契約書
- 二十六 權利ノ變更ニ關スル證書
- 二十七 追認又ハ承認ニ關スル證書

- 二十八 物品切手
- 二十九 受取書
- 三十 質權、抵當權ニ關スル證書
- 三十一 前各號以外ノ證書
- 三十二 預金通帳
- 三十三 前號以外ノ通帳
- 三十四 判取帳

五錢
五十錢

證書ニ金高記載ナキモ證書面ニ標記シアル價額ノ單位其ノ他ノ記載事項ニ依リ其ノ金高ヲ算出スルコトヲ得ルモノハ其ノ總金額ヲ以テ記載金高ト看做ス

第五條

左ニ掲クル證書、帳簿ニ關シテハ印紙稅ヲ納ムルコトヲ要セス

- 一 官廳又ハ公署ヨリ發スル證書、帳簿
- 二 官廳又ハ公署ニ職ヲ奉スル者ノ職務上發スル證書、帳簿
- 三 國庫金ノ取扱ニ關シ發スル證書
- 四 慈善又ハ公共事業ノ爲ニスル寄附ニ關シ官廳又ハ公署ニ提出スル證書(大正十二年法律第十二號改正)
- 五 小切手
- 六 産業組合ノ發スル出資證券若ハ貯金通帳又ハ住宅組合ノ發スル出資證券(大正十二年法律(昭和二年法律第十二號追加)第七號改正)

- 七 記載金高十圓未満ノ約束手形及爲替手形(大正十二年法律第十二號改正)
- 八 貯金通帳、積金通帳又ハ積金證書(貯蓄銀行法第一條ノ貯蓄又ハ積金ニ付發スルモノニ限ル)(同上追加)(昭和二年法律第七號改正)
- 九 産業組合又ハ産業組合聯合會ノ發スル貯金證書ニシテ其ノ記載金高十圓未満ノモノ(同上追加)
- 十 記載金高一圓未満ノ物品切手(明治四十三年法律第十四號追加)
- 十一 賣買仕切書(明治四十四年法律(昭和二年法律)第四十一號改正)(大正十二年法律(昭和二年法律)第七號改正)
- 十二 物品又ハ有價證券ノ賣買契約證書(大正十二年法律(昭和二年法律)第七號改正)
- 十三 送狀(明治四十四年法律(昭和二年法律)第十二號追加)(第七號改正)
- 十四 記載金高十圓未満若ハ金高記載ナキ又ハ營業ニ關セサル受取書(明治四十四年法律(大正十二年法律)第四十一號改正)(第十二號改正)
- 十五 主タル債務ノ證書ニ併記シタル擔保契約書(大正十二年法律第十二號改正)
- 十六 手形及證券ノ裏書又ハ之ニ併記シタル受取書(同上)
- 十七 株券又ハ債券ニ記載シタル讓渡ノ證明書(同上)
- 十八 手形ノ引受及保證(同上)
- 十九 手形又ハ證券ノ拒絕證書(同上)
- 二十 手形又ハ證券ノ複本及謄本(同上)
- 二十一 農業倉庫證券又ハ聯合農業倉庫證券(昭和二年法律第七號追加)
- 二十二 質札又ハ質物通帳(質屋營業若ノ發スルモノニ限ル)(同上)
- 二十三 勤務通帳(同上)

- 二十四 乗車券、乗船券又ハ各種入場券(同上)
- 二十五 第四條第一號乃至第五號及第三十一號ノ證書ニシテ記載金高十圓未満ノモノ(同上)
- 第六條 印紙税ハ證書、帳簿ニ印紙ヲ貼用シテ納ムルモノトス但シ印紙税額ニ相當スル現金ヲ政府ニ納付シテ税印ノ押捺ヲ受ケ印紙貼用ニ代フルコトヲ得(明治三十四年法律第十六號改正)
- 第七條 一冊ノ帳簿ヲ一年以上使用スルトキハ別帳簿ヲ調製シタルモノト看做ス
- 第八條 證書ニ外國貨幣ヲ以テ員數ヲ記載スルトキハ内國貨幣ニ換算シタル金高ニ相當スル印紙ヲ貼用スヘシ
- 第九條 印紙ヲ貼用スルトキハ證書又ハ帳簿ノ紙面ト印紙ノ彩紋トニカケテ證書又ハ帳簿作成者ノ印章又ハ署名ヲ以テ判明ニ之ヲ消スヘシ
- 第十條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニシテ營業ニ關スルモノハ當該官吏之ヲ検査スルコトアルヘシ(昭和二年法律第七號改正)
- 第十一條 證書、帳簿ニ相當印紙ヲ貼用セス又ハ第六條但書ニ依リ税印ノ押捺ヲ受ケサル者ハ證書帳簿一箇毎ニ脱税高二十倍ノ罰金又ハ科料ニ處ス但シ脱税高二十倍ノ金額三圓ニ達セサルトキハ三圓ノ科料ニ處ス(大正十二年法律第十二號改正)
- 第十二條 第十條ノ検査ヲ拒ミタル者ハ二圓以上ノ科料ニ處ス(明治四十三年法律第十四號改正)
- 第十三條 第九條ニ違背シタル者ハ證書、帳簿一箇毎ニ二圓ノ科料ニ處ス(大正十二年法律第十二號改正)
- 第十四條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法中犯罪ノ不成立、刑ノ減免、併合罪及酌量減輕ノ例ヲ用キス

但シ第十二條ノ場合ハ此ノ限ニ在ラス(大正十二年法律第十二號改正)

第十四條ノ二 證書、帳簿ノ作成名義人ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人等カ名義人ノ爲ニ作成スル證書、帳簿ニ關シ本法ニ違反シ之ヲ處罰スヘキ場合ニ於テハ其ノ名義人ヲ處罰ス(大正十二年法律第十二號追加)

第十五條 此ノ法律ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第十六條 明治十七年第十一號布告證券印税規則ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

第十七條 明治十七年第十一號布告證券印税規則ニ依ル手形用紙ニシテ此ノ法律施行ノ際自用者ノ所持ニ係ルモノハ此ノ法律施行後ニ於テモ仍之ヲ使用スルコトヲ得但シ手形用紙記載ノ税金高以上ニ之ヲ使用セムトスルトキハ其ノ不足額ハ印紙ヲ貼用シテ之ヲ補足スヘシ

附則 (明治四十年法律第二十七號)
本法ハ明治四十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則 (明治四十三年法律第十四號)
非常特別税法中約束手形及小切手ノ印紙税ニ關スル規定ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

附則 (明治四十三年法律第十四號)
非常特別税法中印紙税ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

附則 (明治四十四年法律第四十一號)
本法ハ明治四十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則 (大正十一年法律第四十七號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(未施行ノ條大正十二年法律第十二號改正)

附則 (大正十二年法律第十二號)

本法ハ大正十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前作成シタル證書又ハ帳簿ノ印紙税ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

附則 (大正十四年法律第二十二號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(大正十四年八月二十八日勅令第二百六十號ヲ以テ大正十四年九月一日ヨリ施行)

附則 (昭和二年法律第七號)

本法ハ昭和二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前作成シタル證書又ハ帳簿ノ印紙税ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

附則 (昭和六年法律第五十二號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(昭和八年九月二十五日勅令第二百五十號ヲ以テ昭和八年十月一日ヨリ施行)

附則 (昭和七年法律第二十五號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(昭和七年九月三十日勅令第二百七十二號ヲ以テ昭和七年十月一日ヨリ施行)

附則 (昭和八年法律第三十三號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(昭和九年七月二十五日勅令第二百三十三號ヲ以テ昭和九年八月一日ヨリ施行)

附則 (昭和十一年法律第十四號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(昭和十一年六月十九日勅令第三百三十三號ヲ以テ昭和十一年六月二十日ヨリ施行)

○地方税制限ニ關スル法律

(明治四十一年三月三十一日法律第三十七號)

改正

明治四十三年三月二十八日法律第二十七號

明治四十四年三月二十五日法律第三十二號

大正九年八月五日法律第三十七號

大正十二年三月二十九日法律第三十號

大正十五年三月二十七日法律第二十五號

昭和六年四月一日法律第五十一號

昭和九年三月二十五日法律第三十號

(大正九年法律第十二號改正法律) 公布ノ日ヨリ施行

第一條

北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以內ノ地租附加税又ハ段別割ヲ課スルノ外土地ニ對シテ課税スルコトヲ得ス(明治四十三年法律第二十七號、明治四十四年法律第三十二號、大正九年法律第三十七號及昭和六年法律第五十一號改正)

一 北海道、府縣

附加税ノミヲ課スルトキ

地租百分ノ八十二

段別割ノミヲ課スルトキ

一段歩ニ付 毎地目平均金一圓

附加税及段別割ヲ併課スル場合ニ於テハ段別割ノ總額ハ其ノ地目ノ地租額百分ノ八十二ト附加税額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

二 其ノ他ノ公共團體

附加税ノミヲ課スルトキ

地租百分ノ六十六

地方税制限ニ關スル法律

一段歩ニ付 毎地目平均金一圓

附加税及段別割ヲ併課スル場合ニ於テハ段別割ノ總額ハ其ノ地目ノ地租額百分ノ六十六ト附加税額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

第二條 北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ハ左ノ制限以内ノ營業收益税附加税ヲ課スルノ外營業收益税ヲ納ムル者ノ營業ニ對シ課税スルコトヲ得ス(明治四十三年法律第二十七號、大正九年法律第三十七號、大正十二年法律第三十號、大正十五年法律第二十五號及昭和六年法律第五十一號改正)

- 一 北海道、府縣 營業收益税百分ノ四十六半
- 二 其ノ他ノ公共團體 營業收益税百分ノ六十六

營業收益税附加税ノ賦課ニ付テハ營業收益税法第十條第二項ノ規定ニ依ル資本利子税額ノ控除ヲ爲ササルモノヲ以テ營業收益税額ト看做ス(大正十五年法律第二十五號追加)

第三條 北海道、府縣ハ所得税百分ノ二十四以内ノ所得税附加税ヲ課スルノ外所得税ヲ納ムル者ノ所得ニ對シ課税スルコトヲ得ス(明治四十三年法律第二十七號、大正九年法律第三十七號、大正十二年法律第三十號及大正十五年法律第二十五號改正)

北海道、府縣以外ノ公共團體ハ府縣費ノ全部又ハ一部ノ分賦ヲ受ケタル場合ヲ除クノ外所得税ヲ納ムル者ノ所得ニ對シ課税スルコトヲ得ス(大正十五年法律第二十五號追加)
戶數割ヲ賦課シ難キ市町村ニ於テハ前項ノ規定ニ拘ラス内務大藏兩大臣ノ許可ヲ受ケ所得税附加税ヲ課スルコトヲ得但シ其ノ賦課率ハ所得税百分ノ七ヲ超ユルコトヲ得ス(同上)
所得税附加税ノ賦課ニ付テハ所得税法第二十一條第二項若ハ第四項又ハ大正九年法律第十二號第三條ノ二第一項ノ規定ニ依ル第二種ノ所得税額ノ控除ヲ爲ササルモノヲ以テ第一種ノ所得税額ト

看做ス(大正十五年法律第二十五號及昭和九年法律第三十號附則改正)

第二種ノ所得ニ對シテハ附加税ヲ課スルコトヲ得ス(明治四十三年法律第二十七號追加)

第四條 府縣費ノ全部ヲ市ニ分賦シタル場合ニ於テハ市ハ前三條ノ市税制限ノ外其ノ分賦金額以内ニ限リ府縣税制限ニ達スル迄課税スルコトヲ得
府縣費ノ一部ヲ市町村ニ分賦シタル場合ニ於テハ市町村ハ前三條ノ市町村税制限ノ外其ノ分賦金額以内ニ限リ課税スルコトヲ得但シ府縣ノ賦課額ト市町村ノ賦課額トノ合算額ハ府縣税ノ制限ヲ超過スルコトヲ得ス

第五條 特別ノ必要アル場合ニ於テハ内務大藏兩大臣ノ許可ヲ受ケ第一條乃至第三條ノ制限ヲ超過シ其ノ百分ノ十二以内ニ於テ課税スルコトヲ得
左ニ掲クル場合ニ於テハ特ニ内務大藏兩大臣ノ許可ヲ受ケ前項ノ制限ヲ超過シテ課税スルコトヲ得

- 一 内務大藏兩大臣ノ許可ヲ受ケテ起シタル負債ノ元利償還ノ爲費用ヲ要スルトキ
- 二 非常ノ災害ニ因リ復舊工事ノ爲費用ヲ要スルトキ
- 三 水利ノ爲費用ヲ要スルトキ
- 四 傳染病豫防ノ爲費用ヲ要スルトキ

前二項ニ依リ制限ヲ超過シテ課税スルハ第一條乃至第三條ニ定メタル各税目ニ對スル賦課カ各其ノ制限ニ達シタルトキニ限ル但シ地租附加税及段別割ヲ併課シタル場合ニ於テハ一地目ニ對スル

賦課カ制限ニ達シタルトキハ附加税カ制限ニ達シタルモノト看做ス其ノ段別割ノミヲ賦課シタル
場合ニ於テ一地目ニ對スル賦課カ制限ニ達シタルトキ亦同シ(明治四十三年法律第
二十七號但書追加)
前三項ノ規定ハ前條ノ場合ニ之ヲ準用ス

第六條 北海道、府縣以外ノ公共團體ニ對スル前條ノ許可ノ職權ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ地方
長官ニ委任スルコトヲ得(大正九年法律第
三十七號追加)

第七條 本法ノ規定ハ特ニ賦課率ヲ定メタル特別法令ノ適用ヲ妨ケス

附則

本法ハ明治四十一年度ヨリ之ヲ施行ス

非常特別税法中地租、營業税及所得税ノ地方税制限ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

附則 (大正十二年法律第三十號)

本法ハ大正十二年度分ヨリ之ヲ適用ス

本法公布ノ日迄ニ北海道、府縣其ノ他ノ公共團體カ營業税附加税ニ付制限外課税ノ許可ヲ受ケタル
場合ニ於テ其ノ制限外ノ賦課率ハ之ヲ本法ニ依リテ許可ヲ受ケタル制限外賦課率ト看做ス

附則 (大正十五年法律第二十五號)

本法ハ大正十六年度分ヨリ之ヲ適用ス但シ第三條第一項ノ改正規定中第四項ノ規定及附則第二項ノ
規定ハ大正十五年度分ヨリ之ヲ適用ス

營業税法廢止法律ニ依リテ免除セラルル營業税額ハ大正十五年度分營業税附加税ノ賦課ニ付テハ免

除セラレサルモノト看做ス

附則 (昭和六年法律第五十一號)

本法ハ昭和六年度分ヨリ之ヲ適用ス但シ第二條ノ改正規定ハ昭和七年度分ヨリ之ヲ適用ス
昭和六年度分ニ付テハ第一條ノ改正規定中百分ノ八十二トアルハ百分ノ七十九、百分ノ六十六トア
ルハ百分ノ六十三トス

昭和六年度分ニ限り勅令ノ定ムル所ニ依リ從前ノ地租ヲ標準トシ從前ノ規定ニ依リ地租附加税ヲ賦
課スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ段別割ヲ併課スルトキハ段別割ノ總額ノ制限ハ從前ノ規定ニ依ル
北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ニ於ケル改正制限率ニ依リ賦課スルコトヲ得ベキ地租附加税額ト特
別地稅額又ハ其ノ附加税額トノ合算額ガ從前ノ地租又ハ地價ヲ標準トシ從前ノ制限率ニ依リ賦課ス
ルコトヲ得ベキ地租附加税額ト特別地稅額又ハ其ノ附加税額トノ合算額ニ達セザル場合ニ於テ特別
ノ必要アルトキハ昭和十二年度分迄ニ限り勅令ノ定ムル所ニ依リ其ノ差額ノ範圍内ニ於テ内務大藏
兩大臣ノ許可ヲ受ケ第一條又ハ第四條ノ制限及第五條第一項ノ制限ヲ超過シテ課税スルコトヲ得
北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ニ於ケル改正制限率ニ依リ賦課スルコトヲ得ベキ地租附加税額ト特
別地稅額又ハ其ノ附加税額トノ合算額ガ從前ノ地租又ハ地價ヲ標準トシ從前ノ制限率ニ依リ賦課ス
ルコトヲ得ベキ地租附加税額ト特別地稅額又ハ其ノ附加税額トノ合算額ヲ超ユル場合ニ關シテハ昭
和十二年度分迄ニ限り勅令ヲ以テ第一條及第四條ノ制限内ニ於テ之ニ代ルベキ課税ノ制限ヲ定ムル
コトヲ得

前二項ニ掲グル地租附加税額、特別地税額及其ノ附加税額ノ算定ニ關シテハ内務大臣ノ定ムル所ニ依ル
北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ニ於テ段別割ノミヲ賦課スル場合ニ於テハ前三項ノ規定ヲ適用セズ

昭和六年度分ニ限り個人ニ對スル營業收益税附加税ノ賦課ニ付テハ從前ノ税率ニ依リ算出シタルモノヲ以テ營業收益税額ト看做ス

北海道、府縣以外ノ公共團體ニ對スル第四項ノ許可ノ職權ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得

○地方税ニ關スル法律

(大正十五年三月二十七日法律第二十四號)

改正 昭和六年四月一日法律第五十號

第一條 北海道、府縣ハ本法ニ依リ特別地税、家屋税、營業税及雜種税ヲ賦課スルコトヲ得

第二條 特別地税ハ地租法第七十條ノ規定ニ依リテ地租ヲ免除シタル田畑ニ對シ地租法第八條ノ賃賃價格ヲ標準トシテ之ヲ賦課ス

特別地税ノ徵收ニ關シテハ地租法第十二條ノ規定ヲ準用ス(昭和六年法律第五十號改正)

第三條 特別地税ノ賦課率ハ賃賃價格百分ノ三・一以内トス(昭和六年法律第五十號改正)

特別地税ニ對シ市町村其ノ他ノ公共團體ニ於テ賦課スヘキ附加税ノ賦課率ハ前項ニ規定スル制限

ノ百分ノ八十以内トス

第四條 府縣費ノ全部ノ分賦ヲ受ケタル市ハ第二條ノ例ニ依リ賃賃價格百分ノ二・五ノ外其ノ分賦金額以内ニ限り前條第一項ニ規定スル制限ニ達スル迄特別地税ヲ賦課スルコトヲ得(昭和六年法律第五十號改正)

北海道地方費又ハ府縣費ノ一部ノ分賦ヲ受ケタル市町村ハ前條第二項ニ規定スル制限ノ外其ノ分賦金額以内ニ限り特別地税附加税ヲ賦課スルコトヲ得但シ北海道、府縣ノ賦課額ト市町村ノ賦課額トノ合算額ハ前條第一項ニ規定スル制限ヲ超ユルコトヲ得ス

第五條 特別地税又ハ其ノ附加税ト段別割トヲ併課スル場合ニ於テハ段別割ノ總額ハ第三條又ハ前條ノ規定ニ依リテ其ノ地目ノ土地ニ對シ賦課シ得ヘキ制限額ト特別地税額又ハ其ノ附加税額トノ差額ヲ超ユルコトヲ得ス

第六條 特別地税又ハ其ノ附加税ノ賦課カ第三條乃至前條ニ規定スル制限ニ達シタル場合ニ非サレハ明治四十一年法律第三十七號第五條ノ規定ニ依ル地租、營業收益税又ハ所得税ノ附加税ノ制限外課税ヲ爲スコトヲ得ス

特別地税又ハ其ノ附加税ト段別割トヲ併課シタル場合ニ於テ一地目ニ對スル賦課カ前條ニ規定スル制限ニ達シタルトキハ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ特別地税又ハ其ノ附加税カ制限ニ達シタルモノト看做ス

第七條 特別ノ必要アル場合ニ於テハ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケ第三條乃至第五條ニ規定スル制限ヲ超過シ其ノ百分ノ十二以内ニ於テ特別地税又ハ其ノ附加税ヲ賦課スルコトヲ得

左ニ掲クル場合ニ於テハ特ニ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケテ起シタル負債ノ元利償還ノ爲費用ヲ要スルトキ
税スルコトヲ得

- 一 内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケテ起シタル負債ノ元利償還ノ爲費用ヲ要スルトキ
- 二 非常ノ災害ニ因リ復舊工事ノ爲費用ヲ要スルトキ
- 三 水利ノ爲費用ヲ要スルトキ
- 四 傳染病豫防ノ爲費用ヲ要スルトキ

前二項ノ規定ニ依リ制限ヲ超過シテ課税スルハ營業收益税及所得税ノ附加税ノ賦課カ明治四十一年法律第三十七號第二條及第三條ニ規定スル制限ニ達シタルトキニ限ル

第八條 特別地税及其ノ附加税ノ賦課率ハ當該年度ノ豫算ニ於テ定メタル田畑ニ對スル地租附加税ノ賦課率ヲ以テ算定シタル地租附加税額ノ當該田畑ノ賃貸價格ニ對スル比率ヲ超ユルコトヲ得ス

第九條 家屋税ハ家屋ノ賃貸價格ヲ標準トシテ家屋ノ所有者ニ之ヲ賦課ス

第十條 家屋ノ賃貸價格ハ家屋税調査委員ノ調査ニ依リ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事之ヲ決定ス

第十一條 左ニ掲クル家屋ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ家屋税ヲ賦課セサルコトヲ得

- 一 一時ノ使用ニ供スル家屋
- 二 賃貸價格一定額以下ノ家屋
- 三 公益上其ノ他ノ事由ニ因リ課税ヲ不適當スル家屋

第十二條 府縣費ノ全部ノ分賦ヲ受ケタル市ハ第九條乃至前條ノ例ニ依リ家屋税ヲ賦課スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ府縣知事ノ職務ハ市長之ヲ行フ

第十三條 家屋税及其ノ附加税ノ賦課率及賦課ノ制限竝家屋ノ賃貸價格ノ算定及家屋税調査委員ノ組織ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 營業税ハ營業收益税ノ賦課ヲ受ケサル營業者及營業收益税ヲ賦課セサル營業ヲ爲ス者ニ之ヲ賦課ス

第十五條 營業税ヲ賦課スヘキ營業ノ種類ハ營業收益税法第二條ニ掲クルモノ及勅令ヲ以テ定ムルモノニ限ル

第十六條 府縣費ノ全部ノ分賦ヲ受ケタル市ハ第十四條及前條ノ例ニ依リ營業税ヲ賦課スルコトヲ得

第十七條 第十一條第三號ノ規定ハ營業税ニ之ヲ準用ス

第十八條 營業税ノ課税標準竝營業税及其ノ附加税ノ賦課ノ制限ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 雜種税ヲ賦課スルコトヲ得ヘキモノノ種類ハ勅令ヲ以テ定ムルモノ竝内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ル

第二十條 第十一條第三號ノ規定ハ雜種税ニ之ヲ準用ス

第二十一條 雜種税ノ課税標準竝雜種税及其ノ附加税ノ賦課ノ制限ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十二條 市町村ハ本法ニ依リ戸數割ヲ賦課スルコトヲ得

地方税ニ關スル法律

第二十三條 戸數割ハ一戸ヲ構フル者ニ之ヲ賦課ス

戸數割ハ一戸ヲ構ヘサルモ獨立ノ生計ヲ營ム者ニ之ヲ賦課スルコトヲ得

第二十四條 戸數割ハ納稅義務者ノ資力ヲ標準トシテ之ヲ賦課ス

第二十五條 戸數割ノ課稅標準タル資力ハ納稅義務者ノ所得額及資産ノ狀況ニ依リ之ヲ算定ス

第二十六條 第十一條第三號ノ規定ハ戸數割ニ之ヲ準用ス

第二十七條 戸數割ノ賦課ノ制限、納稅義務者ノ資産ノ狀況ニ依リ資力ヲ算定シテ賦課スヘキ額其ノ他納稅義務者ノ資力算定ニ關シテハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十八條 北海道府縣以外ノ公共團體ニ對スル第七條ノ許可ノ職權ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ

地方長官ニ委任スルコトヲ得

附則

本法ハ大正十五年度分ヨリ之ヲ適用ス但シ家屋稅營業稅及雜種稅其ノ附加稅或戸數割ニ關スル規定ハ大正十六年度分ヨリ之ヲ適用ス

明治十三年第十六號布告及同年第十七號布告ハ大正十五年度分限リ之ヲ廢止ス

第六條及第七條中營業收益稅トアルハ大正十五年度分特別地稅及其ノ附加稅ニ付テハ國稅營業稅トス

家屋稅ハ大正十八年度分迄ニ限リ第九條乃至第十二條ノ規定ニ拘ラス別ニ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ賦課スルコトヲ得

附則 (昭和六年法律第五十號)

本法ハ昭和六年度分ヨリ之ヲ適用ス

昭和六年度分ニ付従前ノ地租ヲ標準トシ地租附加稅ヲ賦課スル北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ガ昭和六年度分特別地稅又ハ其ノ附加稅ヲ賦課スルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ従前ノ地租ヲ標準トシ従前ノ規定ニ依リ之ヲ賦課スベシ此ノ場合ニ於テ段別割ヲ併課スルトキハ段別割ノ總額ノ制限ハ従前ノ規定ニ依ル

北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ニ於ケル改正制限率ニ依リ賦課スルコトヲ得ベキ特別地稅額又ハ其ノ附加稅額ト地租附加稅額トノ合算額ガ従前ノ地價又ハ地租ヲ標準トシ従前ノ制限率ニ依リ賦課スルコトヲ得ベキ特別地稅額又ハ其ノ附加稅額ト地租附加稅額トノ合算額ニ達セザル場合ニ於テ特別ノ必要アルトキハ昭和十二年度分迄ニ限リ勅令ノ定ムル所ニ依リ其ノ差額ノ範圍内ニ於テ内務大臣及大藏大臣ノ許可ヲ受ケ第三條乃至第五條ニ規定スル制限及第七條第一項ノ制限ヲ超過シテ課稅スルコトヲ得

北海道、府縣其ノ他ノ公共團體ニ於ケル改正制限率ニ依リ賦課スルコトヲ得ベキ特別地稅額又ハ其ノ附加稅額ト地租附加稅額トノ合算額ガ従前ノ地價又ハ地租ヲ標準トシ従前ノ制限率ニ依リ賦課スルコトヲ得ベキ特別地稅額又ハ其ノ附加稅額ト地租附加稅額トノ合算額ヲ超ユル場合ニ關シテハ昭和十二年度分迄ニ限リ勅令ヲ以テ第三條乃至第五條ノ制限内ニ於テ之ニ代ルベキ課稅ノ制限ヲ定ムルコトヲ得

地方税ニ關スル法律

二一一

前二項ニ掲グル特別地稅額、其ノ附加稅額及地租附加稅額ノ算定ニ關シテハ内務大臣及大藏大臣ノ定ムル所ニ依ル
北海道府縣以外ノ公共團體ニ對スル第三項ノ許可ノ職權ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得

○國稅徵收法

(明治三十年三月二十六日法律第二十一號)

改正

- 明治三十五年三月二十八日法律第三十六號
- 明治三十八年三月九日法律第四十六號
- 明治四十四年三月二十五日法律第三十七號
- 大正三年三月二十七日法律第十二號
- 昭和六年三月二十八日法律第十六號
- 昭和十年三月二十八日法律第十五號
- 昭和十一年五月二十三日法律第二號
- 昭和十一年六月三日法律第四十二號

第一章 總則

第一條 國稅ノ徵收ハ關稅其ノ他別ニ法律ヲ以テ定ムルモノノ外總テ此ノ法律ニ依ル

第二條 國稅ノ徵收ハ總テ他ノ公課及債權ニ先ツモノトス

第三條 納稅人ノ財産上ニ質權又ハ抵當權ヲ有スル者其ノ質權又ハ抵當權ノ設定カ國稅ノ納期限ヨリ一箇年前ニ在ルコトヲ公正證書ヲ以テ證明シタルトキハ該物件ノ價格ヲ限トシ其ノ債權ニ對シテ國稅ヲ先取セサルモノトス

第四條ノ一 納稅人左ノ場合ニ該當スルトキハ未タ納期ノ到ラサルモ既ニ納稅義務ノ確定シタル國稅ハ總テ之ヲ徵收スルコトヲ得(明治三十五年法律第三十六號改正)

一 國稅ノ滯納ニ因リ滯納處分ヲ受クルトキ

- 二 縣府稅其ノ他ノ公課ノ滯納ニ因リ滯納處分ヲ受クルトキ
 - 三 強制執行ヲ受クルトキ
 - 四 破産ノ宣告ヲ受ケタルトキ
 - 五 競賣ノ開始アリタルトキ
 - 六 法人カ解散ヲ爲シタルトキ
 - 七 納稅人脱稅又ハ逋稅ヲ謀ルノ所爲アリト認ムルトキ
- 第四條ノ二** 前條第二號乃至第五號ノ場合ニ於テ徵收スヘキ國稅ハ府縣稅其ノ他ノ公課ノ督促手數料、延滞金及滯納處分費、強別執行費用、破産手續上ノ費用又ハ競賣費用ニ先チテ之ヲ徵收セス
- (明治三十五年法律第三十六號及明治四十四年法律第三十七號改正)
- 督促手數料、延滞金及滯納處分費ハ國稅其ノ他總テノ公課及債權ニ先チテ之ヲ徵收ス但シ第四條ノ一第二號乃至第五號ノ場合ニ於ケル府縣稅其ノ他ノ公課ノ督促手數料、延滞金及滯納處分費、強制執行費用、破産手續上ノ費用又ハ競賣費用ニ先チテ之ヲ徵收セス(同上)
- 第四條ノ三** 相續開始ノ場合ニ於テハ國稅、督促手數料、延滞金及滯納處分費ハ相續財團又ハ相續人ヨリ之ヲ徵收ス但シ戶主ノ死亡以外ノ原因ニ依リ家督相續ノ開始アリタルトキハ被相續人ヨリモ之ヲ徵收スルコトヲ得(同上)
- 國籍喪失ニ因ル相續人又ハ限定承認ヲ爲シタル相續人ハ相續ニ因リテ得タル財産ヲ限度トシテ國稅、督促手數料、延滞金及滯納處分費ヲ納付スルノ義務ヲ有ス(同上)

- 第四條ノ四** 共有物、共同事業又ハ共同事業ニ因リ生シタル物件ニ係ル國稅、督促手數料、延滞金及滯納處分費ハ納稅者連帶シテ其ノ義務ヲ負擔ス(同上)
- 第四條ノ五** 同年ノ所得稅、地租、營業收益稅、資本利子稅及同酒造年度ノ酒造稅ニシテ既納ノ稅金過納ナルトキハ爾後ノ納期ニ於テ徵收スヘキ同一稅目ノ稅金ニ充ツルコトヲ得(明治三十五年法律第三十六號及昭和六年法律第十
- 第四條ノ六** 納稅義務者納稅地ニ住所又ハ居所ヲ有セサルトキハ納稅ニ關スル事項ヲ處理セシムル爲納稅管理人ヲ定メ政府ニ申告スヘシ其ノ納稅管理人ヲ變更シタルトキ亦同シ但シ他ノ法令ニ特別ノ規定ナルモノハ各其ノ法令ニ依ル(明治三十五年法律第三十六號改正)
- 第四條ノ七** 納稅ノ告知、督促及滯納處分ニ關スル書類ハ名宛人ノ住所又ハ居所ニ送達ス名宛人カ相續財團ニシテ財産管理人アルトキハ財産管理人ノ住所又ハ居所ニ送達ス(同上)
- 納稅管理人アルトキハ納稅ノ告知及督促ニ關スル書類ニ限リ其ノ住所又ハ居所ニ送達ス(同上)
- 第四條ノ八** 書類ノ送達ヲ受クヘキ者其ノ住所又ハ居所ニ於テ書類ノ受取ヲ拒ミタルトキ又ハ帝國内ニ住所、居所アラサルトキ若ハ其ノ住所、居所共ニ不明ナルトキハ書類ノ要旨ヲ公告シ公告ノ初日ヨリ七日ヲ經過シタルトキハ書類ノ送達アリタルモノト看做ス(明治三十五年法律第三十六號及明治三十八年法律第四十六號改正)
- 第二章 徵收**
- 第五條** 市町村ハ其ノ市町村内ノ地租及勅令ヲ以テ命シタル國稅ヲ徵收シ其ノ稅金ヲ國庫ニ送付スルノ責任アルモノトス

政府ハ前項徵收ノ費用トシテ勅令ノ定ムル所ニ依リ市町村ニ交付金ヲ交付ス(明治四十四年法律第三十七條及昭和十一年法律第二號改正)

第六條 國稅ヲ徵收セムトスルトキハ收稅官吏又ハ市町村ハ納稅人ニ對シ其ノ納金額、納期日及納付場所ヲ指定シ之ヲ告知スヘシ

第七條 納稅人非常ノ災害ニ罹リ政府ニ於テ其ノ被害調査ノ爲時日ヲ要スルトキハ其ノ間稅金ノ徵收ヲ爲ササルコトアルヘシ

第八條 市町村ハ避クヘカラサル災害ニ因リ既收ノ稅金ヲ失ヒタルトキハ其ノ事實ヲ證明シ大藏大臣ニ稅金送付ノ責任ノ免除ヲ請フコトヲ得

前項ノ申出アリタルトキハ大藏大臣ハ其ノ事實ヲ審査シ其ノ免除ヲ爲スコトヲ得

第九條 國稅ノ納期限ヲ過キ其ノ稅金ノ完納セサル者アルトキハ收稅官吏ハ期限ヲ指定シ之ヲ督促スヘシ但シ第四條ノ一ニ依リ國稅ノ徵收ヲ爲ストキハ此ノ限ニ在ラス(明治三十五年法律第三十六條改正)

前項ニ依リ督促ヲ爲シタル場合ニ於テハ勅令ノ定ムル所ニ依リ督促手数料、延滞金ヲ徵收ス(明治三十五年法律第三十六條及明治十四年法律第三十七號改正)

第三章 滯納處分

第十條 左ノ場合ニ於テハ收稅官吏ハ納稅者ノ財產ヲ差押フヘシ(明治三十五年法律第三十六條改正)

一 納稅者督促ヲ受ケ其ノ指定ノ期限マテニ督促手数料、延滞金及稅金ヲ完納セサルトキ(明治四十四年法律第三十七號改正)

二 第四條ノ一第一號及第七號ノ場合ニ於テ納稅者納期ノ到ラサル國稅納付ノ告知ヲ受ケ稅金ヲ完納セサルトキ

第十一條 收稅官吏滯納處分ノ爲財產ノ差押ヲ爲ストキハ其ノ命令ヲ受ケタル官吏タルノ證據ヲ示スヘシ

第十二條 差押フヘキ財產ノ價格ニシテ督促手数料、延滞金、滯納處分費及第三條ニ依リ控除スヘキ債務額ニ充テ殘餘ヲ得ル見込ナキトキハ滯納處分ノ執行ヲ止ム(明治三十五年法律第三十六條及明治四十四年法律第三十七號改正)

第十三條 收稅官吏滯納者ノ財產ヲ差押フルニ當リ質權ノ設定セラレタル物件アルトキハ質權設定時期ノ如何ニ拘ラス其ノ質權者ハ質物ヲ收稅官吏ニ引渡スヘシ

第十四條 收稅官吏財產ノ差押ヲ爲シタル場合ニ於テ第三者其ノ財產ニ就キ所有權ヲ主張シ取戻ヲ請求セムトスルトキハ賣却執行ノ五日前マテニ所有者タルノ證據ヲ具ヘテ收稅官吏ニ申出スヘシ

第十五條 滯納處分ヲ執行スルニ當リ滯納者財產ノ差押ヲ免ルル爲故意ニ其ノ財產ヲ讓渡シ讓受人其ノ情ヲ知り讓受ケタル場合ニ於テ政府ハ其ノ行爲ノ取消ヲ求ムルコトヲ得

第十六條 左ニ掲クル物件ハ之ヲ差押フルコトヲ得

- 一 滯納者及其ノ同居ノ家族ノ生活上缺クヘカラサル衣服、寢具、家具及厨具
- 二 滯納者及其ノ同居家族ニ必要ナル三箇月間ノ食料及薪炭(昭和十年法律第十五號改正)
- 三 實印其ノ他職業ニ必要ナル印
- 四 祭祀禮拜ニ必要ナリト認ムル物及石碑、墓地

- 五 系譜其ノ他滞納者ノ家ニ必要ナル日記書付類
 - 六 職務上必要ナル制服、祭服、法衣
 - 七 勳章其ノ他名譽ノ章票
 - 八 滞納者及其ノ同居家族ノ修學上必要ナル書籍器具
 - 九 發明又ハ著作ニ係ル物ニシテ未タ公ニセサルモノ
- 退職積立金及退職手當法ニ依ル退職手當積立金及準備積立金ニ付亦前項ニ同シ(昭和十二年法律第四十二號追加)
- 第十七條** 左ニ掲クル物件ハ他ニ督促手數料、延滞金、滞納處分費及税金ヲ償フニ足ルヘキ物件ヲ提供スルトキハ滞納者ノ選擇ニ依リ差押ヲ爲ササルモノトス(明治三十五年法律第三十六號及明治四十四年法律第三十七號改正)
- 一 農業ニ必要ナル器具、種子、肥料及牛馬並其ノ飼料
 - 二 職業ニ必要ナル器具及材料
- 第十八條** 差押ノ效力ハ差押物ヨリ生スル天然及法定ノ果實ニ及フモノトス
- 第十九條** 滞納處分ハ裁判上ノ假差押又ハ假處分ノ爲ニ其ノ執行ヲ妨ケラルルコトナシ(明治三十五年法律第三十六號改正)
- 第二十條** 收稅官吏財産ノ差押ヲ爲ストキハ滞納者ノ家屋、倉庫及筐匣ヲ搜索シ又ハ閉鎖シタル戸扉、筐匣ヲ開カシメ若ハ自ラ之ヲ開クコトヲ得滞納者ノ財産ヲ占有スル第三者其ノ財産ノ引渡ヲ拒ミタルトキ亦同シ
- 第三者ノ家屋、倉庫及筐匣ニ滞納者ノ財産ヲ藏匿スルノ疑アルトキハ收稅官吏ハ前項ニ準シ處分

スルコトヲ得

- 前二項ニ依リ家屋、倉庫又ハ筐匣ヲ搜索スルハ日出ヨリ日没マテニ限ル
- 第二十一條** 收稅官吏前條ノ處分ヲ爲ストキハ滞納者若ハ前條ニ掲ケタル第三者又ハ其ノ家族雇人ヲシテ立會ハシムヘシ若シ立會フヘキ者不在ナルトキ又ハ立會ニ應セサルトキハ成丁者二人以上又ハ市町村吏員市制町村制ヲ施行セサル地ニ在リテハ區長及其ノ附屬吏員若ハ警察官吏ヲ證人トシテ立會ハシムヘシ
- 第二十二條** 動産及有價證券ノ差押ハ收稅官吏占有シテ之ヲ爲ス但シ差押物件運搬ヲ爲スニ困難ナルトキハ市町村長、滞納者又ハ第三者ヲシテ保管ヲ爲サシムルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ封印其ノ他ノ方法ヲ以テ差押ヲ明白ニスヘシ(明治三十五年法律第三十六號改正)
- 差押物件ノ保管證ニ關シテハ印紙稅ヲ納ムルコトヲ要セス(明治三十八年法律第四十六號追加)
- 第二十三條ノ一** 債權ノ差押ヲ爲ストキハ收稅官吏ハ之ヲ債務者ニ通知スヘシ
- 前項ノ通知ヲ爲シタルトキハ政府ハ督促手數料、延滞金、滞納處分費及税金額ヲ限度トシテ債權者ニ代位ス(明治三十五年法律第三十六號及明治四十四年法律第三十七號改正)
- 第二十三條ノ二** 債權及所有權以外ノ財産權ノ差押ヲ爲ストキハ收稅官吏ハ之ヲ其ノ權利者ニ通知スヘシ(明治三十八年法律第四十六號追加)
- 前項ノ財産權ニシテ其ノ移轉ニ付登記又ハ登録ヲ要スルモノニ在リテハ差押ノ登記又ハ登録ヲ關係官廳ニ囑託スヘシ其ノ抹消又ハ變更ニ付テモ亦同シ(同上)
- 第二十三條ノ三** 不動産又ハ船舶ヲ差押ヘタルトキハ收稅官吏ハ差押ノ登記ヲ所轄登記所ニ囑託ス

ヘシ其ノ抹消又ハ變更ノ登記ニ付テモ亦同シ(明治三十五年法律第三十六號追加
明治三十八年法律第四十六號改正)
差押ノ爲不動産ヲ分割又ハ區分シタルトキハ收稅官吏ハ分割又ハ區分ノ登記ヲ所轄登記所ニ囑託
スヘシ其ノ合併又ハ變更ノ登記ニ付テモ亦同シ(同上)

第二十三條ノ四 差押ノ解除ニ關シテハ登録稅ヲ納ムルコトヲ要セス(明治三十八年法律第四十六號追加)

第二十四條 差押ヘタル動産、有價證券、不動産及第二十三條ノ一ニ依リ收稅官吏カ第三債務者ヨ
リ給付ヲ受ケタル物件ハ通貨ヲ除クノ外公賣ニ付ス公賣ノ手續ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(明治三十五年
法律第三十六
號改正)

公賣ニ付スルモ買受人ナキカ又ハ其ノ價格見積價額ニ達セサルトキハ其ノ見積價格ヲ以テ政府ニ
買上クルコトヲ得(同上)

債權及所有權以外ノ財産權ニ付テハ前二項ノ規定ヲ準用ス(明治三十八年法律
第四十六號追加)

第二十五條 見積價格僅少ニシテ其ノ公賣費用ヲ償フニ足ラサル物件ハ隨意契約ヲ以テ之ヲ賣却ス
ルコトヲ得

第二十六條 滯納者及賣却ヲ爲ス地方ノ稅務ニ關スル官吏、公吏、雇員ハ直接ト間接トヲ問ハス其
ノ賣却物件ヲ買受クルコトヲ得ス

第二十七條 滯納處分費ハ財産ノ差押、保管、運搬、公賣ニ關スル費用及通信費トス(明治三十五年法律
第三十六號改正)

第二十八條 物件ノ賣却代金、差押ヘタル通貨及第二十三條ノ一ニ依リ第三債務者ヨリ給付ヲ受ケ
タル通貨ハ督促手数料、延滞金、滯納處分費及税金ニ充テ尙殘餘アルトキハ之ヲ滯納者ニ交付ス

(明治三十五年法律第三十六號及明
治三十四年法律第三十七號改正)

賣却シタル物件質權、抵當權ノ目的物タルトキハ其ノ代金ヨリ先ツ督促手数料、延滞金、滯納處
分費及税金ヲ控除シ次ニ其ノ債務額ニ充ツルマテ尙殘餘アルトキハ之ヲ滯納者
ニ交付ス但シ第三條ニ掲ケタル質權、抵當權ノ目的物タル物件ニ關シテハ其ノ代金ヨリ先ツ督促手
數料、延滞金、滯納處分費ヲ徵シ次ニ其ノ債務額ニ充ツルマテ尙殘餘アルトキハ之ヲ滯納者ニ交付シ次ニ税金ヲ控除
シ尙殘餘アルトキハ之ヲ滯納者ニ交付ス(同上)

賣却シタル物件抵當證券ヲ發行シタル抵當權ノ目的物ニシテ第三條ノ證明ヲ爲スヘキ抵當證券所
持人分明ナラサル場合ニ於テ其ノ代金ヨリ督促手数料、延滞金及滯納處分費ヲ徵シタル殘額カ債
權者ニ交付スヘキ債務額及徵收スヘキ税金ニ充タサルトキハ抵當證券所持人ニ交付スヘキ金額ハ
之ヲ保管ス此ノ場合ニ於テ債權ノ辨濟期限後四月ヲ過クルモ尙其ノ證明ヲ爲ササルトキハ其ノ保
管シタル金額ヲ税金ニ充テ尙殘餘アルトキハ之ヲ抵當證券所持人ニ交付ス物件ノ賣却後二年內ニ
其ノ證明ヲ爲ササルトキ亦同シ(昭和六年法律第十六號追加)

第二十九條 會社ニ對シ滯納處分ヲ執行スル場合ニ於テ會社財産ヲ以テ督促手数料、延滞金、滯納
處分費及税金ニ充テ仍不足アルトキハ無限責任社員ニ就キ之ヲ處分スルコトヲ得(明治三十四年法律
第三十七號改正)

第三十條 此ノ法律ニ依リ債權者又ハ滯納者ニ交付スヘキ金錢ハ之ヲ供託スルコトヲ得(明治三十五年
法律第三十六
號改正)

第三十一條 滯納處分ヲ結了シ若ハ之ヲ中止シタルトキハ納稅義務及督促手数料、延滞金、滯納處
分費及税金ニ充テ仍不足アルトキハ無限責任社員ニ就キ之ヲ處分スルコトヲ得(明治三十四年法律
第三十七號改正)

分費納付ノ義務ハ消滅ス(明治三十五年法律第三十六號及明治三十四年法律第三十七號改正)

第四章 罰則

第三十二條 滯納者又ハ滯納者ノ財産ヲ占有スル者其ノ財産ヲ藏匿脱漏シ又ハ虚偽ノ契約ヲ爲シタルトキハ一月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス

差押物件ノ保管者其ノ保管ニ係ル物件ヲ藏匿脱漏費消若ハ故意ニ毀損シタルトキ亦同シ
情ヲ知テ前二項ノ所爲ヲ幫助シ又ハ虚偽ノ契約ヲ承諾シタル者ハ各本刑ニ一等ヲ減ス
前各項ノ場合ニ於テ刑法ニ罰條アルモノハ本條ヲ適用セス

第五章 附則

第三十三條 此ノ法律ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

沖繩縣及東京府管内小笠原島、伊豆七島ニハ當分ニテ施行セス(註 沖繩縣ハ明治三十二年法律第五十九號沖繩縣土地整理法第二十三條、明治三十五年勅令第二百七十五號及明治三十六年勅令第二百七十八號ヲ以テ本法ヲ施行セラル)

市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ本法中市町村ニ關スル條項ヲ適用スヘキ公共團體ハ勅令ヲ以テ之ヲ指定ス

北海道水産物營業人組合ハ本法ニ於テ市町村ニ準ス(註 明治三十四年法律第三號北)

第三十四條 明治二十二年法律第九號國稅徵收法、同年法律第三十二號國稅滯納處分法及同二十三年法律第四號ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

附則 (明治四十四年法律第三十七號)

本法ハ明治四十四年度分ヨリ之ヲ適用ス

附則 (大正三年法律第十二號)

本法ハ大正三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則 (昭和六年法律第十六號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(註 昭和六年勅令第八十七號ヲ以テ)

附則 (昭和十年法律第十五號) (註 昭和十年法律第十五號ハ民事訴訟法中改正ニシテ同法律附則ヲ以テ國稅徵收法中ノ改正アリタルモノナリ)

本法ノ施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(昭和十年五月一日ヨリ施行)
本法施行前ニ開始シタル強制執行ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル但シ第五百七十條ノ二ノ規定ハ本法施行前ニ開始シタル強制執行ニ付テモ亦之ヲ適用ス

國稅徵收法第十六條第二號中「一箇月」ヲ「三箇月」ニ改ム
附則第二項本文ノ規定ハ前項ノ規定ヲ適用スル場合ニ關シ之ヲ準用ス

附則 (昭和十一年法律第二號)

本法ハ昭和十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則 (昭和十一年法律第四十二號) (註 昭和十一年法律第四十二號ハ退職積立金及退職手當法ニシテ同法律附則ヲ以テ國稅徵收法中ノ改正アリタルモノナリ)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(退職積立金及退職手當法附則第三十八條) (昭和十二年一月一日ヨリ施行)

國稅徵收法第十六條ニ左ノ一項ヲ加フ(同法附則第四十四條)
退職積立金及退職手當法ニ依ル退職手當積立金及準備積立金ニ付亦前項ニ同シ

國稅徵收法

定 A
487

昭和十三年二月

現
行
租
稅
法
規



13. 2. 5

大藏省主稅局

687

目次

	發令年月	法令番號	頁
一 臨時租稅增徴法	昭和一二、三	三	一
一 北支事件特別稅法	昭和一二、八	六六	一一
一 所得稅法	大正九、七	一一	一一
一 所得稅法ノ施行ニ關スル法律	大正九、七	一一	一一
一 地租法	昭和六、三	一一	一一
一 土地貸賃價格改訂法	昭和一一、六	三六	七三
一 營業收益稅法	大正一五、三	一一	八一
一 營業收益稅法中改正法律	昭和一一、四	四三	八八
一 臨時利得稅法	昭和一一、三	二〇	八九
一 資本金利子稅法	大正一五、三	一一	九七
一 法人資本稅法	昭和一二、三	一〇	一〇一
一 相續稅法	明治三八、一	一〇	一〇一
一 礦業法	明治三八、三	四	一一
一 砂鐵區稅法	明治四三、三	九	一一

目次

目次

一 登録税法	明治二九、三	法律	二七〇・二七二
一 外貨債特別税法	昭和一二、三	法律	一六一
一 有價証券移轉税法	昭和一二、三	法律	一六一
一 兌換銀行券條例	明治一七、五	法律	一八一
一 酒造税法	明治二九、三	法律	二八〇・二七三
一 沖繩縣及東京府小笠原島伊豆七島ニ於ケル酒造税ニ關スル法律	明治四一、三	法律	二四〇・一八五
一 樺太酒類出港税法	大正元、八	法律	一〇六
一 酒造組合法	明治三八、一	法律	一八八
一 酒母、醪及麴取締法	明治三八、一	法律	一八八
一 酒精及酒精含有飲料税法	明治三四、三	法律	一八八
一 酒精造石稅徵收猶豫及免除ニ關スル法律	明治四三、三	法律	一八八
一 酒精、酒類其ノ他酒精ヲ含有スル飲料輸出下戻金ニ關スル法律	明治三四、三	法律	一〇〇
一 工業用酒精酒類其ノ他酒精含有飲料戻税法	明治三九、四	法律	一〇六
一 麥酒税法	明治三四、三	法律	一〇九
一 清凉飲料税法	大正一五、三	法律	一六〇・二一五

一 砂糖消費税法	明治三四、三	法律	一三〇・二一一
一 煉乳原料砂糖戻税法	明治四一、三	法律	二七〇・二七二
一 輸出菓子糖果原料砂糖戻税法	明治四二、三	法律	一八〇・二一〇
一 砂糖消費稅織物消費稅等ノ徵收ニ關スル法律	明治四四、三	法律	二一〇
一 織物消費税法	明治四三、三	法律	二一〇
一 揮發油税法	昭和一二、三	法律	七〇・二二三
一 取引所税法	大正三、三	法律	六〇・二四一
一 印紙税法	明治三二、三	法律	二二〇・二四七
一 骨牌税法	明治三五、四	法律	二四〇・二五三
一 狩獵法	大正七、四	法律	三二〇・二六七
一 内地、臺灣又ハ樺太ヨリ朝鮮ニ移出スル物品ノ内國稅免除ニ關スル法律	大正九、八	法律	三二〇・二六九
一 朝鮮、臺灣又ハ南洋群島ヨリ移出シタル物品ノ内地又ハ樺太ニ於ケル取締ニ關スル法律	大正九、八	法律	三二〇・二六九
一 間接國稅犯則者處分法	明治三三、三	法律	六七〇・二七一
一 國稅徵收法	明治三〇、三	法律	二二〇・二七一

目次

臨時租稅增徴

○臨時租稅增徴法

(昭和十二年三月三十日法律第三號)

第一條 當分ノ内本法ニ依リ所得稅、法人ノ營業收益稅、資本利子稅、相續稅、礦產稅、酒稅、砂糖消費稅、取引所稅及臨時利得稅ヲ增徴シ金礦及銀礦ニ特別礦產稅ヲ課ス

第二條 所得稅中法人ノ普通所得及清算所得ニ對スル所得稅ニ付テハ所得稅法第二十一條ニ規定スル稅率百分ノ五ヲ百分ノ十、百分ノ十ヲ百分ノ二十トシタル場合ノ差增額ニ相當スル稅額ヲ增徴ス

第三條 所得稅法第四條ノ規定ニ依リ法人ノ普通所得ヲ計算スル場合ニ於テハ國債ノ利子額中其ノ國債ヲ所有シタル期間ノ利子額百分ノ七十二相當スル金額ヲ申請ニ依リ其ノ普通所得ヨリ控除ス

前項ノ申請ハ所得稅法第二十四條ノ申告ト同時ニ控除ニ關スル明細書ヲ添附シテ之ヲ爲スベシ
前二項ノ規定ハ法人ノ清算所得ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第四條 所得稅中同族會社ノ普通所得ニ對スル所得稅ニ加算スル稅額ニ付テハ所得稅法第二十一條ノ二ノ規定ニ依リ算出シタル稅額ノ百分ノ五十二相當スル稅額ヲ增徴ス

前項ノ規定ニ依ル增徴稅額ハ普通所得ノ百分ノ四十二相當スル金額ヨリ普通所得及超過所得ニ對スル所得稅額(所得稅法第二十一條ノ二ノ規定ニ依リ普通所得ニ對スル所得稅ニ加算スル稅額ヲ含ム)ト第二條ノ規定ニ依ル增徴稅額トノ合計金額ヲ控除シタル殘額ヲ超ユルコトヲ得ズ

第五條 所得稅中第二種ノ所得ニ對スル所得稅ニ付テハ所得稅法第二十二條第一項ノ規定ニ拘ラズ左ノ稅率ニ依リ之ヲ賦課ス

- 甲 國債ノ利子 百分ノ二
- 國債以外ノ公債ノ利子 百分ノ六
- 其ノ他 百分ノ七・五

乙

第六條 所得稅中第三種ノ所得ニ對スル所得稅ニ付テハ所得金額ノ階級ニ從ヒ左ノ割合ノ稅額ヲ增徴ス

- 所得金額二千圓以下ナル所得 所得稅額ノ百分ノ二十
- 同三千圓以下ナル所得 所得稅額ノ百分ノ三十
- 同七千圓以下ナル所得 所得稅額ノ百分ノ三十五
- 同一萬五千圓以下ナル所得 所得稅額ノ百分ノ四十
- 同十萬圓以下ナル所得 所得稅額ノ百分ノ四十五
- 同五十萬圓以下ナル所得 所得稅額ノ百分ノ五十五
- 同百萬圓以下ナル所得 所得稅額ノ百分ノ六十
- 同百萬圓ヲ超ユル所得 所得稅額ノ百分ノ七十
- 所得金額ガ二千圓ヲ超エ三千圓以下ナル所得ニ付テハ之ニ對スル所得稅額及增徴稅額ノ合計金額

ヨリ所得金額二千圓ノ所得ニ對スル所得稅額及增徴稅額ノ合計金額ヲ控除シタル殘額ガ所得金額中二千圓ヲ超ユル金額ヲ超過スルトキハ該超過額ニ相當スル金額ヲ其ノ增徴稅額ヨリ控除ス前項ノ規定ハ所得金額ガ三千圓ヲ超エ七千圓以下ナル所得、同七千圓ヲ超エ一萬五千圓以下ナル所得、同一萬五千圓ヲ超エ十萬圓以下ナル所得、同十萬圓ヲ超エ五十萬圓以下ナル所得、同五十萬圓ヲ超エ百萬圓以下ナル所得及同百萬圓ヲ超ユル所得ノ各同様ノ場合ニ付之ヲ準用ス山林ノ所得ト山林以外ノ所得トハ之ヲ區分シ各別ニ前三項ノ規定ヲ適用ス戸主及其ノ同居家族ノ所得ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ付前四項ノ規定ヲ適用ス戸主ト別居スル二人以上ノ同居家族ノ所得ニ付亦同ジ

第七條 法人ヨリ受タル利益若ハ利息ノ配當又ハ剩餘金ノ分配ニ付テハ所得稅法第十四條第一項第四號ノ規定ニ拘ラズ前年三月一日ヨリ其ノ年二月末日迄ノ收入金額（無記名株式ノ配當ニ付テハ支拂ヲ受ケタル金額）ヨリ其ノ十分ノ二ヲ控除シタル金額ニ依リ第三種ノ所得ヲ算出ス

第八條 法人ノ營業收益稅ニ付テハ營業收益稅法第十條ニ規定スル稅率百分ノ三・四ヲ百分ノ四トシタル場合ノ差増額ニ相當スル稅額ヲ增徴ス

第九條 資本金利子稅ニ付テハ資本金利子稅法第六條ニ規定スル稅率百分ノ二ヲ百分ノ四トシタル場合ノ差増額ニ相當スル稅額ヲ增徴ス但シ貯蓄銀行ノ所有スル國債ノ利子ニ對スル資本金利子稅ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第十條 相續稅ニ付テハ課稅價格ノ階級ニ從ヒ左ノ割合ノ稅額ヲ增徴ス

- 課税價格一萬圓以下ナルトキ 相續税額ノ百分ノ二十
 - 同三萬圓以下ナルトキ 相續税額ノ百分ノ三十
 - 同五萬圓以下ナルトキ 相續税額ノ百分ノ五十
 - 同十萬圓以下ナルトキ 相續税額ノ百分ノ八十
 - 同十萬圓ヲ超ユルトキ 相續税額ノ百分ノ百
- 第六條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ付之ヲ準用ス
- 第十一條 相續税ヲ課スベキ相續財産ノ價額中不動産及不動産ノ上ニ存スル權利竝ニ信託財産タル不動産ノ元本ノ利益ヲ受クベキ權利ノ價額ノ合計ガ相續財産ノ價額ノ二分ノ一ヲ超ユルトキハ相續税法第十七條第一項但書ノ期間ハ之ヲ十年内トス
- 第十二條 礦産税ニ付テハ礦業法第八十五條ニ規定スル税率千分ノ五ヲ千分ノ六トシタル場合ノ差増額ニ相當スル税額ヲ増徴ス
- 第十三條 金銀及銀鍍ニハ礦産物ノ價格ノ千分ノ十三ノ税率ニ依リ特別礦産税ヲ課ス
礦業法中礦産税ニ關スル規定ハ第八十八條ノ規定ヲ除クノ外前項ノ特別礦産税ニ付之ヲ準用ス
- 第十四條 酒税中清酒、白酒、味淋及燒酎ノ造石税ハ酒造税法第四條ノ規定ニ拘ラズ左ノ税率ニ依ル
- 一 酒精分二十三度以下ノ清酒及白酒竝ニ酒精分三十度以下ノ味淋及燒酎
 - 一石ニ付 四十五圓但シ連續式蒸餾機ニ依リ製造シタル燒酎ニ付テハ一石ニ付二圓

ヲ加ヘタル金額

- 二 酒精分三十度ヲ超エ四十五度以下ノ燒酎
 - 一石ニ付 四十五圓ニ酒精分三十度ヲ超ユル一度毎ニ一圓七十錢ヲ加ヘタル金額但シ連續式蒸餾機ニ依リ製造シタルモノニ付テハ四十七圓ニ酒精分三十度ヲ超ユル一度毎ニ一圓八十錢ヲ加ヘタル金額
- 三 酒精分二十三度ヲ超ユル清酒及白酒、酒精分三十度ヲ超ユル味淋竝ニ酒精分四十五度ヲ超ユル燒酎
 - 一石ニ付 酒精分一度毎ニ二圓十五錢

第十五條 酒税中麥酒税ニ付テハ麥酒税法第三條ニ規定スル税率一石ニ付二十五圓ヲ三十五圓トシタル場合ノ差増額ニ相當スル税額ヲ増徴ス

第十六條 酒税中酒精及酒精ヲ含有スル飲料ノ造石税ニ付テハ酒精及酒精含有飲料税法第二條ニ規定スル税率中一圓八十錢ヲ二圓十五錢、四十二圓ヲ五十圓トシタル場合ノ差増額ニ相當スル税額ヲ増徴ス

第十七條 砂糖消費税ハ砂糖消費税法第三條ノ規定ニ拘ラズ左ノ税率ニ依ル

一 砂糖
第一種 砂糖色相和蘭標本第十一號未滿ノ砂糖

甲 樽入黒糖及樽入白下糖但シ分蜜シタルモノ、黒糖及白下糖以外ノ砂糖ニ加工シテ製造シタルモノ竝ニ全部又ハ一部ノ新式機械ニ依リ製造シタルモノヲ除ク

百斤ニ付 一圓

乙 其ノ他ノモノ

百斤ニ付 二圓七十錢

第二種 砂糖色相和蘭標本第二十二號未滿ノ砂糖

百斤ニ付 六圓五十錢

第三種 砂糖色相和蘭標本第二十二號以上ノ砂糖

百斤ニ付 八圓

第四種 氷砂糖、角砂糖、棒砂糖其ノ他類似ノモノ

百斤ニ付 十圓

二 糖蜜

第一種 氷砂糖ヲ製造スルトキニ生ズル糖蜜

甲 糖分ヲ蔗糖トシテ計算シタル重量全重量ノ百分ノ七十ヲ超エザルモノ

百斤ニ付 三圓五十錢

乙 其ノ他ノモノ

糖分ヲ蔗

糖トシテ

計算シタル重量百斤ニ付 八圓

第二種 其ノ他ノ糖蜜

甲 糖分ヲ蔗糖トシテ計算シタル重量全重量ノ百分ノ六十ヲ超エザルモノ

百斤ニ付 一圓

乙 其ノ他ノモノ

百斤ニ付 二圓七十錢

三 糖水 百斤ニ付 六圓五十錢

第十八條 取引所稅ニ付テハ左ノ各號ニ定ムル稅額ヲ增徴ス

一 取引所營業稅ニ付テハ取引所稅法第一條ニ規定スル稅率百分ノ十五ヲ百分ノ十六・五トシタル場合ノ差増額ニ相當スル稅額

二 第二種有價證券ノ賣買取引ニ對スル取引稅ニ付テハ取引所稅法第五條ニ規定スル稅率萬分ノ一・五ヲ萬分ノ二・七、萬分ノ二・五ヲ萬分ノ四・五トシタル場合ノ差増額ニ相當スル稅額

第十九條 臨時利得稅ニ付テハ臨時利得稅法第十四條ニ規定スル稅率百分ノ十ヲ百分ノ十五、百分ノ八ヲ百分ノ十トシタル場合ノ差増額ニ相當スル稅額ヲ增徴ス

第二十條 北海道、府縣、市町村其ノ他ノ公共團體ハ本法ニ依リ增徴スル稅額(第七條及第二十二條ノ規定ニ依リ增額ト爲ル部分ヲ含マズ)又ハ本法ニ依リ課スル特別鑛產稅ニ付附加稅ヲ課スル

コトヲ得ズ

附 則

第二十一條 本法ハ昭和十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第二十二條 左ノ法律ハ之ヲ廢止ス

一 明治三十八年法律第十九號

一 明治四十二年法律第七號

第二十三條 所得稅中第一種ノ所得稅ニ付テハ普通所得ニ對スル所得稅ハ本法施行後ニ終了スル事業年度分、清算所得ニ對スル所得稅ハ本法施行後ニ於ケル解散又ハ合併ニ因ル分ヨリ、第三種ノ所得稅ニ付テハ昭和十二年分ヨリ本法ヲ適用ス

第七條ノ規定ニ依リ第三種ノ所得ニ付新ニ納稅義務ヲ有スルニ至リタル者ハ昭和十二年四月十五日迄ニ其ノ所得金額ヲ申告スベシ

前項ノ場合ニ於テハ所得金額ノ申告ト同時ニ所得稅法第十六條又ハ第十六條ノ三ノ規定ニ依ル控除ヲ申請スルコトヲ得

第二十四條 法人ノ營業收益稅ニ付テハ本法施行後ニ終了スル事業年度分ヨリ本法ヲ適用ス

第二十五條 資本金子稅中乙種ノ資本金子稅ニ付テハ昭和十二年分ヨリ本法ヲ適用ス

第二十三條第二項ノ規定ハ乙種ノ資本金子稅ニ付テハ適用ス

第二十六條 本法施行前ニ開始シタル相續ニ付テハ本法ヲ適用セズ

第二十七條 礦產稅ニ付テハ昭和十二年分ヨリ本法ヲ適用ス

第二十八條 本法施行前ニ產出シタル金鑛及銀鑛ニハ本法ヲ適用セズ

第二十九條 沖繩縣ニ於テ製造シタル濁酒以外ノ酒類ヲ帝國内ノ他ノ地方へ移出スルトキハ大正十五年法律第十四號附則第三項ノ規定ニ拘ラズ其ノ造石稅ト第十四條ニ規定スル造石稅トノ差額ノ稅率ニ依リ出港稅ヲ課ス

第三十條 臨時利得稅ニ付テハ法人ノ臨時利得稅ハ本法施行後ニ終了スル事業年度分ヨリ、個人ノ臨時利得稅ハ昭和十二年分ヨリ本法ヲ適用ス

第三十一條 臨時利得稅法附則第二項中「昭和十二年十二月三十一日」ヲ「昭和十三年十二月三十一日」ニ、「昭和十二年分」ヲ「昭和十三年分」ニ改ム

第三十二條 大正九年法律第十二號第三條ノ二乃至第六條中「臺灣」ノ下ニ、「關東州」ヲ、第八條乃至第十條中「朝鮮」ノ下ニ、「臺灣又ハ樺太」ヲ加フ

北支事件特別稅

○北支事件特別税法

(昭和十二年八月十二日法律第六十六號)

- 第一條 北支事件特別税ハ之ヲ左ノ五種トス
 - 一 所得特別税
 - 二 臨時利得特別税
 - 三 利益配當特別税
 - 四 公債及社債利子特別税
 - 五 物品特別税
- 第二條 所得特別税ハ所得税ヲ納ムル者ニ之ヲ課ス
- 第三條 第一種所得税ヲ納ムル者ノ所得特別税ハ法人ノ本法施行後一年內ニ終了スル各事業年度ノ所得(清算所得ヲ除ク)ニ付之ヲ賦課シ其ノ所得ニ對スル第一種所得税額(臨時租税増徴法ニ依ル増徴税額ヲ含ム)ノ百分ノ十二相當スル金額ヲ以テ其ノ税額トス
- 第四條 第二種所得税ヲ納ムル者ノ所得特別税ハ本法施行後一年內ニ支拂ヲ受クル第二種所得(國債ノ利子ヲ除ク)ニ付之ヲ賦課シ其ノ所得ニ對スル第二種所得税額ノ百分ノ五ニ相當スル金額ヲ以テ其ノ税額トス
- 第五條 第三種所得税ヲ納ムル者ノ所得特別税ハ昭和十二年分第三種所得ニ付之ヲ賦課シ其ノ所得ニ對スル第三種所得税額(臨時租税増徴法ニ依ル増徴税額ヲ含ム)ノ百分ノ七・五ニ相當スル金額

ヲ以テ其ノ税額トス

第六條 第一種所得稅ヲ納ムル者ノ所得特別稅ハ事業年度毎ニ之ヲ徵收ス

第二種所得稅ヲ納ムル者ノ所得特別稅ハ第二種所得金額支拂ノ際支拂者ニ於テ徵收シ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ納ムベシ

第三種所得稅ヲ納ムル者ノ所得特別稅ハ其ノ税額ヲ三分シ左ノ三期ニ於テ之ヲ徵收ス

第一期 昭和十二年十月一日ヨリ三十一日限

第二期 昭和十三年一月一日ヨリ三十一日限

第三期 昭和十三年三月一日ヨリ三十一日限

第七條 臨時利得特別稅ハ臨時利得稅ヲ納ムル者ニ之ヲ課ス

第八條 法人ノ臨時利得特別稅ハ本法施行後一年內ニ終了スル各事業年度ノ利得ニ付之ヲ賦課シ其ノ利得ニ對スル臨時利得稅額(臨時利得稅增徴法ニ依ル増徴稅額ヲ含ム)ノ百分ノ十五ニ相當スル金額ヲ以テ其ノ税額トス

第九條 個人ノ臨時利得特別稅ハ昭和十二年分利得ニ付之ヲ賦課シ其ノ利得ニ對スル臨時利得稅額(臨時利得稅增徴法ニ依ル増徴稅額ヲ含ム)ノ百分ノ十五ニ相當スル金額ヲ以テ其ノ税額トス

第十條 法人ノ臨時利得特別稅ハ事業年度毎ニ之ヲ徵收ス

個人ノ臨時利得特別稅ハ其ノ税額ヲ三分シ左ノ三期ニ於テ之ヲ徵收ス

第一期 昭和十二年十月一日ヨリ三十一日限

第二期 昭和十三年一月一日ヨリ三十一日限

第三期 昭和十三年三月一日ヨリ三十一日限

第十一條 利益配當特別稅ハ本法施行地ニ本店ヲ有スル法人ヨリ利益ノ配當ヲ受クル者ニ之ヲ課ス

所得稅法其ノ他ノ法律ニ依リ第二種所得稅ヲ課セラレザル者ニハ利益配當特別稅ヲ課セズ

第十二條 利益配當特別稅ハ本法施行後一年內ニ前條ノ法人ヨリ支拂ヲ受クル利益ノ配當ニ付之ヲ賦課シ配當金中配當率年七分ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユル金額ノ百分ノ十二ニ相當スル金額ヲ以テ其ノ税額トス

第十三條 利益配當特別稅ハ配當金支拂ノ際支拂者ニ於テ徵收シ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ納ムベシ

第十四條 公債及社債利子特別稅ハ本法施行地ニ於テ公債又ハ社債ノ利子ノ支拂ヲ受クル者ニ之ヲ課ス

所得稅法其ノ他ノ法律ニ依リ第二種所得稅ヲ課セラレザル者ニハ公債及社債利子特別稅ヲ課セズ

第十五條 公債及社債利子特別稅ハ本法施行後一年內ニ支拂ヲ受クル公債又ハ社債(外貨債特別稅法第一條第二項ニ規定スル外貨債ヲ除ク)ノ利子ニ付之ヲ賦課シ利子金額中國債ニ在リテハ利率年四分、國債以外ノ公債及社債ニ在リテハ利率年四分五厘ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユル金額ノ百分ノ十二ニ相當スル金額ヲ以テ其ノ税額トス

第十六條 公債及社債利子特別稅ハ利子金額支拂ノ際支拂者ニ於テ徵收シ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ

納ムベシ

第十七條 第六條第二項、第十三條又ハ前條ノ規定ニ依リ徵收スベキ税金ヲ徵收セザルトキ又ハ其ノ徵收シタル税金ヲ納付セザルトキハ國稅徵收ノ例ニ依リ之ヲ支拂者ヨリ徵收ス

第十八條 所得税法第十二條及大正九年法律第十二號第三條ノ規定ハ第一種所得稅ヲ納ムル者ノ所得特別稅及法人ノ臨時利得特別稅ニ付之ヲ準用ス

所得税法第七十二條及第七十三條ノ規定ハ第三種所得稅ヲ納ムル者ノ所得特別稅及個人ノ臨時利得特別稅ニ付之ヲ準用ス

第十九條 利益配當特別稅ヲ課セラルル利益ノ配當又ハ公債及社債利子特別稅ヲ課セラルル公債又ハ社債ノ利子ニ付所得稅(第一種所得稅ヲ除ク)又ハ資本利子稅ヲ課スル場合ニ於テハ其ノ利益配當金額又ハ利子金額ヨリ利益配當特別稅又ハ公債及社債利子特別稅相當額ヲ控除シタル殘額ヲ以テ其ノ配當金額又ハ利子金額ト看做ス

第二十條 物品特別稅ハ左ニ掲グル物品ニシテ命令ノ定ムルモノニ之ヲ課ス
第一種

- 一 貴石若ハ半貴石又ハ之ヲ用ヒタル製品
- 二 眞珠又ハ眞珠ヲ用ヒタル製品
- 三 貴金屬製品又ハ貴金屬ヲ用ヒタル製品
- 四 龜甲製品

五 珊瑚製品

第二種

- 一 寫眞機、寫眞引伸機、映寫機、同部分品及附屬品
- 二 寫眞用乾板、フィルム及感光紙
- 三 蓄音器及同部分品
- 四 蓄音器用レコード
- 五 樂器及同部分品

第二十一條 物品特別稅ノ稅率ハ價格百分ノ二十トス

前項ノ價格ハ第一種ノ物品ニ付テハ小賣業者ノ販賣價格、第二種ノ物品ニ付テハ製造場ヨリ移出スル時ノ價格トス但シ保稅地域ヨリ引取ラルル物品ニシテ引取人ヨリ税金ヲ徵收スルモノニ付テハ引取ノ際ニ於ケル價格トス

第二十二條 物品特別稅ハ第一種ノ物品ニ付テハ小賣業者ヨリ、第二種ノ物品ニ付テハ製造者ヨリ之ヲ徵收ス但シ保稅地域ヨリ引取ラルル物品ニ付テハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外引取人ヨリ之ヲ徵收ス

第二十三條 第一種ノ物品ノ小賣業者ハ毎月其ノ販賣シタル物品ニ付、第二種ノ物品ノ製造者ハ毎月其ノ製造場ヨリ移出シタル物品ニ付其ノ品名毎ニ數量及價格ヲ記載シタル申告書ヲ翌月十日迄ニ政府ニ提出スベシ

第一種又ハ第二種ノ物品ヲ保税地域ヨリ引取ル者ハ命令ヲ以テ定ムル場合ヲ除クノ外引取ノ際其ノ物品ニ付前項ニ準ズル申告書ヲ政府ニ提出スベシ
由申告ノ提出ナキトキ又ハ政府ニ於テ申告ヲ不相當ト認メタルトキハ政府ハ其ノ課税標準額ヲ決定ス

第二十四條 物品特別税ハ毎月分ヲ翌月末日迄ニ納付スベシ但シ第二十二條但書ノ場合ニ於テハ引取ノ際之ヲ納付スベシ

第二十五條 左ニ掲グル物品ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ物品特別税ヲ免除ス

一 輸出スルモノ

二 第一種又ハ第二種ノ物品ノ製造ノ用ニ供スルモノ

三 其ノ他命令ヲ以テ定ムル用途ニ供スルモノ

第二十六條 第一種ノ物品ノ小賣業ヲ營マントスル者又ハ第二種ノ物品ヲ製造セントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ政府ニ申告スベシ其ノ小賣業又ハ製造ヲ廢止セントスルトキ亦同ジ

第二十七條 第一種又ハ第二種ノ物品ノ製造者又ハ販賣者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ製造、貯藏又ハ販賣ニ關スル事實ヲ帳簿ニ記載スベシ

第一種ノ物品ノ小賣業者又ハ第二種ノ物品ノ製造者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ製造又ハ販賣ニ關シ必要ナル事項ヲ政府ニ申告スベシ

第二十八條 收税官吏ハ第一種又ハ第二種ノ物品ノ製造者又ハ販賣者ニ對シ質問ヲ爲シ又ハ左ニ掲

グル物件ニ付検査ヲ爲シ若ハ監督上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得

一 第一種又ハ第二種ノ物品ニシテ製造者又ハ販賣者ノ所持スルモノ

二 第一種又ハ第二種ノ物品ノ製造、貯藏又ハ販賣ニ關スル一切ノ帳簿書類

三 第一種又ハ第二種ノ物品ノ製造、貯藏又ハ販賣上必要ナル建築物、機械、器具、材料其ノ他ノ物件

第二十九條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ依リ所得特別税、臨時利得特別税、利益配當特別税又ハ公債及社債利子特別税ヲ逋脱シタル者ハ其ノ逋脱シタル税金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處シ直ニ其ノ税金ヲ徴收ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出デタル者ハ其ノ罪ヲ問ハズ

第三十條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ依リ物品特別税ヲ逋脱シ又ハ逋脱セントシタル者ハ其ノ逋脱シ又ハ逋脱セントシタル税金ノ五倍ニ相當スル罰金ニ處シ直ニ其ノ税金ヲ徴收ス但シ罰金額ガ二十圓ニ滿タザルトキハ之ヲ二十圓トス

第三十一條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ三百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

一 第二十三條ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ又ハ詐リタル者

第三十二條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

一 第二十七條第一項ノ規定ニ依ル帳簿ノ記載ヲ怠リ若ハ詐リ又ハ帳簿ヲ隱匿シタル者
二 第二十七條第二項ノ規定ニ依ル申告ヲ怠リ又ハ詐リタル者

三 第二十八條ノ規定ニ依ル收税官吏ノ質問ニ對シ答辯ヲ爲サズ若ハ虚偽ノ陳述ヲ爲シ又ハ其ノ職務ノ執行ヲ拒ミ、妨ゲ若ハ忌避シタル者

第三十三條 第二十九條又ハ第三十條ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ規定ヲ適用セズ

第三十四條 第一種又ハ第二種ノ物品ノ製造者又ハ販賣者ノ代理人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ガ其ノ業務ニ關シ本法中物品特別税ニ關スル規定ニ違反シタルトキハ其ノ製造者又ハ販賣者ヲ處罰ス

第三十五條 北海道、府縣、市町村其ノ他ノ公共團體ハ北支事件特別税ニ付附加税ヲ課スルコトヲ得ズ

第三十六條 本法ニ於テ保稅地域ト稱スルハ關稅法ノ定ムル所ニ依ル

附 則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

物品特別税ニ關スル規定ハ昭和十三年三月三十一日以前ニ於テ物品特別税ヲ課セラルベキ販賣、製造場ヨリノ移出又ハ保稅地域ヨリノ引取ヲ爲シタル第一種又ハ第二種ノ物品ニ付之ヲ適用ス

本法施行前ヨリ引續キ第一種ノ物品ノ小賣業ヲ營ム者又ハ第二種ノ物品ノ製造ヲ爲ス者本法施行後一月内ニ其ノ旨ヲ政府ニ申告スルトキハ本法施行ノ日ニ於テ本法ニ依リ申告シタルモノト看做ス

明治四十年法律第二十一號第一條第一項ニ左ノ一號ヲ加フ

十一 北支事件特別税

明治四十四年法律第四十五號第二條中「又ハ骨牌税法」ヲ「骨牌税法又ハ北支事件特別税法」ニ改メ同法第三條中「又ハ骨牌税法」ヲ「骨牌税法又ハ北支事件特別税法」ニ「又ハ骨牌」ヲ「骨牌又ハ北支事件特別税法第二十條ニ掲クル物品」ニ改ム

大正九年法律第五十一號中「骨牌」ノ下ニ「北支事件特別税法第二十條ニ掲クル第二種ノ物品」ヲ加フ

所
得
稅

○所得稅法

(大正九年七月三十一日法律第十一號)

改正

大正十一年四月十八日法律第四十五號
大正十二年三月二十七日法律第八號
大正十二年三月二十九日法律第二十九號
大正十二年四月六日法律第四十一號
大正十五年三月二十七日法律第八號
昭和九年六月二十八日法律第五十號

第一條 本法施行地ニ住所ヲ有シ又ハ一年以上居所ヲ有スル者ハ本法ニ依リ所得稅ヲ納ムル義務アルモノトス

第二條 第一條ノ規定ニ該當セサル者左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ所得ニ付テノミ所得稅ヲ納ムル義務アルモノトス(大正十二年法律第八號及同法律第二十九號改正)

- 一 本法施行地ニ資産又ハ營業ヲ有スルトキ
- 二 本法施行地ニ於テ公債、社債又ハ銀行預金ノ利子若ハ貸付信託ノ利益ノ支拂ヲ受クルトキ
- 三 本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ヨリ利益若ハ利息ノ配當、剩餘金ノ分配又ハ利益若ハ剩餘金ノ處分タル賞與若ハ賞與ノ性質ヲ有スル給與ヲ受クルトキ

第三條 所得稅ハ左ノ所得ニ付之ヲ賦課ス(大正十二年法律第八號、同法律第二十九號及大正十五年法律第八號改正)

第一種

甲 法人ノ普通所得

所得稅法

- 乙 法人ノ超過所得
- 丙 法人ノ清算所得

第二種

- 甲 本法施行地ニ於テ支拂ヲ受クル公債、社債若ハ銀行預金ノ利子又ハ貸付信託ノ利益
- 乙 第一條ノ規定ニ該當セサル者ノ本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ヨリ受クル利益若ハ利息ノ配當、剩餘金ノ分配又ハ利益若ハ剩餘金ノ處分タル賞與若ハ賞與ノ性質ヲ有スル給與

第三種

第二種ニ屬セサル個人ノ所得

第三條ノ二

信託財産ヲ有スルモノト看做シテ所得稅ヲ賦課ス但シ本法施行地ニ於テ信託利益ノ支拂ヲ爲ス貸付信託ニ付テハ此ノ限ニ在ラス(大正十一年法律第四十五號追加及大正十二年法律第二十九號改正)

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ受益者不特定ナルトキ又ハ未タ存在セサルトキハ受託者ヲ以テ受益者ト看做ス此ノ場合ニ於テハ受託者カ本法其ノ他ノ法令ニ依リ所得稅ヲ課セラレサル者ナルトキト雖尙所得稅ヲ賦課ス

受託者法人ナル場合ニ於テ前項ノ規定ニ依リ所得稅ヲ課スヘキ所得ハ之ヲ個人ノ所得ト看做ス

信託會社ノ所得計算ニ付テハ貸付信託ニ因ル收入及支出ハ其ノ總益金及總損金ヨリ之ヲ控除ス

(大正十二年法律第二十九號追加)

第三條ノ三

本法ニ於テ貸付信託ト稱スルハ信託會社ノ引受ケタル金錢信託ニシテ信託財産ノ運用方法ヲ預入又ハ貸付ノミニ限定シタルモノヲ謂フ(大正十五年法律第八號追加)

第四條

法人ノ普通所得ハ各事業年度ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シタル金額ニ依ル但シ保險會社ニ在リテハ各事業年度ノ利益金又ハ剩餘金ニ依ル(大正十五年法律第八號改正)

本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有セサル法人ノ普通所得ハ本法施行地ニ於ケル資産又ハ營業ニ付前項ノ規定ニ準シ之ヲ計算ス(同上)

法人カ事業年度中ニ解散シ又ハ合併ニ因リテ消滅シタル場合ニ於テハ其ノ事業年度ノ始ヨリ解散又ハ合併ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ一事業年度ト看做ス

第五條

法人ノ普通所得カ當該事業年度ノ資本金額ニ對シ年百分ノ十ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ヲ以テ法人ノ超過所得トス(大正十五年法律第八號改正)

第六條

法人ノ各事業年度ノ資本金額ハ各月末ニ於ケル拂込株式金額、出資金額又ハ基金及積立金額ノ月割平均ヲ以テ之ヲ計算ス(昭和九年法律第五十號第二項ヲ削ル)

第七條

本法施行地ニ本店若ハ主タル事務所ヲ有セサル法人又ハ所得稅ヲ課スヘキ所得ト其ノ他ノ所得トヲ有スル法人ノ各事業年度ノ資本金額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ計算ス

第八條

本法ニ於テ積立金ト稱スルハ積立金其ノ他名義ノ何タルヲ問ハス法人ノ普通所得中其ノ留保シタルモノヲ謂フ(大正十五年法律第八號改正)

第九條 削除(大正十五年法律第八號改正)

第十條 削除(大正十五年法律第八號改正)

第十一條 法人解散シタル場合ニ於テ其ノ殘餘財産ノ價額カ解散當時ノ拂込株式金額又ハ出資金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ヲ以テ法人ノ清算所得トス(大正十五年法律第八號改正)

法人合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ株主又ハ社員カ合併後存続スル法人若ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ヨリ合併ニ因リテ取得スル株式ノ拂込金額又ハ出資金額及金錢ノ總額カ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ合併當時ノ拂込株式金額又ハ出資金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ハ之ヲ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ清算所得ト看做ス(同上)

第十二條 合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ所得ニ付所得税ヲ納ムル義務アルモノトス

第十三條 第二種ノ所得ハ其ノ支拂ヲ受クヘキ金額ニ依ル

第十四條 第三種ノ所得ハ左ノ各號ノ規定ニ依リ之ヲ算出ス(大正十五年法律第八號改正)

一 營業ニ非サル貸金ノ利子並第二種ノ所得ニ屬セサル公債、社債及預金ノ利子ハ前年中ノ収入金額

二 山林ノ所得ハ前年中ノ總収入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額

三 賞與又ハ賞與ノ性質ヲ有スル給與ハ前年三月一日ヨリ其ノ年二月末日迄ノ収入金額

四 法人ヨリ受クル利益若ハ利息ノ配當又ハ剩餘金ノ分配ハ前年三月一日ヨリ其ノ年二月末日迄

ノ収入金額(無記名株式ノ配當ニ付テハ支拂ヲ受ケタル金額)ヨリ其ノ十分ノ四ヲ控除シタル金額

五 俸給、給料、歳費、年金、恩給、退隱料及此等ノ性質ヲ有スル給與ハ前年中ノ収入金額但シ前年一月一日ヨリ引續キ支給ヲ受ケタルニ非サルモノニ付テハ其ノ年ノ豫算年額

六 前各號以外ノ所得ハ前年中ノ總収入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額但シ前年一月一日ヨリ引續キ有シタルニ非サル資産、營業又ハ職業ノ所得ニ付テハ其ノ年ノ豫算年額
株式ノ消却ニ因リ支拂ヲ受クル金額又ハ退社ニ因リ持分ノ拂戻トシテ受クル金額カ其ノ株式ノ拂込金額又ハ出資金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ハ之ヲ法人ヨリ受クル利益ノ配當ト看做ス(同上)

第一項第一號、第二號及第四號ノ所得ニ付テハ被相続人ノ所得ハ之ヲ相続人ノ所得ト看做シ第六號ノ所得ニ付テハ相續シタル資産又ハ營業ハ相續人カ引續キ之ヲ有シタルモノト看做シテ其ノ所得ヲ計算ス(同上)

第十五條 前條ノ規定ニ依リ算出シタル所得總額一萬二千圓以下ナルトキハ其ノ所得中勤勞所得(前條第一項第三號及第五號ノ所得)ニ付左ノ金額ヲ控除ス(大正十五年法律第八號改正)

- 一 所得總額六千圓以下ナルトキハ勤勞所得ノ十分ノ二
- 二 所得總額中勤勞所得以外ノ所得六千圓以上ナルトキハ勤勞所得ノ十分ノ一
- 三 所得總額六千圓ヲ超エ勤勞所得以外ノ所得六千圓未滿ナルトキハ勤勞所得中勤勞所得以外ノ

所得ト合算シテ六千圓ニ達スル迄ノ金額ノ十分ノ二、其ノ他ノ金額ノ十分ノ一、戸主及其ノ同居家族ノ所得ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ付前項ノ規定ヲ適用ス戸主ト別居スル二人以上ノ同居家族ノ所得ニ付亦同シ

第十六條 前二條ノ規定ニ依リ算出シタル所得總額三千圓以下ナルトキハ其ノ所得ヲ有スル者ノ申請ニ依リ其ノ所得ヨリ其ノ年三月一日現在ノ同居ノ戸主及家族中年齡十八歳未滿若ハ六十歳以上ノ者又ハ不具癡疾者一人ニ付百圓ヲ控除ス但シ第二條ノ規定ニ依ル納稅義務者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス(大正十五年法律第八號改正)

戸主及其ノ同居家族ノ所得ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ付前項ノ規定ヲ適用ス戸主ト別居スル二人以上ノ同居家族ノ所得ニ付亦同シ

前項ノ場合ニ於テ控除スヘキ金額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ納稅義務者ノ一人又ハ數人ノ所得ヨリ之ヲ控除ス(同上)

同一人ニシテ山林ノ所得ト山林以外ノ所得トヲ有スル場合ニ於テハ前三項ノ規定ニ依ル控除ハ先ツ山林以外ノ所得ニ付之ヲ爲シ不足アルトキハ山林ノ所得ニ及フ

第一項ノ不具癡疾者ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條ノ二 第三條ノ二第二項第三項ノ規定ニ依リ所得稅ヲ課スヘキ所得ハ之ヲ受託者固有ノ所得ト區分シテ所得金額ヲ定ム二以上ノ信託アル場合ニ於テハ尙各信託毎ニ之ヲ定ム

第十五條第二項、第十六條、第二十條第二項及第二十三條第二項ノ規定ハ前項ノ所得ニ付之ヲ適

用セス(大正十一年法律第四十五號追加)

第十六條ノ三 自己若ハ家族又ハ其ノ相続人ヲ保險金受取人トスル生命保險契約ノ爲ニ拂込ミタル保險料ハ年額二百圓ヲ限リ命令ノ定ムル所ニ依リ本人ノ申請ニ依リ其ノ所得ヨリ之ヲ控除ス(大正十二年法律第四十一號追加)

第十七條 北海道府縣市町村其ノ他命令ヲ以テ指定スル公共團體、神社、寺院、祠宇、佛堂及民法第三十四條ノ規定ニ依リ設立シタル法人ニハ所得稅ヲ課セス(大正十五年法律第八號改正)

第十八條 第三種ノ所得ニシテ左ノ各號ニ該當スルモノニハ所得稅ヲ課セス(大正十五年法律第八號改正)

- 一 軍人從軍中ノ俸給及手當
- 二 扶助料及傷痍疾病者ノ恩給又ハ退隱料
- 三 旅費、學資金及法定扶養料
- 四 郵便貯金、産業組合貯金及銀行貯蓄預金ノ利子
- 五 營利ノ事業ニ屬セサル一時ノ所得
- 六 日本ノ國籍ヲ有セサル者ノ本法施行地外ニ於ケル資産、營業又ハ職業ヨリ生スル所得

第十九條 勅令ヲ以テ指定シタル重要物産ノ製造業ヲ營ム者ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ開業ノ年及其ノ翌年ヨリ三年間其ノ業務ヨリ生スル所得ニ付所得稅ヲ免除ス

第二十條 第三種ノ所得ハ千二百圓ニ滿タサルトキハ所得稅ヲ課セス第十五條、第十六條及第十六條ノ三ノ規定ニ依ル控除ヲ爲シタル爲千二百圓ニ滿タサルニ至リタルトキ亦同シ(大正十五年法律第八號)

(改正)

戶主及其ノ同居家族ノ所得ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ付前項ノ規定ヲ適用ス戶主ト別居スル二人以上ノ同居家族ノ所得ニ付亦同シ

第二十一條 第一種ノ所得ニ對スル所得稅ハ左ノ稅率ニ依リ之ヲ賦課ス(大正十五年法律第八號改正)

甲 普通所得

本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人

百分ノ五

本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有セサル法人

百分ノ十

乙 超過所得

超過所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各稅率ヲ適用ス

普通所得金額中資本金額ニ對シ年百分ノ十ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユル金額

百分ノ四

同百分ノ二十ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユル金額

百分ノ十

同百分ノ三十ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユル金額

百分ノ二十

丙 清算所得

清算所得金額ヲ左ノ如ク區分シ各稅率ヲ適用ス

積立金又ハ本法其ノ他ノ法律ニ依リ所得稅ヲ課セラルサル所得ヨリ成ル金額

百分ノ五

其ノ他ノ金額

百分ノ十

法人カ各事業年度ニ於テ納付シタル第二種ノ所得ニ對スル所得稅額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該事業年度ノ第一種ノ所得ニ對スル所得稅額ヨリ之ヲ控除ス(同上)

前項ノ場合ニ於テ控除スヘキ第二種ノ所得ニ對スル所得稅ハ第一種ノ所得計算上之ヲ損金ニ算入セス(同上)

前二項ノ規定ハ法人ノ清算所得ニ對スル所得稅ニ付之ヲ準用ス(同上)

第二十一條ノ二 同族會社カ各事業年度ニ於テ留保シタル金額中左ノ各號ノ一ニ該當スル金額アルトキハ政府ハ其ノ事業年度ノ普通所得ヲ年額ニ換算シタル金額中五萬圓以下ノ金額ニ百分ノ十、五萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ十五、十萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ二十、五十萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ二十五、百萬圓ヲ超ユル金額ニ百分ノ三十ヲ乘シタル合計金額ノ普通所得年額ニ對スル割合ヲ求メ之ヲ稅率トシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル金額(各號共ニ該當スル場合ニハ其ノ多額ナル一方)ニ付適用シテ算出シタル稅額ヲ普通所得ニ對スル所得稅ニ加算スルコトヲ得

(大正十五年法律第八號追加)

一 事業年度ノ普通所得中留保シタル金額カ其ノ事業年度ニ於ケル普通所得ノ十分ノ三ニ相當スル金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額

二 事業年度末ニ於ケル積立金及其ノ事業年度ノ普通所得中留保シタル金額ノ合計カ其ノ事業年度末ニ於ケル拂込株式金額又ハ出資金額ノ二分ノ一ニ相當スル金額ヲ超過スルトキハ其ノ超

過金額但シ其ノ事業年度末ニ於ケル積立金カ拂込株式金額又ハ出資金額ノ二分ノ一ヲ超過スル場合ニ於テハ其ノ超過額ハ之ヲ控除ス

本法ニ於テ同族會社ト稱スルハ株主又ハ社員ノ一人及之ト親族、使用人等特殊ノ關係アル者ノ株式金額又ハ出資金額ノ合計カ其ノ法人ノ株式金額又ハ出資金額ノ二分ノ一以上ニ相當スル法人ヲ謂フ(同上)

第二十二條 第二種ノ所得ニ對スル所得稅ハ左ノ稅率ニ依リ之ヲ賦課ス

甲 公債ノ利子
其ノ他

乙

百分ノ四
百分ノ五
百分ノ七・五

信託會社カ其ノ引受ケタル貸付信託ノ信託財産ニ付納付シタル第二種ノ所得ニ對スル所得稅額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該貸付信託ノ利益ニ對スル所得稅額ヨリ之ヲ控除ス(大正十五年法律第八號追加)前項ノ場合ニ於テ控除スヘキ第二種ノ所得ニ對スル所得稅ハ其ノ貸付信託ノ利益ニ之ヲ加算ス(同上)

第二十三條 第三種ノ所得ニ對スル所得稅ハ所得金額ヲ左ノ各級ニ區分シ遞次ニ各稅率ヲ適用シテ之ヲ賦課ス但シ山林ノ所得ハ山林以外ノ所得ト之ヲ區分シ其ノ所得ヲ五分シタル金額ニ對シ此ノ稅率ヲ適用シテ算出シタル金額ヲ五倍シタルモノヲ以テ其ノ稅額トス(大正十五年法律第八號改正)
千二百圓以下ノ金額 百分ノ〇・八

千二百圓ヲ超ユル金額
千五百圓ヲ超ユル金額
二千圓ヲ超ユル金額
三千圓ヲ超ユル金額
五千圓ヲ超ユル金額
七千圓ヲ超ユル金額
一萬圓ヲ超ユル金額
一萬五千圓ヲ超ユル金額
二萬圓ヲ超ユル金額
三萬圓ヲ超ユル金額
五萬圓ヲ超ユル金額
七萬圓ヲ超ユル金額
十萬圓ヲ超ユル金額
二十萬圓ヲ超ユル金額
五十萬圓ヲ超ユル金額
百萬圓ヲ超ユル金額
二百萬圓ヲ超ユル金額

百分ノ二
百分ノ三
百分ノ四
百分ノ五
百分ノ六・五
百分ノ八
百分ノ九・五
百分ノ十一
百分ノ十三
百分ノ十五
百分ノ十七
百分ノ十九
百分ノ二十一
百分ノ二十三
百分ノ二十五
百分ノ二十七
百分ノ三十

三百萬圓ヲ超ユル金額
四百萬圓ヲ超ユル金額

百分ノ三十三
百分ノ三十六

前項ノ場合ニ於テ戸主及其ノ同居家族ノ所得金額ハ之ヲ合算シ其ノ總額ニ對シ稅率ヲ適用シテ算出シタル金額ヲ各其ノ所得金額ニ案分シテ各其ノ稅額ヲ定ム戸主ト別居スル二人以上ノ同居家族ノ所得金額ニ付亦同シ

第二十四條 第一種ノ所得ニ付納稅義務アル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ財產目錄、貸借對照表、損益計算書又ハ清算若ハ合併ニ關スル計算書並第四條乃至第十一條ノ規定ニ依リ計算シタル所得及資本金額ノ明細書ヲ添附シ其ノ所得ヲ政府ニ申告スヘシ但シ本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有セサル法人ハ本法施行地ニ於ケル資産又ハ營業ニ關スル損益ヲ計算シタル所得及資本金額ノ明細書ヲ添附スヘシ

前項ノ規定ハ第一種ノ所得ニ付所得稅ヲ課セラルヘキ法人ニ付其ノ所得ナキ場合ニ之ヲ準用ス

第二十五條 第三種ノ所得ニ付納稅義務アル者ハ毎年三月十五日迄ニ所得ノ種類及金額ヲ詳記シ政府ニ申告スヘシ(大正十五年法律第八號改正)

第十六條又ハ第十六條ノ三ノ規定ニ依ル控除ヲ受ケムトスル者ハ前項ノ申告ト同時ニ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ申請書ヲ提出スヘシ(同上)

第二十六條 第一種ノ所得金額ハ第二十四條ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定シ第三種ノ所得金額ハ所得調査委員會ノ調査ニ依

リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得調査委員會閉會後第三種ノ所得ノ決定ニ付脱漏アルコトヲ發見シタルトキハ其ノ決定ヲ爲スヘカリシ年ノ翌年ニ於ケル所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ所得金額ヲ決定スルコトヲ得(大正十二年法律第八號追加)

所得調査委員會閉會後第三種ノ所得ヲ有スル者納稅義務アルコトヲ申出テ又ハ納稅義務者所得金額ノ増加アルコトヲ申出テタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ其ノ所得金額ヲ決定ス(大正十二年法律第八號改正)

第二十七條 稅務署長ハ毎年第三種ノ所得ニ付納稅義務アリト認ムル者ノ所得金額ヲ調査シ其ノ調査書ヲ所得調査委員會ニ送付スヘシ

前項ノ規定ハ前條第二項ノ場合ニ之ヲ準用ス(大正十二年法律第八號追加)

第二十八條 各稅務署所轄内ニ所得調査委員會ヲ置ク但シ稅務署所轄内ニ在ル市ニ付テハ命令ヲ以テ特ニ所得調査委員會ヲ置クコトヲ得(大正十二年法律第八號改正)

調査委員ノ定數ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム但シ定數ノ増減ハ改選期ニ於テスルノ外之ヲ爲スコトヲ得ス

第二十九條 調査委員ハ各選舉區ニ於テ之ヲ選舉ス

調査委員ヲ選舉スルトキハ同時ニ之ト同數ノ補關員ヲ選舉スヘシ

第三十條 調査委員及補關員ノ選舉區域ハ所得調査委員會ヲ置クヘキ區域ニ依リ投票區及開票區

ハ市町村ノ區域ニ依ル但シ市制第六條ノ規定ニ依リ指定セラレタル市ニ在リテハ區ノ區域ニ依ル
(大正十二年法律第八號改正)

町村組合ニシテ町村ノ事務ノ全部又ハ役場事務ヲ共同處理スルモノハ之ヲ一町村ト看做ス(同追加)

第三十一條 選舉區域内ニ住居シ第三種ノ所得又ハ個人ノ營業ニ付其ノ年法定ノ期限迄ニ所得金額又ハ純益金額ノ申告ヲ爲シ且其ノ決定ヲ受ケタル者ニシテ選舉人名簿ニ登録セラレタルモノハ調査委員及補關員ヲ選舉シ又ハ調査委員若ハ補關員ニ選舉セラルルコトヲ得但シ左ノ各號ノ一二該當スル者ハ此ノ限ニ在ラス(大正十五年法律第八號改正)

一 無能力者

二 破産若ハ家資分散ノ宣告ヲ受ケ復權セサル者又ハ身代限ノ處分ヲ受ケ債務ノ辨濟ヲ了ヘサル者

三 國稅滯納處分ヲ受ケタル後一年ヲ經サル者

四 六年以上ノ懲役若ハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ舊刑法ノ重罪ノ刑ニ處セラレタル者

五 六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ニシテ其ノ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至ル迄ノ者

六 第七十四條乃至第七十六條又ハ營業收益税法第二十八條乃至第三十條ノ規定ニ依リ處罰セラレタル後五年ヲ經サル者

其ノ年分ノ所得金額及純益金額ノ決定前選舉ヲ行フ場合ニ於テハ前年第三種ノ所得又ハ個人ノ營

業ニ付所得稅又ハ營業收益稅ヲ納メタルコトヲ以テ其ノ年所得金額又ハ純益金額ノ決定ヲ受ケタルモノト看做ス(同追加)

前二項ノ場合ニ於テ被相續人ノ爲シタル納稅又ハ申告ハ其ノ相續人ノ納稅又ハ申告ト看做ス(同改正)

選舉人名簿ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十二條 投票及開票ニ關スル事務ハ市區町村長又ハ戶長之ヲ擔任シ選舉會ニ關スル事務ハ稅務署長之ヲ擔任ス

第三十條第二項ノ町村組合ニ付テハ其ノ組合管理者ヲ町村長ト看做ス(大正十二年法律第八號追加)

第三十三條 稅務署長ハ調査委員及補關員ノ選舉期日ヲ定メ之ヲ市區町村長又ハ戶長ニ通知スヘシ

市區町村長又ハ戶長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ少クトモ選舉期日七日前其ノ旨ヲ公示スヘシ

第三十四條 選舉ハ無記名投票ヲ以テ之ヲ行フ

投票ハ調査委員及補關員ノ各選舉ニ付一人一票ニ限ル

選舉人ハ選舉ノ當日投票時間内ニ自ら投票所ニ至リ被選舉人各一人ノ氏名ヲ各別ノ投票用紙ニ記載シテ投票スヘシ

投票用紙ハ選舉ノ當日投票所ニ於テ之ヲ選舉人ニ交付ス

第三十五條 市區町村長又ハ戶長ハ投票ヲ調査シ直ニ其ノ結果ヲ稅務署長ニ報告スヘシ

第三十六條 稅務署長前條ノ報告ヲ受ケタルトキハ選舉會ヲ開キ之ヲ調査スヘシ

第三十七條 投票、開票及選舉會ニハ立會人ヲ立會ハシムヘシ
立會人ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三十八條 投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トス投票ノ數同シキトキハ年齡多キ者ヲ取り年齡同シキトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

調査委員ニ當選シタル者同時ニ補關員ニ當選スルモ補關員タルコトヲ得ス

第三十九條 調査委員及補關員ノ選舉終了シタルトキハ稅務署長ハ當選人ノ氏名ヲ公示シ且之ヲ當選人及市區町村長又ハ戸長ニ通知スヘシ

市區町村長又ハ戸長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ當選人ノ氏名ヲ公示スヘシ

第四十條 調査委員又ハ補關員ニ當選シタル者ハ正當ノ事故ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第四十一條 調査委員及補關員ノ任期ハ選舉期日ノ屬スル月ヨリ四年トス(大正十五年法律第八號改正)

選舉區域ノ變更ニ因リ其ノ區域内ニ於ケル第三種ノ所得ニ付其ノ年所得金額ノ決定ヲ受ケタル者及個人ノ營業ニ付其ノ年純益金額ノ決定ヲ受ケタル者ノ合計數ニ五分ノ一以上ノ増減ヲ來シタル場合ニ於テハ調査委員及補關員ノ任期ハ選舉區域ノ變更アリタル月ヲ以テ終了スルモノトス但シ其ノ選舉區域ノ變更ノ月カ一月又ハ二月ナルトキハ三月、四月乃至八月ナルトキハ九月、十二月ナルトキハ翌年三月ヲ以テ終了スルモノトス(同上)

第三十一條第二項ノ規定ハ其ノ年分ノ所得金額及純益金額ノ決定前選舉區域ノ變更アリタル場合ニ之ヲ準用ス(同追加)

第四十二條 調査委員及補關員ノ改選ハ前任者ノ任期終了ノ月ノ翌月ニ於テ之ヲ行フ

第四十三條 調査委員ニ關員ヲ生シタルトキハ投票ノ最多數ヲ得タル補關員ヨリ順次之ヲ補充シ投票ノ數同シキトキハ年齡多キ者ヲ取り年齡同シキトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

調査委員ニ關員ヲ生シ之ヲ補充スヘキ補關員ナキトキハ調査委員ノ補關選舉ヲ行フ

第四十四條 前條ノ規定ニ依リ調査委員又ハ補關員ト爲リタル者ハ前任者ノ殘任期間在任ス

選舉區域ノ變更ニ因リ新ニ選舉セラレタル調査委員及補關員ノ任期ハ選舉區域變更前ニ於ケル調査委員及補關員ノ選舉期日ノ屬スル月ヨリ四年ヲ以テ終了ス

第四十五條 調査委員又ハ補關員第三十一條第一項各號ノ一ニ該當スルニ至リタルトキ、第三種ノ所得ニ對スル所得稅若ハ營業收益稅ノ何レニ付テモ納稅義務ヲ有セサルニ至リタルトキ又ハ其ノ選舉區域内ニ住居セサルニ至リタルトキハ其ノ職ヲ失フ(大正十五年法律第八號改正)

第四十六條 所得調査委員會ノ開會日數ハ三十日以内トシ地方ノ情況ニ依リ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 所得調査委員會ハ稅務署長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク

第四十八條 所得調査委員會ハ毎年開會ノ始ニ於テ調査委員中ヨリ會長ヲ選舉スヘシ

第四十九條 所得調査委員會ハ定員ノ過半數ニ當ル委員出席スルニ非サレハ決議スルコトヲ得ス
議事ハ出席員ノ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

第五十條 調査委員ハ自己及自己ト同一戸籍内ニ在ル者ノ所得ニ關スル議事ニ與ルコトヲ得ス

第五十一條 五月三十一日迄ニ所得調査委員會成立セサルトキハ政府ニ於テ所得金額ヲ決定ス(大正

十五年法律第八號改正)

所得調查委員會開會ノ日ヨリ第四十六條ノ期間内又ハ五月三十一日迄ニ調査結了セサルトキハ政府ニ於テ調査未済ノ所得金額ヲ決定ス(同上)

第五十二條 政府ハ所得調査委員會ノ決議ヲ不當ト認ムルトキハ七日以内ノ期間ヲ定メ之ヲ再調査ニ付ス仍其ノ決議ヲ不當ト認ムルトキ又ハ再調査期間内ニ調査結了セサルトキハ政府ニ於テ所得金額ヲ決定ス

第五十三條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ所得調査委員會ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第五十四條 調査委員ニハ手當及旅費ヲ給ス

第五十五條 本法施行地ニ於テ利子支拂ヲ爲スヘキ公債又ハ社債ヲ募集シタル者ハ遲滯ナク其ノ公債又ハ社債ニ付左ノ事項ヲ記載シタル調査書ヲ政府ニ提出スヘシ

一 公債又ハ社債ノ名稱及其ノ總額

二 利子支拂期限及利率

三 償還ノ方法及期限

四 數回ニ分チテ拂込ヲ爲サシムルトキハ其ノ拂込ノ金額及時期

第五十六條 第三種ノ所得ニ屬スル俸給料歳費年金恩給退隱料賞與若ハ此等ノ性質ヲ有スル給與ノ支拂ヲ爲ス者又ハ利益若ハ利息ノ配當若ハ剩餘金ノ分配ヲ爲ス法人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ支拂調査書ヲ政府ニ提出スヘシ

信託ノ受託者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ各信託ニ付計算書ヲ政府ニ提出スヘシ(大正十一年法律(第四十五號追加)

第一項又ハ前項ノ支拂調査書又ハ計算書ヲ提出シタル者ニ對シテハ命令ノ定ムル金額ヲ交付スルコトヲ得(同改正)

第五十七條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ納稅義務者、納稅義務アリト認ムル者又ハ前條第一項又ハ第二項ノ支拂調査書又ハ計算書ヲ提出スル義務アル者ニ質問スルコトヲ得(大正十一年法律第四十五號改正)

第五十八條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ納稅義務者又ハ納稅義務アリト認ムル者ニ金錢又ハ物品ヲ支拂フノ義務ヲ有スト認ムル者ニ對シ其ノ金額、數量、價格又ハ支拂期日ニ付質問スルコトヲ得

第五十九條 第二十六條、第五十一條若ハ第五十二條ノ規定ニ依リ第一種若ハ第三種ノ所得金額ヲ決定シタルトキ又ハ第二十一條ノ二ノ規定ニ依リ稅額ヲ加算シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ(大正十五年法律第八號改正)

本法施行地内ニ住所又ハ居所ヲ有セサル納稅義務者納稅管理人ノ申告ヲ爲ササルトキハ前項ノ通知ハ公告ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テ公告ノ初日ヨリ七日ヲ經過シタルトキハ其ノ通知アリタルモノト看做ス

第六十條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル所得金額又ハ加算稅額ニ對シテ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得

(大正十五年法律第八號改正)

前項ノ請求アリタル場合ト雖政府ハ税金ノ徴收ヲ猶豫セス

第六十一條 前條第二項ノ請求アリタルトキハ所得審査委員會ノ決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス
所得審査委員會ハ前條第一項ノ請求ヲ爲シタル者ニ對シ其ノ所得ニ關スル事實ヲ質問スルコトヲ
得

第五十二條ノ規定ハ所得審査委員會ノ決議ニ之ヲ準用ス

第六十二條 各稅務監督局所轄内ニ所得審査委員會ヲ置ク

所得審査委員會ハ左ノ審査委員ヲ以テ之ヲ組織ス

一 收稅官吏中ヨリ大藏大臣ノ命シタル者三人

二 稅務監督局所轄内各府縣又ハ北海道ニ於テ調査委員ノ互選シタル者府縣ニ在リテハ各一人北
海道ニ在リテハ四人

所得審査委員會、審査委員及其ノ補關員ニ關スル事項ハ本法ニ定ムルモノヲ除クノ外命令ヲ以テ
之ヲ定ム

第六十三條 調査委員ヨリ選舉セラレタル審査委員ニハ日當及旅費ヲ給ス

第六十四條 第三種ノ所得ニ付納稅義務アル者第十四條第一項第五號及第六號ノ所得額二分ノ一以
上ヲ減損シタルトキハ政府ニ所得金額ノ更訂ノ請求ヲ爲スコトヲ得但シ翌年一月三十一日ヲ過キ
タルトキハ此ノ限ニ在ラス(大正十五年法律第八號改正)

所得金額決定後相續、贈與又ハ營業繼續ニ因リ所得金額ヲ減損シタル場合ニハ前項ノ規定ヲ適用
セス(同上)

第六十五條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ所得金額ヲ査覈シ二分ノ一以上ノ減損アルト
キハ之ヲ更訂ス(大正十五年法律第八號改正)

第六十六條 納稅義務者第六十一條ノ決定又ハ前條ノ更訂處分ニ對シ不服アルトキハ訴願又ハ行政
訴訟ヲ爲スコトヲ得

第六十七條 第一種ノ所得ニ付テハ事業年度毎ニ所得稅ヲ徴收ス但シ清算所得ニ付テハ清算又ハ合
併ノ際之ヲ徴收ス

第二種ノ所得ニ付テハ其ノ金額支拂ノ際支拂者其ノ所得稅ヲ徴收シ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ納ム
ヘシ

第三種ノ所得ニ付テハ所得稅ノ年額ヲ四分シ左ノ四期ニ於テ之ヲ徴收ス但シ納稅義務者納稅管理
人ノ申告ヲ爲サスシテ本法施行地外ニ住所又ハ居所ヲ移ストキハ直ニ其ノ所得稅ヲ徴收スルコト
ヲ得(大正十五年法律第八號改正)

第一期 其ノ年七月一日ヨリ三十一日限

第二期 其ノ年十月一日ヨリ三十一日限

第三期 翌年一月一日ヨリ三十一日限

第四期 翌年三月一日ヨリ三十一日限

第六十八條 前條第二項ノ規定ニ依リ徵收スヘキ所得稅ヲ徵收セザルトキ又ハ其ノ徵收シタル税金ヲ納付セザルトキハ國稅徵收ノ例ニ依リ之ヲ支拂者ヨリ徵收ス

第六十九條 法人解散シタル場合ニ於テ清算所得ニ對スル所得稅又ハ前條ノ規定ニ依リ徵收セラレタル税金ヲ納付セスシテ殘餘財産ヲ分配シタルトキハ其ノ税金ニ付清算人連帶シテ納稅ノ義務アルモノトス

第七十條 第六十四條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ更訂處分ノ確定スルニ至ル迄税金ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

第七十一條 第三種ノ所得ニ付ニ以上ノ稅務署所轄内ニ於テ所得金額ノ決定アリタルトキハ政府ハ納稅義務者ノ住所以外、住所ナキトキハ居所以外ニ於ケル所得金額ノ決定ヲ取消スヘシ

第七十二條 第三種ノ所得ニ對スル所得稅ハ納稅義務者ノ住所、住所ナキトキハ居所ヲ以テ納稅地トス但シ住所以外ニ在ル者ハ申告シテ居所ニ於テ所得稅ヲ納ムルコトヲ得

本法施行地ニ住所及居所ナキ者ハ納稅地ヲ定メ政府ニ申告スヘシ申告ナキトキハ政府其ノ納稅地ヲ指定ス

第七十三條 納稅義務者納稅地ニ現住セザルトキハ其ノ所得ノ申告、納稅其ノ他所得稅ニ關スル一切ノ事項ヲ處理セシムル爲納稅管理人ヲ定メ政府ニ申告スヘシ本法施行地外ニ住所又ハ居所ヲ移サムトスルトキ亦同シ

第七十三條ノ二 同族會社ノ行爲又ハ計算ニシテ其ノ所得又ハ株主社員若ハ之ト親族、使用人等特

殊ノ關係アル者ノ所得ニ付所得稅通脫ノ目的アリト認メラルモノアル場合ニ於テハ其ノ行爲又ハ計算ニ拘ラス政府ハ其ノ認ムル所ニ依リ此等ノ者ノ所得金額ヲ計算スルコトヲ得(大正十五年法律第八號改正)

第七十四條 詐僞其ノ他不正ノ行爲ニ因リ所得稅ヲ通脫シタル者ハ其ノ通脫シタル税金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出テタル者ハ其ノ罪ヲ問ハス

前項ノ場合ニ於テ第三種ノ所得ニ付所得稅ヲ通脫シタル者ノ所得金額ハ第二十六條第二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ之ヲ決定シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス(大正十二年法律第八號改正)

第七十五條 正當ノ事由ナクシテ第五十六條第一項又ハ第二項ノ規定ニ依リ政府ニ提出スヘキ支拂調書又ハ計算書ヲ提出セス若ハ不正ノ記載ヲ爲シタル支拂調書又ハ計算書ヲ提出シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス(大正十一年法律第四十五號改正)

前項ノ規定ニ依リ處罰セラレタル者ニ對シテハ其ノ提出ニ係ル支拂調書又ハ計算書ニ付第五十六條第三項ノ規定ニ依ル金額ヲ交付セス(同上)

第七十六條 所得ノ調査又ハ審査ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル秘密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第七十七條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用キス但シ前條ノ罪ヲ犯シタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

附則

第七十八條 本法ハ大正九年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三種ノ所得ニ付テハ大正九年分所得税ヨリ本法ヲ適用ス但シ第十六條ノ規定ハ大正九年分所得税ニ付テハ之ヲ適用セス

賞與又ハ賞與ノ性質ヲ有スル給與ニシテ從前ノ規定ニ於テ第三種所得トシテ計算スヘキモノニ付テハ本法施行前ニ於ケル收入金額ニ限リ、銀行定期預金又ハ定期預金ノ性質ヲ有スル銀行預金ノ利子ニ付テハ支拂期ノ本法施行前ニアルモノニ限リ大正九年分第三種所得トシテ計算ス

第七十九條 所得税法ニ依リ所得税ヲ課セラレタル法人又ハ所得税法其ノ他ノ法律ニ依リ所得税ヲ免除セラレタル法人ノ本法施行前ニ終了シタル各事業年度分ニ屬スル第十四條第一項第四號及第五號ノ所得其ノ他本法施行前ニ於ケル第十四條第一項第四號ノ所得ニ付テハ本法ヲ適用セス

第八十條 本法施行前ニ終了シタル法人ノ各事業年度分ノ所得ニ付テハ仍從前ノ規定ニ依ル

第八十一條 法人ノ超過所得ニ付テハ本法施行ノ日ヨリ大正十年七月三十一日ニ至ル間ニ終了スル各事業年度分ノ超過所得ニ限リ本税ノ三割五分ヲ増徴ス

大正九年七月一日以後ニ於テ法人ノ事業年度ノ期間ニ變更アリタルトキハ前項ニ該當スル舊事業年度ノ期間内ニ始期又ハ終期ヲ有スル各事業年度分ノ超過所得ニ付テハ依リ所得税ヲ課シ仍本税ノ三割五分ヲ増徴ス

第八十二條 所得調査委員及所得審査委員ニ關シテハ大正十年五月一日迄ハ仍從前ノ規定ニ依ル但シ從前ノ規定中八月三十日トアルハ九月三十日トス

從前ノ規定ニ依ル所得調査委員、補關員及所得審査委員ノ任期ハ大正十年五月一日ヲ以テ終了ス
第八十三條 第三種ノ所得ニ付テハ大正九年分所得税ニ限リ第一期ノ納期ヲ大正九年十月一日ヨリ三十一日限トス

第八十四條 所得税法ハ當分ノ内小笠原島及伊豆七島ニ之ヲ施行セス

附則 (大正十一年法律第四十五號)
本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(大正十二年一月一日ヨリ施行)

附則 (大正十二年法律第八號)
本法ハ大正十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行地ニ於テ支拂ヲ受クル銀行預金利子中從前ノ規定ニ依リ第三種所得トシテ計算スヘキモノニ付テハ支拂期ノ本法施行前ニアルモノニ限リ大正十二年分第三種所得トシテ計算ス

附則 (大正十二年法律第二十九號)
本法ハ大正十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行地ニ於テ信託利益ノ支拂ヲ受クル貸付信託ノ所得ニシテ從前ノ規定ニ依リ第三種所得トシテ計算スヘキモノニ付テハ信託利益ノ支拂期カ本法施行前ニ在ルモノニ限リ大正十二年分第三種所得トシテ計算ス

附則 (大正十二年法律第四十一號)
本法ハ大正十三年分所得税ヨリ之ヲ適用ス

附則 (大正十五年法律第八號)

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
 第三種ノ所得ニ付テハ大正十五年分所得稅ヨリ本法ヲ適用ス但シ第二十五條、第五十一條及第六十七條ノ改正規定ハ大正十六年分所得稅ヨリ之ヲ適用ス
 第十四條第一項第三號又ハ第四號ノ所得ニシテ大正十四年三月中ノ收入ニ屬スルモノハ之ヲ大正十五年分第三種所得トシテ計算セス
 第十六條第一項ノ改正規定中三月一日トアルハ大正十五年ニ限り四月一日トス
 本法施行前ニ終了シタル法人ノ各事業年度分ノ所得及本法施行前ニ於ケル解散又ハ合併ニ因ル清算所得ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル
 所得調査委員及所得審査委員ニ關シテハ大正十五年九月三十日迄ハ仍從前ノ例ニ依ル
 從前ノ規定ニ依ル所得調査委員及補關員ノ任期ハ大正十五年九月三十日ヲ以テ終了ス
 第三十一條、第四十一條及第四十五條ノ改正規定中營業收益稅ニ關スルモノハ大正十五年分ニ付テハ之ヲ營業稅ニ關スルモノトス

附則 (昭和九年法律第五十號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(昭和九年六月勅令第二百十二號ヲ以テ昭和九年七月一日ヨリ施行)
 本法施行前ニ終了シタル法人ノ各事業年度分ノ所得ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

○所得稅法ノ施行ニ關スル法律

(大正九年七月三十一日法律第十二號)

改正

- 大正十年三月三十日法律第十五號
- 大正十一年三月三十一日法律第二十七號
- 大正十五年三月二十七日法律第九號
- 昭和九年三月二十九日法律第三十號
- 昭和十一年五月二十八日法律第三十二號
- 昭和十二年三月三十日法律第三號
- 昭和十二年八月十三日法律第六十八號

第一條 所得稅法ハ朝鮮、臺灣及樺太ニハ之ヲ施行セス

第二條 朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ノ所得稅法第三條第一種甲及乙並第二種乙ノ所得ニ付テハ所得稅法ニ依ル所得稅ヲ課セス(大正十五年法律第九號改正)

第三條 朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人カ朝鮮、臺灣、關東州、樺太又ハ所得稅法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ト合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存續スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人カ所得稅法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スルトキハ所得稅法第十二條ノ規定ヲ準用ス(大正十年法律第十五號及大正十五年法律第九號改正)

第三條ノ二 法人カ朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依リ納付シタル第二種ノ所得ニ對スル所得稅額ニ付テハ所得稅法第二十一條第二項乃至第四項ノ規定ヲ準用ス(昭和九年法律第三十號追加)

信託會社カ其ノ引受ケタル貸付信託ノ信託財産ニ付朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依リ納付シタル第二種ノ所得ニ對スル所得稅額ニ付テハ所得稅法第二十二條第二項及第三項ノ規定ヲ準用ス(同上及昭和十二年法律第三號追加)

第四條 日本ノ國籍ヲ有セサル者ノ朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ於ケル資産、營業又ハ職業ヨリ生スル所得ニ付テハ所得稅法第十八條第六號ノ規定ヲ適用セス(大正十年法律第十五號、大正十一年法律第二十七號、昭和九年法律第三十號、昭和十二年法律第三號追加)

第五條 朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ住所ヲ有シ又ハ一年以上居所ヲ有スル個人ノ所得稅法第三條第二種乙及第三種ノ所得ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ所得稅法ニ依ル所得稅ヲ課セス(同上)

第六條 所得稅法施行地ニ住所ヲ有シ又ハ一年以上居所ヲ有スル個人ノ所得ニシテ朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依リ第二種ノ所得トシテ所得稅ヲ課スルモノニ付テハ所得稅法ニ依ル所得稅ヲ課セス(同上)

第七條 朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ於テ所得稅ヲ免除スル各當該地ノ製造業ヨリ生スル所得ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ所得稅法ニ依ル所得稅ヲ免除ス(大正十年法律第十五號追加)

第七條ノ二 前條ノ規定ニ該當スル製造業カ製鐵事業法ニ定ムル能力ヲ有スル設備ヲ以テ營ム製鐵事業ナルトキハ之ヲ所得稅法施行地ニ在ル製鐵事業ト看做シ製鐵事業法第七條第三項ノ金額又ハ製鐵事業法第四十二條ノ規定ニ依リ適用セラルル製鐵業獎勵法第二條第三項ノ金額ヲ計算ス(昭和十一年法律第三十二號追加、昭和十二年法律第六十八號改正)

第八條 相續稅法施行地ヨリ朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ住所又ハ船籍ヲ轉シタルモノニ付テハ相續稅法第二條第四項ノ規定ヲ適用セス(昭和九年法律第三十號、昭和十二年法律第三號追加)

第九條 相續稅法第三條第一項ノ規定ニ依リ課稅價格ヲ定ムル場合ニ於テ控除スヘキ金額中左ノ金額アルトキハ之ヲ控除セス(同上)

一 朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ在ル財産ニ係ル公課

二 朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ在ル財産ヲ目的トスル留置權、特別ノ先取特權、質權、抵當權又ハ典當權ヲ以テ擔保セラルル債務

三 朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ在ル財産ニ關スル贈與ノ義務

第十條 朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依リ相續稅ヲ課セラレタル後五年又ハ七年以内ニ於テ更ニ相續開始シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ相續稅法ニ依ル相續稅ノ全部又ハ一部ヲ免除ス(同上)

附則

本法ハ大正九年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則 (大正十年法律第十五號)

本法ハ大正十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第三種ノ所得ニ付テハ大正十年分所得稅ヨリ、第三條改正ノ規定ハ大正十年四月一日ヲ含ム事業年度分ヨリ之ヲ適用ス

附則 (大正十一年法律第二十七號)

所得稅法ノ施行ニ關スル法律

本法ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第三種ノ所得ニ付テハ大正十一年分所得税ヨリ之ヲ適用ス

附則 (大正十五年法律第九號)

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則 (昭和九年法律第三十號)

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ第八條乃至第十條ノ改正規定ハ昭和九年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三種ノ所得ニ付テハ昭和九年分所得税ヨリ本法ヲ適用ス

昭和九年七月一日前開始シタル相續ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

明治四十一年法律第三十七號第三條第四項中「所得税法第二十一條第二項」ノ下ニ「若ハ第四項又ハ大正九年法律第十二號第三條ノ二第一項」ヲ加フ

附則 (昭和十一年法律第三十二號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム (昭和十一年勅令第百六號ヲ以テ六月十五日ヨリ施行)

附則 (昭和十二年法律第三號)

本法ハ昭和十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則 (昭和十二年法律第六十八號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム (昭和十二年勅令第百六號ヲ以テ九月二十二日ヨリ施行)

地

租

○地租法

(昭和六年三月三十一日法律第二十八號)

第一章 總則

第一條 本法施行地ニ在ル土地ニハ本法ニ依リ地租ヲ課ス

第二條 左ニ掲グル土地ニハ地租ヲ課セズ但シ有料借地ナルトキハ此ノ限ニ在ラズ

- 一 國、府縣、市町村其ノ他勅令ヲ以テ指定スル公共團體ニ於テ公用又ハ公共ノ用ニ供スル土地
- 二 府縣、市町村其ノ他勅令ヲ以テ指定スル公共團體ニ於テ公用又ハ公共ノ用ニ供スルモノト決定シタル其ノ所有地但シ其ノ決定ヲ爲シタル日ヨリ一年內ニ公用又ハ公共ノ用ニ供セザルモノヲ除ク

三 府縣社地、鄉村社地、招魂社地

四 墳墓地

五 公衆用道路、鐵道用地、軌道用地、運河用地

六 用惡水路、溜池、堤塘、井溝

七 保安林

第三條 土地ニハ一筆毎ニ地番ヲ附シ其ノ地目、地積及賃貸價格(無租地及免租年期地ニ付テハ賃貸價格ヲ除ク)ヲ定ム

第四條 稅務署ニ土地臺帳ヲ備ヘ左ノ事項ヲ登錄ス

- 一 土地ノ所在
 - 二 地番
 - 三 地目
 - 四 地積
 - 五 賃貸價格
 - 六 所有者ノ住所及氏名又ハ名稱
 - 七 質權又ハ百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ノ目的タル土地ニ付テハ其ノ質權者又ハ地上權者ノ住所及氏名又ハ名稱
- 本法ニ定ムルモノノ外土地臺帳ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第五條** 地番ハ市町村、大字、字又ハ之ニ準ズベキ地域ヲ以テ地番區域トシ其ノ區域毎ニ起番シテ之ヲ定ム
- 第六條** 有租地ノ地目ハ土地ノ種類ニ從ヒ左ノ如ク區別シテ之ヲ定ム
- 第一類地 田、畑、宅地、鹽田、鑛泉地
 - 第二類地 池沼、山林、牧場、原野、雜種地
- 無租地ノ地目ハ第二條第三號乃至第七號ノ土地ニ在リテハ各其ノ區別ニ依リ、其ノ他ノ土地ニ在リテハ其ノ現況ニ依リ適當ニ區別シテ之ヲ定ム
- 第七條** 地積ハ左ノ各號ノ規定ニ依リ之ヲ定ム

- 一 宅地及鑛泉地ノ地積ハ平方メートルヲ單位トシテ之ヲ定メ一平方メートルノ百分ノ一未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ
 - 二 宅地及鑛泉地以外ノ土地ノ地積ハアールヲ單位トシテ之ヲ定メ一アールノ百分ノ一未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ但シ一筆ノ地積一アールノ百分ノ一未滿ナルモノニ付テハ一アールノ一萬分ノ一未滿ノ端數ヲ切捨ツ
- 第八條** 地租ノ課稅標準ハ土地臺帳ニ登錄シタル賃貸價格トス
- 賃貸價格ハ貸主ガ公課、修繕費其ノ他土地ノ維持ニ必要ナル經費ヲ負擔スル條件ヲ以テ之ヲ賃貸スル場合ニ於テ貸主ノ收得スベキ一年分ノ金額ニ依リ之ヲ定ム
- 第九條** 賃貸價格ハ十年毎ニ一般ニ之ヲ改訂ス第一回ノ改訂ハ昭和十三年ニ於テ之ヲ行フ前項ノ改訂ニ關スル事項ハ其ノ都度別ニ之ヲ定ム
- 土地ノ異動ニ因リ賃貸價格ヲ設定シ又ハ修正スル必要アルトキハ類地ノ賃貸價格ニ比準シ其ノ土地ノ品位及情況ニ應ジ之ヲ定ム
- 第十條** 地租ノ稅率ハ百分ノ三・八トス
- 第十一條** 地租ハ毎年左ノ納期ニ於テ之ヲ徵收ス
- 一 宅地租
 - 第一期 其ノ年七月一日ヨリ三十一日限 年額ノ二分ノ一
 - 第二期 翌年一月一日ヨリ三十一日限 年額ノ二分ノ一

二 田租

- 第一期 翌年一月一日ヨリ三十一日限 年額ノ四分ノ一
- 第二期 翌年二月一日ヨリ末日限 年額ノ四分ノ一
- 第三期 翌年三月一日ヨリ三十一日限 年額ノ四分ノ一
- 第四期 翌年五月一日ヨリ三十一日限 年額ノ四分ノ一

三 其ノ他

- 第一期 其ノ年九月一日ヨリ三十日限 年額ノ二分ノ一
- 第二期 其ノ年十一月一日ヨリ三十日限 年額ノ二分ノ一

特別ノ事情アル地方ニシテ前項ノ納期ニ依リ難キモノニ付テハ勅令ヲ以テ特別ノ納期ヲ定ムルコトヲ得

第十二條 地租ハ納期開始ノ時ニ於テ土地臺帳ニ所有者トシテ登録セラレタル者ヨリ之ヲ徴收ス但シ質權ノ目的タル土地又ハ百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ノ目的タル土地ニ付テハ土地臺帳ニ質權者又ハ地上權者トシテ登録セラレタル者ヨリ之ヲ徴收ス

第十三條 土地ノ異動アリタル場合ニ於テハ地番、地目、地積及賃貸價格ハ土地所有者ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ若ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキ又ハ申告ヲ要セザルトキハ稅務署長ノ調査ニ依リ稅務署長之ヲ定ム

第二章 土地ノ異動

第一節 有租地及無租地ノ轉換

第十四條 本法ニ於テ無租地ト稱スルハ地租ヲ課セザル土地（免租年期地、災害免租地及自作農免租地ヲ含マズ）ヲ謂ヒ有租地ト稱スルハ其ノ他ノ土地ヲ謂フ

第十五條 無租地ガ有租地ト爲リタルトキ又ハ有租地ガ無租地ト爲リタルトキハ土地所有者ハ三十日内ニ之ヲ稅務署長ニ申告スベシ但シ有租地ガ無租地ト爲リタル場合ニ於テ之ニ關シ豫メ政府ノ許可ヲ受ケ若ハ申告ヲ爲シタルモノ又ハ官公署ニ於テ公示シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第十六條 新ニ土地臺帳ニ登録スベキ土地ヲ生ジタルトキハ當該地番區域内ニ於ケル最終ノ地番ヲ追ヒ順次其ノ地番ヲ定ム但シ特別ノ事情アルトキハ適宜ノ地番ヲ定ムルコトヲ得

第十七條 新ニ土地臺帳ニ登録スベキ土地ヲ生ジタルトキハ直ニ其ノ地目ヲ設定ス
土地臺帳ニ登録セラレタル無租地ガ有租地ト爲リ又ハ有租地ガ無租地ト爲リタルトキハ直ニ其ノ地目ヲ修正ス

第十八條 新ニ土地臺帳ニ登録スベキ土地ヲ生ジタルトキハ直ニ之ヲ測量シテ其ノ地積ヲ定ム
土地臺帳ニ登録セラレタル無租地ガ有租地ト爲リタルトキハ直ニ其ノ地積ヲ改測ス但シ其ノ地積ニ異動ナシト認ムルトキハ之ヲ省略スルコトヲ得

第十九條 國有財産法第二十一條ノ規定ニ依リ賣拂又ハ讓與ノ豫約ヲ爲シタル土地ニシテ開拓ノ事業成功ニ因リ賣拂又ハ讓與ヲ受ケ有租地ト爲リタルモノニ付テハ土地所有者ノ申請ニ依リ有租地ト爲リタル年及其ノ翌年ヨリ二十年ノ開拓減租年期ヲ許可シ年期中ハ其ノ原地（開拓前ノ土地）相

當ノ賃貸價格ニ依リ地租ヲ徵收ス
前項ノ年期滿了スルモ尙地味成熟セザル土地ニ付テハ更二十年内ノ年期延長ヲ許可スルコトヲ得

第二十條 國有財産法第二十一條ノ規定ニ依リ賣拂又ハ讓與ノ豫約ヲ爲シタル土地ニシテ埋立(干拓ヲ含ム)ノ事業成功ニ因リ賣拂又ハ讓與ヲ受ケ有租地ト爲リタルモノ又ハ公有水面埋立法第二十四條若ハ第五十條ノ規定ニ依リ埋立地ノ所有權ヲ取得シ有租地ト爲リタル土地ニ付テハ土地所有者ノ申請ニ依リ有租地ト爲リタル年及其ノ翌年ヨリ六十年ノ埋立免租年期ヲ許可ス
前項ノ年期滿了スルモ尙地味成熟セザル土地ニ付テハ更二十年内ノ年期延長ヲ許可スルコトヲ得

第二十一條 前二條ノ規定ニ依リ開拓減租年期又ハ埋立免租年期ノ許可ヲ受ケントスル者ハ有租地ト爲リタル日ヨリ六十日内ニ、開拓減租年期又ハ埋立免租年期延長ノ許可ヲ受ケントスル者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ稅務署長ニ申請スベシ

第二十二條 開拓減租年期中ニ於テ地類變換ヲ爲シタルトキハ開拓減租年期ハ消滅ス
開拓減租年期中ニ於テ地目變換ヲ爲シタルトキハ其ノ地目ヲ修正スルモ其ノ賃貸價格ハ之ヲ修正セズ

埋立免租年期中ニ於テ地目變換、地類變換又ハ開墾ニ該當スル土地ノ異動アルモ地目變換、地類變換又ハ開墾ナキモノト看做ス此ノ場合ニ於テハ免租年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ地目ヲ修正ス

第二十三條 開拓減租年期地又ハ埋立免租年期地ニ付テハ土地所有者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ年期滿了申告書ヲ稅務署長ニ提出スベシ

第二十四條 無租地ガ有租地ト爲リタルトキハ直ニ其ノ賃貸價格ヲ設定ス
開拓減租年期地ニ付テハ有租地ト爲リタルトキ直ニ原地相當ノ賃貸價格ヲ設定シ開拓減租年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ賃貸價格ヲ修正ス

埋立免租年期地ニ付テハ其ノ年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ賃貸價格ヲ設定ス

第二十五條 開拓減租年期又ハ埋立免租年期ノ滿了ニ因リ賃貸價格ヲ設定シ又ハ修正スル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ地積ヲ改測ス

第二十六條 無租地ガ有租地ト爲リタルトキハ賃貸價格ヲ設定(第二十四條第三項ノ設定ヲ含ム)シタル年ノ翌年分ヨリ地租ヲ徵收ス

開拓減租年期ノ滿了ニ因リ賃貸價格ヲ修正シタル土地ニ付テハ其ノ修正ヲ爲シタル年ノ翌年分ヨリ修正賃貸價格ニ依リ地租ヲ徵收ス

第二十七條 有租地ガ無租地ト爲リタルトキハ其ノ申告ヲ要スルモノニ付テハ申告アリタル後ニ開始スル納期ヨリ、其ノ申告ヲ要セザルモノニ付テハ稅務署長ガ其ノ事實ヲ認メタル後ニ開始スル納期ヨリ地租ヲ徵收セズ

第二節 分筆及合筆

第二十八條 本法ニ於テ分筆ト稱スルハ一筆ノ土地ヲ數筆ノ土地ト爲スヲ謂ヒ合筆ト稱スルハ數筆

ノ土地ヲ一筆ノ土地ト爲スヲ謂フ
第二十九條 分筆又ハ合筆ヲ爲サントスルトキハ土地所有者ハ之ヲ稅務署長ニ申告スベシ
第三十條 一筆ノ土地ノ一部ガ左ノ各號ノ一ニ該當スルニ至リタルトキハ前條ノ申告ナキ場合ニ於テモ稅務署長ハ其ノ土地ヲ分筆ス

- 一 別地目ト爲ルトキ
- 二 無租地ガ有租地ト爲リ又ハ有租地ガ無租地ト爲ルトキ
- 三 所有者ヲ異ニスルトキ
- 四 質權又ハ百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ノ目的ト爲ルトキ
- 五 地番區域ヲ異ニスルトキ

第三十一條 分筆シタル土地ニ付テハ分筆前ノ地番ニ符號ヲ附シテ各筆ノ地番ヲ定ム
 合筆シタル土地ニ付テハ合筆前ノ地番中ノ首位ノモノヲ以テ其ノ地番トス
 特別ノ事情アルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラズ適宜ノ地番ヲ定ムルコトヲ得

第三十二條 分筆ヲ爲シタルトキハ測量シテ各筆ノ地積ヲ定ム

合筆ヲ爲シタルトキハ合筆前ノ各筆ノ地積ヲ合算シタルモノヲ以テ其ノ地積トス

第三十三條 分筆ヲ爲シタルトキハ各筆ノ品位及情況ニ應ジ分筆前ノ賃賃價格ヲ配分シテ其ノ賃賃價格ヲ定ム
 合筆ヲ爲シタルトキハ合筆前ノ各筆ノ賃賃價格ヲ合算シタルモノヲ以テ其ノ賃賃價格トス

第三節 開墾

第三十四條 本法ニ於テ開墾ト稱スルハ第二類地ヲ第一類地ト爲スヲ謂フ

第三十五條 開墾成功シタルトキハ土地所有者ハ三十日內ニ之ヲ稅務署長ニ申告スベシ

第三十六條 開墾ニ著手シタル土地ニ付テハ土地所有者ノ申請ニ依リ開墾著手ノ年及其ノ翌年ヨリ

二十年ノ開墾減租年期ヲ許可シ年期中ハ原地(開墾前ノ土地)相當ノ賃賃價格ニ依リ地租ヲ徵收ス
 但シ地類變換ヲ爲シタル後五年內ニ開墾ニ著手シタル土地ニ付テハ之ヲ許可セズ

二十年內ニ成功シ能ハザル開墾地ニ付テハ前項ノ年期ハ開墾著手ノ年及其ノ翌年ヨリ四十年トス

前項ノ年期滿了スルモ尙地味成熟セザル土地ニ付テハ更二十年內ノ年期延長ヲ許可スルコトヲ得

宅地又ハ鑛泉地ト爲ス開墾地ニ付テハ其ノ情況ニ依リ稅務署長ハ開墾減租年期ヲ短縮スルコトヲ得

第三十七條 前條ノ規定ニ依リ開墾減租年期ノ許可ヲ受ケントスル者ハ開墾著手ノ日ヨリ三十日內ニ、開墾減租年期延長ノ許可ヲ受ケントスル者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ稅務署長ニ申請スベシ

第三十八條 開墾減租年期中ニ於テ開墾成功シタルトキ又ハ其ノ成功地ニ付地目變換ヲ爲シタルトキハ其ノ地目ヲ修正スルモ其ノ賃賃價格ハ之ヲ修正セズ

開墾減租年期中ニ於テ其ノ原地ニ付地目變換ヲ爲シタルトキ又ハ其ノ成功地ニ付地類變換ヲ爲シタルトキハ開墾減租年期中ハ消滅ス

第三十九條 開墾減租年期中ニ付テハ土地所有者ハ年期中ノ滿了スル年ノ六月三十日迄二年期滿了申
告書ヲ稅務署長ニ提出スベシ

第四十條 開墾成功シタルトキハ(開墾減租年期中ナルト否トヲ問ハズ)直ニ其ノ地目ヲ修正ス

第四十一條 開墾成功シタルトキハ開墾減租年期中ヲ除クノ外直ニ其ノ貸賃價格ヲ修正ス
開墾減租年期中ニ付テハ其ノ年期中滿了スル年ニ於テ其ノ貸賃價格ヲ修正ス但シ年期中滿了スルモ
尙開墾成功セザル土地ニ付テハ開墾成功シタルトキ直ニ其ノ貸賃價格ヲ修正ス

第四十二條 開墾ニ因リ貸賃價格ヲ修正スル場合ニ於テハ其ノ地積ヲ改測ス但シ其ノ地積ニ異動ナ
シト認ムルトキハ之ヲ省略スルコトヲ得

第四十三條 開墾ニ因リ地目又ハ貸賃價格ヲ修正シタル土地ニ付テハ其ノ修正ヲ爲シタル年ノ翌年
分ヨリ修正地目又ハ修正貸賃價格ニ依リ地租ヲ徵收ス

第四節 地目變換及地類變換

第四十四條 本法ニ於テ地目變換ト稱スルハ第一類地中又ハ第二類地中ノ各地目ヲ變更スルヲ謂ヒ
地類變換ト稱スルハ第一類地ヲ第二類地ト爲スヲ謂フ

第四十五條 地目變換又ハ地類變換ヲ爲シタルトキハ土地所有者ハ三十日內ニ之ヲ稅務署長ニ申告
スベシ

第四十六條

二十年内ニ成功シ能ハザル地目變換地ニ付テハ土地所有者ノ申請ニ依リ地目變換著手
ノ年及其ノ翌年ヨリ四十年ノ地目變換減租年期中ハ原地(變換前ノ土地)相當ノ貸賃
價格ニ依リ地租ヲ徵收ス

前項ノ年期中滿了スルモ尙地味成熟セザル土地ニ付テハ更ニ十年内ノ年期中延長ヲ許可スルコトヲ
得

宅地又ハ鑛泉地ニ變換スル土地ニ付テハ其ノ情況ニ依リ稅務署長ハ地目變換減租年期中短縮スル
コトヲ得

第四十七條 前條ノ規定ニ依リ地目變換減租年期中許可ヲ受ケントスル者ハ地目變換著手ノ日ヨリ
三十日內ニ、地目變換減租年期中延長ノ許可ヲ受ケントスル者ハ年期中滿了スル年ノ六月三十日迄
ニ稅務署長ニ申請スベシ

第四十八條 地目變換減租年期中ニ於テ其ノ原地又ハ變換地ニ付地目變換ヲ爲シタルトキハ其ノ地
目ヲ修正スルモ其ノ貸賃價格ハ之ヲ修正セズ

地目變換減租年期中ニ於テ地類變換ヲ爲シタルトキハ地目變換減租年期中ハ消滅ス

第四十九條 地目變換減租年期中ニ付テハ土地所有者ハ年期中滿了スル年ノ六月三十日迄二年期滿
了申告書ヲ稅務署長ニ提出スベシ

第五十條 地目變換又ハ地類變換ヲ爲シタルトキハ(地目變換減租年期中ナルト否トヲ問ハズ)直ニ
其ノ地目ヲ修正ス

第五十一條 地目變換又ハ地類變換ヲ爲シタルトキハ地目變換減租年期地ヲ除クノ外直ニ其ノ賃貸價格ヲ修正ス

第五十二條 地目變換又ハ地類變換ニ因リ賃貸價格ヲ修正スル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ地積ヲ改測ス

第五十三條 地目變換又ハ地類變換ニ因リ地目又ハ賃貸價格ヲ修正シタル土地ニ付テハ其ノ修正ヲ爲シタル年ノ翌年分ヨリ修正地目又ハ修正賃貸價格ニ依リ地租ヲ徵收ス

第五十四條 本法ニ於テ荒地ト稱スルハ災害ニ因リ地形ヲ變ジ又ハ作土ヲ損傷シタル土地ヲ謂フ

第五十五條 荒地ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ荒地ト爲リタル年及其ノ翌年ヨリ十五年内ノ荒地免租年期ヲ許可ス

前項ノ年期滿了スルモ尙荒地ノ形狀ヲ存スルモノニ付テハ更ニ十五年内ノ年期延長ヲ許可スルコトヲ得

海、湖又ハ河川ノ狀況ト爲リタル荒地ニ付テハ前項ノ延長年期ハ二十年内トス其ノ年期滿了スルモ尙海、湖又ハ河川ノ狀況ニ在ルモノハ本法ノ適用ニ付テハ海、湖又ハ河川ト爲リタルモノト看做ス

第五十六條 前條ノ規定ニ依リ荒地免租年期ノ許可ヲ受ケントスル者ハ稅務署長ニ申請スベシ

荒地免租年期延長ノ許可ヲ受ケントスル者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ稅務署長ニ申請スベシ

第五十七條 荒地免租年期地ニ付テハ免租年期許可ノ申請アリタル後ニ開始スル納期ヨリ地租ヲ徵收セズ

第五十八條 荒地免租年期中ノ土地ガ再ビ荒地ト爲リ免租年期ノ許可ヲ受ケタルトキハ前ノ年期ハ消滅ス

第五十九條 開拓減租年期、埋立免租年期、開墾減租年期又ハ地目變換減租年期中ノ土地ニ付荒地免租年期ヲ許可シタルトキハ其ノ許可ヲ爲シタル年ヨリ荒地免租年期滿了ニ至ル迄ハ開拓減租年期、埋立免租年期、開墾減租年期又ハ地目變換減租年期ハ其ノ進行ヲ止ム

前項ノ規定ハ他ノ法律ニ依リ一定ノ期間地租ノ全部又ハ一部ヲ免除シタル土地ニ付荒地免租年期ヲ許可シタル場合ニ之ヲ準用ス

第六十條 荒地免租年期中ニ於テ地目變換、地類變換又ハ開墾ニ該當スル土地ノ異動アルモ地目變換、地類變換又ハ開墾ナキモノト看做ス此ノ場合ニ於テハ免租年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ地目ヲ修正ス

第六十一條 荒地免租年期地ニ付テハ納稅義務者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ年期滿了申告書ヲ稅務署長ニ提出スベシ

地租法

六三

第六十二條 荒地免租年期地ニ付テハ其ノ年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ賃賃價格ヲ設定ス

第六十三條 荒地免租年期ノ滿了ニ因リ賃賃價格ヲ設定スル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ地積ヲ改測ス

第六十四條 荒地免租年期ノ滿了ニ因リ賃賃價格ヲ設定シタル土地ニ付テハ其ノ設定ヲ爲シタル年ノ翌年分ヨリ地租ヲ徵收ス

第三章 災害地免租

第六十五條 北海道又ハ府縣ノ全部又ハ一部ニ互ル災害又ハ天候不順ニ因リ收穫皆無ニ歸シタル田畑ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ年分地租ハ之ヲ免除ス

第六十六條 地目變換若ハ開墾成功ノ申告アリタル土地又ハ耕地整理工事完了シ賃賃價格配賦ノ申出アリタル土地ニシテ未ダ土地臺帳ヲ更正セザルモノニ付テハ其ノ成功地目が田畑ナルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ前條ノ規定ヲ準用ス

第六十七條 前二條ノ規定ニ依リ地租ノ免除ヲ受ケントスル者ハ被害現狀ノ存スル間ニ於テ其ノ事實ヲ明ニシテ稅務署長ニ申請スベシ

第六十八條 前條ノ申請アリタルトキハ被害ノ調査中其ノ年分地租ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

第六十九條 第六十五條又ハ第六十六條ノ規定ニ依リ免除シタル地租ハ法律上總テノ納稅資格中ヨリ之ヲ控除セズ

第四章 自作農地免租

第七十條 田畑地租ノ納期開始ノ時ニ於テ納稅義務者(法人ヲ除ク)ノ住所地市町村及隣接市町村内ニ於ケル田畑賃賃價格ノ合計金額ガ其ノ同居家族ノ分ト合算シ二百圓未滿ナルトキハ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ田畑ノ當該納期分地租ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ免除ス但シ小作ニ付シタル田畑ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

民法施行前ヨリ引續キ存スル永小作權ニ付其ノ設定ノ當時舊來ノ慣行ニ依リテ小作料支拂ノ外當該田畑ノ地租ノ全額ヲ永小作權者ニ於テ負擔スルコトヲ約シタル田畑ニ關シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ永小作權者ヲ所有者ト看做シテ前項ノ規定ヲ適用ス

第七十一條 前條ノ規定ニ依リ地租ノ免除ヲ受ケントスル者ハ毎年三月中ニ住所地市町村ヲ經由シ稅務署長ニ申請スベシ

前項ノ申請期間經過後新ニ前條ノ規定ニ該當スルニ至リタル田畑ニ付テハ次ノ納期開始前ニ於テ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得

第五章 地租徵收

七十二條 稅務署長ハ土地ノ異動其ノ他地租徵收ニ關シ必要ト認ムル事項ヲ市町村ニ通知スベシ

第七十三條 地租ハ各納稅義務者ニ付同一市町村内ニ於ケル同一地目ノ賃賃價格ノ合計金額ニ依リ算出シ之ヲ徵收ス但シ賃賃價格ノ合計金額ガ一圓ニ滿タザルトキハ地租ヲ徵收セズ
田、畑、宅地以外ノ土地ハ之ヲ同一地目ノ土地ト看做シテ前項ノ規定ヲ適用ス

第七十四條 市町村ハ地租ノ納期毎ニ其ノ納期開始前十五日迄ニ賃貸價格及地租ノ總額並ニ其ノ各納期ニ於ケル納額ヲ稅務署長ニ報告スベシ但シ前報告後異動ナキトキハ此ノ限ニ在ラズ
前項ノ報告後納期開始迄ニ報告事項ニ異動ヲ生ジタルトキハ直ニ其ノ異動額ヲ稅務署長ニ報告スベシ

第七十五條 市町村ハ第七十條ノ規定ニ依リ地租ヲ免除スル田畑ノ賃貸價格ノ總額ヲ前條ノ例ニ準ジ稅務署長ニ報告スベシ

第七十六條 大藏大臣ハ稅務署長又ハ其ノ代理官ヲシテ隨時市町村ニ於ケル國稅徵收ニ關スル事務ヲ監督セシムベシ

第六章 雜則

第七十七條 他ノ法律ニ依リ一定ノ期間地租ヲ免除シタル土地ニ付テハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外第五十七條及第六十條乃至第六十四條ノ規定ヲ準用ス

第七十八條 稅務署長土地ノ異動ニ因リ地番、地目、地積又ハ賃貸價格ヲ土地臺帳ニ登録シタルトキ又ハ登録ヲ變更シタルトキハ土地所有者及納稅義務者ニ通知スベシ

第七十九條 納稅義務者其ノ土地所在ノ市町村内ニ現住セザルトキハ地租ニ關スル事項ヲ處理セシムル爲其ノ市町村内ニ現住スル者ニ就キ納稅管理人ヲ定メ當該市町村長ニ申告スベシ

第八十條 土地所有者ニ變更アリタル場合ニ於テハ舊所有者ガ爲スベカリシ申告ハ所有者ノ變更アリタル日ヨリ三十日內ニ新所有者ヨリ之ヲ爲スベシ

第八十一條 本法ニ依リ土地所有者ヨリ爲スベキ申告又ハ申請ハ質權ノ目的タル土地又ハ百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ノ目的タル土地ニ付テハ土地臺帳ニ登録セラレタル質權者又ハ地上權者ヨリ之ヲ爲スコトヲ得

第八十二條 本法ニ依リ申告ヲ爲スベキ義務ヲ有スル者其ノ申告ヲ爲サザルトキハ五十圓以下ノ過料ニ處ス

非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前項ノ過料ニ付之ヲ準用ス

第八十三條 詐僞其ノ他不正ノ行爲ニ依リ地租ヲ遁脱シタル者ハ其ノ遁脱シタル稅金ノ五倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處シ直ニ其ノ地租ヲ徵收ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出デタル者ハ其ノ罪ヲ問ハズ

前項ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒズ

第八十四條 本法ニ依リ申告ヲ爲スベキ義務ヲ有スル者其ノ申告ヲ爲サズ仍テ地租ニ不足額アルトキハ直ニ之ヲ徵收ス

第八十五條 前二條ノ規定ニ依リ地租ヲ徵收スル場合ニ於テハ第七十三條ノ規定ニ拘ラズ當該土地一筆毎ニ其ノ地租ヲ算出ス

第八十六條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ土地ノ検査ヲ爲シ又ハ土地ノ所有者、質權者、地上權者其ノ他利害關係人ニ對シ必要ナル事項ヲ質問スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ土地ノ検査ヲ拒ミ又ハ之ヲ妨ゲタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十七條 市制第六條又ハ第八十二條第三項ノ市ニ於テハ本法中市ニ關スル規定ハ區ニ、市長ニ關スル規定ハ區長ニ之ヲ適用ス

町村制ヲ施行セザル地ニ於テハ本法中町村ニ關スル規定ハ町村ニ準ズベキモノニ、町村長ニ關スル規定ハ町村長ニ準ズベキモノニ之ヲ適用ス

第八十八條 本法ハ國有地ニ之ヲ適用セズ

第八十九條 府縣、市町村其ノ他ノ公共團體ハ第二條ノ規定ニ依リ地租ヲ課セザル土地ニ租稅其ノ他ノ公課ヲ課スルコトヲ得ズ但シ所有者以外ノ者同條第一號又ハ第二號ノ土地ヲ使用收益スル場合ニ於テ其ノ土地ニ付使用者ニ租稅其ノ他ノ公課ヲ課スルハ此ノ限ニ在ラズ

附則

第九十條 本法ハ昭和六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ昭和六年分地租ニ限り第十條ノ規定中百分之三・八トアルハ百分ノ四、第十一條ノ規定中宅地租第一期其ノ年七月一日ヨリ三十一日限トアルハ其ノ年十一月一日ヨリ三十日限、其ノ他第一期其ノ年九月一日ヨリ三十日限トアルハ翌年一月一日ヨリ三十一日限、其ノ他第二期其ノ年十一月一日ヨリ三十日限トアルハ翌年三月一日ヨリ三十一日限、第七十一條第一項ノ規定中三月中トアルハ十二月中トス

第九十一條 左ノ法律ハ之ヲ廢止ス但シ昭和五年分以前ノ地租ニ關シテハ仍舊法ニ依ル

地租條例

災害地地租免除法

宅地地價修正法

明治七年第百二十號布告地所名稱區別

明治三十四年法律第三十號

明治三十四年法律第三十一號

明治三十七年法律第十二號

明治三十七年法律第十六號

大正十五年法律第四十七號

第九十二條 土地賃貸價格調査法ニ依リ賃貸價格ノ調査ヲ爲シタル土地ニ付テハ同法ニ依リ調査シタル賃貸價格ヲ以テ本法施行ノ際ニ於ケル賃貸價格トス但シ其ノ賃貸價格ニ依リ算出シタル本法ノ地租額ガ從前ノ地價ニ依リ算出シタル舊法ノ地租額ノ三倍八割ヲ超ユル土地ニ在リテハ舊法ノ地租額ノ三倍八割ニ相當スル金額ヲ百分ノ三・八ヲ以テ除シタル金額ヲ以テ其ノ賃貸價格トス

第九十三條 大正十五年四月一日後本法施行前ニ於テ地價ヲ設定シ又ハ修正シタル土地（免租年期又ハ低價年期ノ滿了ニ因リ原地價ニ復シタルモノヲ含ム）ニ付テハ第九條第三項ノ例ニ準ジ其ノ賃貸價格ヲ定ム

大正十五年四月一日後本法施行前ニ於テ分筆又ハ合筆ヲ爲シタル土地ニ付テハ第三十三條ノ例ニ準ジ前條ノ賃貸價格ヲ配分又ハ合算シテ其ノ賃貸價格ヲ定ム

第九十四條 舊法ニ依リ低價年期ノ許可ヲ受ケタル土地ニシテ本法施行ノ際未ダ原地價ニ復セザルモノニ付テハ第九條第三項ノ例ニ準ジ其ノ賃貸價格ヲ定ム

第九十五條 前三條ノ規定ニ依リ賃貸價格ヲ定メタル土地ニ付テハ昭和六年分ヨリ本法ニ依リ地租ヲ徵收ス

第九十六條 本法施行前ニ於ケル土地ノ異動中本法施行ノ際未ダ舊法ニ依リ地價ノ設定又ハ修正其ノ他ノ處分ヲ爲サザルモノニシテ本法中之ニ相當スル規定アルモノニ關シテハ本法ヲ適用ス但シ

第九十一條但書ノ規定ノ適用ヲ妨ゲズ

第九十七條 舊法ニ依ル届出又ハ申請ニシテ本法中之ニ相當スル規定アルモノハ之ヲ本法ニ依ル申告又ハ申請ト看做ス

第九十八條 舊法ニ依リ開墾ノ届出アリタル土地ニシテ本法施行ノ際開墾著手後未ダ二十年ヲ經過セザルモノハ第三十六條第一項ノ規定ニ依リ開墾減租年期ヲ許可セラレタルモノト看做ス但シ地類變換ヲ爲シタル後五年内ニ開墾ヲ爲シタル土地ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第九十九條 舊法ニ依リ免租年期、減租年期又ハ地價据置年期ノ許可ヲ受ケタル土地ニシテ本法施行ノ際未ダ其ノ年期ノ滿了セザルモノハ左ノ區分ニ從ヒ本法ニ依リ免租年期又ハ減租年期ヲ許可セラレタルモノト看做ス

- 一 地租條例第十六條第三項ノ減租年期ハ第三十六條第二項ノ開墾減租年期トス
- 二 地租條例第十六條第四項ノ減租年期ハ第十九條第一項ノ開拓減租年期トス

三 地租條例第十六條第五項ノ新開免租年期ハ第二十條第一項ノ埋立免租年期トス

四 地租條例第十六條第六項ノ地價据置年期ハ第四十六條第一項ノ地目變換減租年期トス

五 明治三十四年法律第三十號ノ年期延長ハ前各號ノ例ニ準ジ第十九條第二項、第二十條第二項、第三十六條第三項又ハ第四十六條第二項ノ年期延長トス

六 地租條例第二十條ノ荒地免租年期ハ第五十五條第一項ノ荒地免租年期トス

七 地租條例第二十三條又ハ第二十四條ノ免租繼年期ハ荒地ノ種類ニ從ヒ第五十五條第二項又ハ第三項ノ年期延長トス

前項ノ年期ハ舊法ニ依リ許可セラレタル年期ノ殘年期間ノ經過スル年ノ翌年ニ於テ滿了ス

第一百條 地積ハ第七條ノ規定ニ拘ラズ當分ノ内左ノ各號ノ規定ニ依リ之ヲ定ム

一 宅地及鑛泉地ノ地積ハ六尺平方ヲ坪、坪ノ十分ノ一ヲ合、合ノ十分ノ一ヲ勻トシテ之ヲ定メ勻未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ

二 宅地及鑛泉地以外ノ土地ノ地積ハ六尺平方ヲ步、三十步ヲ畝、十畝ヲ段、十段ヲ町トシテ之ヲ定メ步未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ但シ一筆ノ地積一步未滿ナルモノニ付テハ步ノ十分ノ一ヲ合、合ノ十分ノ一ヲ勻トシテ之ヲ定メ勻未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ

第一百一條 舊法ノ土地臺帳ハ之ヲ本法ノ土地臺帳ト看做ス

第一百二條 小笠原島及伊豆七島ノ地租ニ付テハ當分ノ内仍從前ノ例ニ依ル

土地賃貸價格改訂

○土地賃貸價格改訂法

(昭和十一年六月一日法律第三十六號)

- 第一條** 政府ハ地租法第九條第一項ノ規定ニ依リ昭和十三年一月一日ニ於テ土地ノ賃貸價格ヲ改訂シ昭和十三年分ヨリ改訂賃貸價格ニ依リ地租ヲ徵收ス
- 第二條** 改訂賃貸價格ハ各地目毎ニ昭和十一年四月一日ニ於テ土地ノ情況類似スル區域内ニ於ケル標準ト爲ルベキ土地ノ賃貸價格(標準賃貸價格)ニ依ル
- 前項ニ定ムルモノノ外賃貸價格ノ算定ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
- 第三條** 昭和十一年四月一日後昭和十二年十二月三十一日迄ノ間ニ於テ賃貸價格ヲ設定シ又ハ修正シタル土地ノ改訂賃貸價格ハ地租法第九條第三項ノ例ニ準ジ之ヲ定ム
- 昭和十一年四月一日後昭和十二年十二月三十一日迄ノ間ニ於テ分筆又ハ合筆ヲ爲シタル土地ノ改訂賃貸價格ハ其ノ分筆又ハ合筆前ノ土地ニ付前條ノ規定ニ依リ定メラルベキ賃貸價格ヲ地租法第三十三條ノ例ニ準ジ配分又ハ合算シテ之ヲ定ム
- 第四條** 改訂賃貸價格ニ依ル各土地ノ地租額ガ従前ノ賃貸價格ニ依ル地租額ノ四倍ヲ超ユルトキハ其ノ四倍ヲ超ユル金額ニ相當スル地租ハ昭和十五年分迄之ヲ免除ス
- 第五條** 第二條第一項ノ區域及標準賃貸價格ハ賃貸價格調査委員會ノ議ニ付シ政府ニ於テ之ヲ定ム
- 第六條** 稅務署長ハ第二條第一項ノ區域及標準賃貸價格ノ調査書ヲ作成シ之ヲ賃貸價格調査委員會ニ提出スベシ

第七條 各稅務署所轄内ニ賃賃價格調査委員會ヲ置ク但シ稅務署所轄内ニ在ル市ニ付テハ命令ヲ以テ特ニ賃賃價格調査委員會ヲ置クコトヲ得

第八條 賃賃價格調査委員會ハ之ヲ置クベキ區域内ノ各市町村ニ於テ地租納稅義務者ノ選舉シタル調査委員ヲ以テ之ヲ組織ス

各市町村ニ於テ選舉スベキ調査委員ノ數ハ市ニ在リテハ十人、町村ニ在リテハ一人トス但シ市町村ノ情況ニ依リ命令ヲ以テ之ヲ増減スルコトヲ得

第九條 選舉期日前十五日ノ現在ニ於テ地租名寄帳ニ納稅義務者トシテ記載セラレタル個人（地租法第七十條又ハ第七十三條第一項但書ノ規定ニ依リ地租ヲ免除セララル者又ハ地租ヲ徵收セラレザル者ヲ含ム）ハ當該市町村内ニ於テ調査委員ヲ選舉シ又ハ調査委員ニ選舉セララルコトヲ得但シ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ此ノ限ニ在ラズ

一 無能力者

二 破産者ニシテ復權ヲ得ザルモノ

三 國稅滯納處分ヲ受ケタル後一年ヲ經ザル者

四 六年ノ懲役若ハ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ又ハ舊刑法ノ重罪ノ刑ニ處セラレタル者

五 六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ニシテ其ノ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至ル迄ノモノ

六 地租法第八十三條又ハ第八十六條第二項ノ規定ニ依リ處罰セラレタル後五年ヲ經ザル者

法人ニシテ地租ノ納稅義務ヲ有スル者ハ前項ノ規定ニ準ジ調査委員ヲ選舉スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ選舉ニ關スル代表者ヲ定メ當該市町村長ニ申告スベシ

第一項各號ノ一ニ該當スル者ハ前項ノ規定ニ依リ法人ノ代表者タルコトヲ得ズ

第十條 投票及開票ニ關スル事務ハ市町村長之ヲ擔任シ其ノ他ノ選舉ニ關スル事務ハ稅務署長之ヲ擔任ス

第十一條 稅務署長ハ調査委員ノ選舉期日ヲ定メ之ヲ市町村長ニ通知スベシ

市町村長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ少クトモ選舉期日七日前ニ之ヲ公示スベシ

前項ノ公示ニハ投票及開票ノ日時及場所ヲ記載スベシ

第十二條 調査委員ノ選舉ハ無記名投票ヲ以テ之ヲ行フ

投票ハ一人一票ニ限ル

選舉人ハ選舉ノ當日投票時間内ニ自ラ投票所ニ到リ被選舉人一人ノ氏名ヲ投票用紙ニ記載シテ投票スベシ

投票用紙ハ選舉ノ當日投票所ニ於テ之ヲ選舉人ニ交付スベシ

第十三條 市町村長ハ當該市町村内ニ於テ選舉資格ヲ有スル者ノ内ヨリ二人ノ立會人ヲ選任シ投票及開票ニ立會ハシムベシ

立會人ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ手當ヲ支給ス

第十四條 投票ノ效力ハ立會人ノ意見ヲ聽キ市町村長之ヲ決定スベシ

第十五條 市町村長ハ投票ヲ調査シ直ニ左ノ事項ヲ稅務署長ニ通知スベシ

一 投票人及投票ノ數並ニ有效投票及無效投票ノ數

二 投票ヲ無効ト決定シタル事由

三 被選舉人ノ住所、氏名、生年月日及其ノ得票數

第十六條 稅務署長前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ調査シ當選人ヲ決定スベシ

第十七條 投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トス得票數同ジキトキハ年齡多キ者ヲ取り年齡モ亦同ジキトキハ稅務署長抽籤シテ之ヲ定ム

第十八條 稅務署長當選人ヲ決定シタルトキハ其ノ氏名ヲ公示シ且之ヲ當選人及市町村長ニ通知ス

市町村長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ當選人ノ氏名ヲ公示スベシ

第十九條 調査委員ニ當選シタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ズ

第二十條 調査委員第九條第一項各號ノ一ニ該當スルニ至リタルトキハ其ノ職ヲ失フ

第二十一條 調査委員ニ缺員ヲ生ジタルトキハ當選人ト爲ラザリシ者ノ中得票數多キ者ヨリ順次之ヲ補充ス其ノ得票數同ジキトキハ第十七條ノ規定ヲ準用ス

第十八條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十二條 調査委員ノ選舉ニ於テ當選人ノ數ガ定數ニ達セザルトキ又ハ調査委員ニ缺員ヲ生ジ前條ノ規定ニ依リ補充スベキ者ナキトキハ補缺選舉ヲ行フ但シ賃賃價格調査委員會開會後缺員ヲ生

ズ

シタル場合ニ於テハ之ヲ行ハザルコトヲ得

第二十三條 賃賃價格調査委員會ハ稅務署長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク其ノ開會日數ハ三十日以内トス

第二十四條 賃賃價格調査委員會ハ開會ノ始ニ於テ調査委員中ヨリ會長ヲ選舉スベシ

會長事故アルトキハ出席シタル調査委員中ノ年齡多キ者會長ノ職務ヲ代理ス

第二十五條 賃賃價格調査委員會ハ定員ノ過半數ニ當ル委員出席スルニ非ザレバ決議スルコトヲ得

議事ハ出席員ノ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

第二十六條 賃賃價格調査委員會ノ決議ハ會長之ヲ稅務署長ニ通知スベシ

第二十七條 昭和十二年九月三十日迄ニ賃賃價格調査委員會成立セザルトキハ稅務署長ニ於テ第二

條第一項ノ區域及標準賃賃價格ヲ定ム

賃賃價格調査委員會開會ノ日ヨリ第二十三條ノ期間内又ハ昭和十二年九月三十日迄ニ決議終了セ

ザルトキハ稅務署長ニ於テ第二條第一項ノ區域及標準賃賃價格ヲ定ム

第二十八條 稅務署長ハ賃賃價格調査委員會ノ決議ヲ不當ト認ムルトキハ十日以内ノ期間ヲ定メ再

議ニ付ス仍其ノ決議ヲ不當ト認ムルトキ又ハ再議期間内ニ決議終了セザルトキハ稅務署長ニ於テ

第二條第一項ノ區域及標準賃賃價格ヲ定ム

第二十九條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ賃賃價格調査委員會ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第三十條 調査委員ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ手當及旅費ヲ支給ス

土地賃賃價格改訂法

七七

第三十一條 第二條第一項ノ區域及標準賃貸價格ヲ定メタルトキハ稅務署長ハ之ヲ市町村長ニ通知スベシ

市町村長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ二十日間關係者ノ縱覽ニ供スベシ縱覽期間ハ豫メ之ヲ公示スベシ

第三十二條 自己ノ納稅義務ヲ有スル土地ニ適用セラレベキ標準賃貸價格ニ關シテ異議アル者ハ前條ノ縱覽期間滿了ノ日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ稅務署長ヲ經由シテ稅務監督局長ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

前項ノ申立アリタル場合ト雖モ政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セズ

第三十三條 前條第一項ノ申立アリタルトキハ稅務監督局長ハ之ヲ審査決定シ異議申立人ニ通知スベシ

第三十四條 前條ノ決定ニ對シ不服アルトキハ訴願ヲ爲シ又ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第三十五條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ土地ノ所有者、質權者、地上權者其ノ他利害關係人ニ對シ賃貸價格ノ調査上必要ナル事項ヲ質問スルコトヲ得

第三十六條 賃貸價格ノ調査又ハ決議ニ從事シタル者ハ其ノ調査又ハ決議ニ關シ知リタル祕密ヲ正當ノ事由ナクシテ他ニ漏洩スルコトヲ得ズ

第三十七條 町村組合ニシテ町村ノ事務ノ全部又ハ役場事務ヲ共同處理スルモノハ本法ノ適用ニ付テハ之ヲ一町村、其ノ組合管理者ハ之ヲ町村長ト看做ス

市制第六條又ハ第八十二條第三項ノ市ニ於テハ本法中市ニ關スル規定ハ區ニ、市長ニ關スル規定ハ區長ニ之ヲ適用ス

町村制ヲ施行セザル地ニ於テハ本法中町村ニ關スル規定ハ町村ニ準ズベキモノニ、町村長ニ關スル規定ハ町村長ニ準ズベキモノニ之ヲ適用ス

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

地租法第七十一條第一項ニ規定スル申請期間ハ昭和十三年分地租ニ限り命令ヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ得

營業收益稅

○營業收益稅法

(大正十五年三月二十七日法律第十一號)

改正 昭和六年四月一日法律第四十七號

第一條 本法施行地ニ本店、支店其ノ他ノ營業場ヲ有スル營利法人ニハ本法ニ依リ營業收益稅ヲ課ス

第二條 本法施行地ニ營業場ヲ有シ左ニ掲クル營業ヲ爲ス個人ニハ本法ニ依リ營業收益稅ヲ課ス

- 一 物品販賣業(動植物其ノ他普通ニ物品ト稱セサルモノノ販賣ヲ含ム)
- 二 銀行業
- 三 無盡業
- 四 金錢貸付業
- 五 物品貸付業(動植物其ノ他普通ニ物品ト稱セサルモノノ貸付ヲ含ム)
- 六 製造業(瓦斯電氣ノ供給、物品ノ加工修理ヲ含ム)
- 七 運送業(運送取扱ヲ含ム)
- 八 倉庫業
- 九 請負業
- 十 印刷業
- 十一 出版業

- 十二 寫眞業
- 十三 席貸業
- 十四 旅人宿業(下宿ヲ含ミ木賃宿ヲ含マス)
- 十五 料理店業
- 十六 周旋業
- 十七 代理業
- 十八 仲立業
- 十九 問屋業

第三條 營業收益稅ハ營業ノ純益ニ付之ヲ賦課ス

第四條 法人ノ純益ハ各事業年度ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シタル金額ニ依ル

法人カ事業年度中ニ解散シ又ハ合併ニ因リテ消滅シタル場合ニ於テハ其ノ事業年度ノ始ヨリ解散又ハ合併ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ一事業年度ト看做ス

第五條 合併後存續スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ純益ニ付營業收益稅ヲ納ムル義務アルモノトス

第六條 個人ノ純益ハ前年中ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額ニ依ル但シ前年一月一日ヨリ引續キ爲シタルニ非サル營業ニ付テハ其ノ年ノ豫算ニ依リ計算ス

相續シタル營業ニ付テハ相續人カ引續キ之ヲ爲シタルモノト看做シテ其ノ純益ヲ計算ス

資本利子稅ヲ課セラルヘキ資本利子ハ之ヲ純益ニ算入セス

第七條 左ニ掲クル營業ノ純益ニハ營業收益稅ヲ課セス

- 一 政府ノ發行スル印紙切手類ノ賣捌
- 二 度量衡ノ製作、修覆又ハ販賣
- 三 自己ノ採掘シ又ハ採取シタル鑛物ノ販賣
- 四 新聞紙法ニ依ル出版
- 五 本法施行地外ニ在ル營業場ニ於テ爲ス營業
- 六 法人ノ漁業又ハ演劇興業
- 七 個人ノ自己ノ收穫シタル農產物、林產物、畜產物若ハ水產物ノ販賣又ハ之ヲ原料トスル製造

但シ特ニ營業場ヲ設ケテ爲ス販賣又ハ製造ヲ除ク

第八條 勅令ヲ以テ指定スル重要物產ノ製造業ヲ營ム者ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ開業ノ年及其ノ翌年ヨリ三年間其ノ營業ヨリ生スル純益ニ付營業收益稅ヲ免除ス

第九條 個人ノ純益金額四百圓ニ滿タサルトキハ營業收益稅ヲ課セス

第十條 營業收益稅ハ左ノ稅率ニ依リ之ヲ賦課ス(昭和六年法律第

法人	百分ノ三・四
個人	百分ノ二・二

純益金額千圓以下ナルトキ

百分ノ二・二

營業收益稅法

純益金額千圓ヲ超ユルトキ	〔千圓以下ノ金額	百分ノ二・二
	千圓ヲ超ユル金額	百分ノ二・六

法人カ各事業年度ニ於テ納付シタル地租額又ハ資本利子稅額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該事業年度ノ營業收益稅額ヨリ之ヲ控除ス

個人カ其ノ營業用ノ土地ニ付納付シタル地租額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ營業收益稅額ヨリ之ヲ控除ス

前二項ノ場合ニ於テ控除スヘキ地租又ハ資本利子稅ハ純益計算上之ヲ損金又ハ必要經費ニ算入セ

第十一條 納稅義務アル法人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ純益金額ヲ政府ニ申告スヘシ

第十二條 納稅義務アル個人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ毎年三月十五日迄ニ純益金額ヲ政府ニ申告スヘシ

第十三條 法人ノ純益金額ハ第十一條ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定シ個人ノ純益金額ハ所得稅法ノ所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得調査委員會閉會後個人ノ純益金額ノ決定ニ付脱漏アルコトヲ發見シタルトキハ其ノ決定ヲ爲スヘカリシ年ノ翌年ニ於ケル所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ純益金額ヲ決定スルコトヲ得

所得調査委員會閉會後個人ノ營業ニ付納稅義務アルコトヲ申出テ又ハ純益金額ノ増加アルコトヲ申出テタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ其ノ純益金額ヲ決定ス

第十四條 稅務署長ハ毎年個人ノ營業ニ付納稅義務アリト認ムル者ノ純益金額ヲ調査シ其ノ調査書ヲ所得調査委員會ニ送付スヘシ

前項ノ規定ハ前條第二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十五條 所得稅法第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ純益金額ノ決議及決定ニ付之ヲ準用ス

第十六條 第十三條又ハ前條ノ規定ニ依リ純益金額ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第十七條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル純益金額ニ對シテ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得

前項ノ請求アリタル場合ト雖政府ハ稅金ノ徵收ヲ猶豫セス

第十八條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得稅法ノ所得審査委員會ノ決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得稅法第五十二條及第六十一條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十九條 個人ノ營業ニ付納稅義務アル者純益金額二分ノ一以上減損アルトキハ政府ニ純益金額ノ

更訂ノ請求ヲ爲スコトヲ得但シ翌年一月三十一日ヲ過キタルトキハ此ノ限ニ在ラス

純益金額決定後營業繼續ニ因リ純益金額ノ減損シタル場合ハ前項ノ規定ヲ適用セス

第二十條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ純益金額ヲ査覈シ二分ノ一以上ノ減損アルトキハ之ヲ更訂ス

第二十一條 納稅義務者第十八條ノ決定又ハ前條ノ更訂處分ニ對シ不服アルトキハ訴訟願又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第二十二條 法人ノ營業收益稅ハ事業年度毎ニ之ヲ徵收ス

個人ノ營業收益稅ハ年額ヲ二分シ左ノ二期ニ於テ之ヲ徵收ス

第一期 其ノ年八月一日ヨリ三十一日限

第二期 其ノ年十一月一日ヨリ三十日限

第二十三條 第十九條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ更訂處分ノ確定スルニ至ル迄稅金ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

第二十四條 個人ノ營業收益稅ハ納稅義務者ノ住所地、住所ナキトキハ主タル營業場ノ所在地ヲ以テ納稅地トス但シ第三種ノ所得ニ付所得稅ヲ納ムル者ニ在リテハ所得稅ノ納稅地ヲ以テ營業收益稅ノ納稅地トス

第二十五條 收稅官吏ハ營業ニ關スル帳簿物件ヲ検査シ又ハ營業者ニ質問スルコトヲ得

第二十六條 政府ハ同業組合其ノ他ノ營業者ノ團體ニ對シ營業收益稅ニ關スル事項ヲ諮問スルコトヲ得

前項ノ諮問ヲ受ケタル團體ハ命令ノ定ムル所ニ依リ調書ヲ提出スヘシ

第二十七條 所得稅法第七十三條ノ二ノ規定ハ純益金額ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第二十八條 第二十五條ノ規定ニ依ル帳簿物件ノ検査ヲ妨ケ又ハ虛偽ノ記載ヲ爲シタル帳簿ヲ提示シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ因リ營業收益稅ヲ遁脫シタル者ハ其ノ遁脫シタル稅金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出テタル者ハ其ノ罪ヲ問ハス

前項ノ場合ニ於テ個人ノ營業ニ付營業收益稅ヲ遁脫シタル者ノ純益金額ハ第十三條第二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ之ヲ決定シ直ニ其ノ稅金ヲ徵收ス

第三十條 營業收益稅ノ調査又ハ審査ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル祕密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒス但シ前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

附則

本法ハ大正十六年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

法人ノ大正十六年一月一日以後ニ終了スル事業年度ノ期間カ大正十五年ニ跨ルモノニ付テハ當該事業年度ノ純益金額ヨリ日割計算ノ方法ニ依リテ算出シタル大正十五年ニ屬スル期間ノ純益ヲ控除ス

附則 (昭和六年法律第四十七號)

本法ハ個人ノ營業收益稅ニ付テハ昭和六年分ヨリ、法人ノ營業收益稅ニ付テハ昭和七年四月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ之ヲ適用ス但シ昭和六年分ノ個人ノ營業收益稅ニ限リ改正規定中百分ノ二・二トアルハ百分ノ二・五、百分ノ二・六トアルハ百分ノ二・八トス
昭和七年三月三十一日以前ニ終了スル事業年度分ノ法人ノ營業收益稅及昭和五年分以前ノ個人ノ營業收益稅ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

○營業收益稅法中改正法律 (昭和十年四月二十日法律第四十二號)

營業收益稅法中左ノ通改正ス

第七條第六號中「又ハ演劇興業」ヲ削ル

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

本法施行前ニ終了シタル法人ノ各事業年度分ノ營業收益稅ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

臨時利得稅

○臨時利得税法

(昭和十年三月三十日法律第二十號)

改正 昭和十二年三月三十日法律第三號

第一條 本法施行地ニ住所ヲ有シ又ハ一年以上居所ヲ有スル者ハ本法ニ依リ臨時利得税ヲ納ムル義務アルモノトス

第二條 前條ノ規定ニ該當セザル者本法施行地ニ資産又ハ營業ヲ有スルトキハ其ノ利得ニ付テノミ臨時利得税ヲ納ムル義務アルモノトス

第三條 臨時利得税ハ左ノ利得ニ付之ヲ賦課ス

一 法人ノ利得

二 營業收益税法第二條ニ掲グル營業(鑛業又ハ砂鑛業ヲ含ム)ニ因ル個人ノ利得

第四條 法人ノ現事業年度ノ利益ガ既往事業年度ノ平均利益ヲ超過スル場合ニ於テ其ノ超過額ヲ以テ法人ノ利得金額トス

前項利得金額計算ノ場合ニ於テ左記各號ニ該當スルトキハ各其ノ定ムル所ニ依リ既往事業年度ノ平均利益ヲ計算ス

一 何レノ既往事業年度ニ於テモ利益ナキトキ又ハ既往事業年度ノ平均利益ガ既往事業年度ノ平均資本金額ニ對シ年百分ノ七未満ナルトキハ既往事業年度ノ平均資本金額ニ對シ年百分ノ七ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ以テ既往事業年度ノ平均利益トス

二 法人ノ第一次ノ事業年度ガ昭和七年一月一日以後ニ於テ終了シタルトキハ現事業年度ノ資本

金額ニ對シ年百分ノ七ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ以テ既往事業年度ノ平均利益トス

三 現事業年度ノ資本金額ガ既往事業年度ノ平均資本金額ニ對シ増減アルトキハ既往事業年度ノ平均資本金額ニ對スル平均利益ノ割合ヲ現事業年度ノ資本金額ニ乗ジテ算出シタル金額ヲ以テ既往事業年度ノ平均利益トス此ノ場合ニ於テ第一號ノ規定ノ適用ニ付テハ現事業年度ノ資本金額ヲ既往事業年度ノ平均資本金額ト看做ス

四 現事業年度ノ期間ガ既往事業年度ノ期間ト異ルトキハ現事業年度ノ月數ニ應ジ月割ヲ以テ既往事業年度ノ利益ヲ計算ス

本法ニ於テ現事業年度ト稱スルハ昭和十年一月一日以後ニ於テ終了スル各事業年度ヲ謂ヒ既往事業年度ト稱スルハ昭和六年十二月三十一日以前三年内ニ終了シタル各事業年度ヲ謂フ

利得金額年千圓未満ナルトキハ臨時利得税ヲ課セズ

第五條 法人ノ利益ハ各事業年度ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シタル金額ニ依ル但シ保險會社ニ在リテハ各事業年度ノ利益金又ハ剩餘金ニ依ル

本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有セザル法人ノ利益ハ本法施行地ニ於ケル資産又ハ營業ニ付前項ノ規定ニ準ジ之ヲ計算ス

法人ガ事業年度中ニ解散シ又ハ合併ニ依リテ消滅シタル場合ニ於テハ其ノ事業年度ノ始ヨリ解散又ハ合併ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ一事業年度ト看做ス

第六條 法人ノ各事業年度ノ資本金額ハ各月末ニ於ケル拂込株式金額、出資金額又ハ基金及積立金

額ノ月割平均ヲ以テ之ヲ計算ス

前項ニ於テ積立金額ト稱スルハ積立金其ノ他名義ノ何タルヲ問ハズ法人ノ利益中其ノ留保シタル金額ヲ謂フ

本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有セザル法人ノ各事業年度ノ資本金額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ計算ス

昭和七年一月一日以後本法施行ニ至ル迄ノ期間ニ於テ拂込株式金額又ハ出資金額ヲ減少シタル法人ノ現事業年度ノ資本金額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ減少ナカリシモノト看做シテ之ヲ計算ス

第七條 法人合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ノ既往事業年度ノ平均資本金額及平均利益ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ計算ス

第八條 合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ利得ニ付臨時利得税ヲ納ムル義務アルモノトス

第九條 個人ノ利益ガ昭和六年以前三年ノ平均利益ヲ超過スル場合ニ於テ其ノ超過額ヲ以テ個人ノ利得金額トス

個人ノ利益ガ一萬圓未満ナルトキハ前項ノ超過額中二千圓ヲ控除シタル金額ヲ以テ前項ノ利得金額トス

個人ノ利益一萬圓以上ナル者ノ利得金額千圓未満ナルトキハ臨時利得税ヲ課セズ

營業ヲ繼續シ又ハ營業繼續ト認ムベキ事實アルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ前營業者ノ平均利益

ヲ其ノ平均利益ト看做ス

營業ノ期間ガ一年未滿ナル場合ニ於ケル平均利益ノ計算ハ命令ノ定ムル所ニ依ル
利得金額計算ノ場合ニ於テ昭和六年以前三年ノ平均利益三千圓未滿ナルトキ又ハ其ノ平均利益ナ
キトキハ三千圓ヲ以テ平均利益トス

第十條 個人ノ利益ハ前年中ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額ニ依ル但シ前年一月一
日ヨリ引續キ爲シタルニ非ザル營業ニ付テハ其ノ年ノ豫算ニ依リ計算ス

相續シタル營業ニ付テハ相續人ガ引續キ之ヲ爲シタルモノト看做シテ其ノ利益ヲ計算ス

第十一條 個人ノ利益ガ六千圓未滿ナルトキハ臨時利得税ヲ課セズ

第十二條 營利ヲ目的トセザル法人ニシテ所得税法其ノ他ノ法律ニ依リ所得税ヲ課セラレザル者ニ
ハ臨時利得税ヲ課セズ

第十三條 個人ノ自己ノ收穫シタル農産物、林産物、畜産物若ハ水産物ノ販賣又ハ之ヲ原料トスル
製造ノ利益ニ付テハ本法ヲ適用セズ但シ特ニ營業場ヲ設ケテ爲ス販賣又ハ製造ノ利益ハ此ノ限ニ
在ラズ

第十四條 臨時利得税ハ左ノ税率ニ依リ之ヲ賦課ス

- 一 法人ノ利得 利得金額百分ノ十
 - 二 個人ノ利得 利得金額百分ノ八
- 前項ノ規定ニ依リ算出シタル税額ガ法人ニ在リテハ利得金額中年千圓ヲ控除シタル金額、個人ニ

在リテハ利得金額中千圓ヲ控除シタル金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過額ニ相當スル臨時利得税ヲ
免除ス但シ第九條第二項ニ該當スル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第十五條 納税義務アル法人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ利得金額ヲ政府ニ申告スベシ

第十六條 納税義務アル個人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ毎年三月十五日迄ニ利得金額ヲ政府ニ申告ス
ベシ

第十七條 法人ノ利得金額ハ第十五條ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキ
ハ政府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定シ個人ノ利得金額ハ所得税法ノ所得調査委員會ノ調査ニ
依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得調査委員會閉會後個人ノ利得金額ノ決定ニ付脱漏アルコトヲ發見シタルトキハ其ノ決定ヲ爲
スベカリシ年ノ翌年ニ於ケル所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ利得金額ヲ決定スルコ
トヲ得

所得調査委員會閉會後個人ノ利得ニ付納税義務アルコトヲ申出デ又ハ利得金額ノ増加アルコトヲ
申出デタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラズ政府ニ於テ其ノ利得金額ヲ決定ス

第十八條 稅務署長ハ毎年個人ノ利得ニ付納税義務アリト認ムル者ノ利得金額ヲ調査シ其ノ調査書
ヲ所得調査委員會ニ送付スベシ

前項ノ規定ハ前條第二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十九條 所得税法第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ利得金額ノ決議及決定ニ付之ヲ準用ス

第二十條 第十七條又ハ前條ノ規定ニ依リ利得金額ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ

第二十一條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル利得金額ニ對シテ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得

前項ノ請求アリタル場合ト雖モ政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セズ

第二十二條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得税法ノ所得審査委員會ノ決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得税法第五十二條及第六十一條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十三條 利得ニ付納稅義務アル個人ハ利得金額ニ減損アルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ政府ニ

利得金額ノ更訂ヲ請求スルコトヲ得但シ利益二分ノ一以上減損セザルトキハ此ノ限ニ在ラズ

利得金額決定後營業繼續ニ因リ利得金額ノ減損シタル場合ハ前項ノ規定ヲ適用セズ

第二十四條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ政府ハ利益ヲ査覈シ二分ノ一以上ノ減損アルトキハ利得金額ヲ更訂ス

第二十五條 納稅義務者第二十二條ノ決定又ハ前條ノ更訂處分ニ對シ不服アルトキハ訴訟又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第二十六條 法人ノ利得ニ付テハ事業年度毎ニ臨時利得稅ヲ徵收ス

個人ノ利得ニ付テハ臨時利得稅ノ年額ヲ四分シ左ノ四期ニ於テ之ヲ徵收ス但シ納稅義務者納稅管

理人ノ申告ヲ爲サズシテ本法施行地外ニ住所又ハ居所ヲ移ストキハ直ニ其ノ臨時利得稅ヲ徵收スルコトヲ得

第一期 其ノ年七月一日ヨリ三十一日限

第二期 其ノ年十月一日ヨリ三十一日限

第三期 翌年一月一日ヨリ三十一日限

第四期 翌年三月一日ヨリ三十一日限

第二十七條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ依リ臨時利得稅ヲ遁脱シタル者ハ其ノ遁脱シタル税金ノ三倍

ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出デタル者ハ其ノ罪ヲ問ハズ前項ノ場合ニ於テ個人ノ利得ニ付臨時利得稅ヲ遁脱シタル者ノ利得金額ハ第十七條第二項ノ規定ニ拘ラズ政府ニ於テ之ヲ決定シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス

第二十八條 臨時利得稅ノ調査又ハ審査ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル秘密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒズ但シ前條ノ罪ヲ犯シタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第三十條 所得税法第五十七條、第五十八條、第七十條及第七十二條乃至第七十三條ノ二ノ規定ハ臨時利得稅ニ付之ヲ準用ス

第三十一條 大正九年法律第十二號第二條及第三條ノ規定ハ臨時利得税ニ付之ヲ準用ス
臺灣又ハ樺太ニ住所ヲ有シ又ハ一年以上居所ヲ有スル個人ノ利得ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ
臨時利得税ヲ課セズ

第三十二條 大正十三年法律第六號ニ依リ所得税及營業收益税ヲ免除セラルル所得及純益ニ付テハ
本法ヲ適用セズ

第三十三條 北海道、府縣、市町村其ノ他ノ公共團體ハ臨時利得税ノ附加税ヲ課スルコトヲ得ズ
附則

本法ハ昭和十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ法人ニ付テハ昭和十年一月一日ヲ含ム事業年度分ヨ
リ、個人ニ付テハ昭和十年分ヨリ之ヲ適用ス

本法ニ依ル臨時利得税ノ賦課ハ法人ニ付テハ昭和十三年十二月三十一日ヲ含ム事業年度分限リ、個
人ニ付テハ昭和十三年分限リトス

第十六條ノ規定中三月十五日トアルハ昭和十年ニ限リ四月二十五日トス
明治四十年法律第二十一號第一條第一項ニ左ノ一號ヲ加フ

六 臨時利得税

資本利子税

○資本利子税法

(大正十五年三月二十七日法律第十二號)

- 第一條** 本法施行地ニ於テ資本利子ノ支拂ヲ受クル者ニハ本法ニ依リ資本利子税ヲ課ス
- 第二條** 資本利子税ハ本法施行地ニ於テ支拂ヲ受クル左ノ資本利子ニ付之ヲ賦課ス
甲種 公債、社債、産業債券若ハ銀行預金ノ利子又ハ貸付信託ノ利益
乙種 第三種ノ所得ニ付納稅義務ヲ有スル者ノ第三種ノ所得中營業ニ非サル貸金又ハ預金ノ利子
本法ニ於テ貸付信託ト稱スルハ所得稅法第三條ノ三ニ規定スル貸付信託ヲ謂フ
- 第三條** 甲種ノ資本利子ハ其ノ支拂ヲ受クヘキ金額ニ依ル
- 第四條** 乙種ノ資本利子ハ前年中ノ收入金額ニ依ル
被相續人ノ收入金額ハ之ヲ相續人ノ收入金額ト看做ス
- 第五條** 甲種ノ資本利子ニシテ左ニ掲クルモノニハ資本利子税ヲ課セス
一 所得稅法其ノ他ノ法律ニ依リ第二種所得稅ヲ課セラレサル者ノ支拂ヲ受クル利子
二 貯蓄債券又ハ復興貯蓄債券ノ利子
- 第六條** 資本利子税ノ稅率ハ資本利子金額百分ノ二トス
信託會社カ其ノ引受ケタル貸付信託ノ信託財產ニ付納付シタル資本利子稅額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該貸付信託ノ利益ニ對スル資本利子稅額ヨリ之ヲ控除ス
前項ノ場合ニ於テ控除スヘキ資本利子税ハ其ノ貸付信託ノ利益ニ之ヲ加算ス

第七條 乙種ノ資本利子ニ付納稅義務アル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ毎年三月十五日迄ニ其ノ資本利子金額ヲ政府ニ申告スヘシ

第八條 乙種ノ資本利子金額ハ所得税法ノ所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス
所得調査委員會閉會後乙種ノ資本利子ノ決定ニ付脱漏アルコトヲ發見シタルトキハ其ノ決定ヲ爲スヘカリシ年ノ翌年ニ於ケル所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ資本利子金額ヲ決定スルコトヲ得

所得調査委員會閉會後乙種ノ資本利子ニ付納稅義務アルコトヲ申出テ又ハ資本利子金額ノ増加アルコトヲ申出テタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ其ノ資本利子金額ヲ決定ス

第九條 稅務署長ハ毎年乙種ノ資本利子ニ付納稅義務アリト認ムル者ノ資本利子金額ヲ調査シ其ノ調査書ヲ所得調査委員會ニ送付スヘシ

前項ノ規定ハ前條第二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十條 所得税法第五十條乃至第五十二條ノ規定ハ資本利子金額ノ決議及決定ニ付之ヲ準用ス

第十一條 第八條又ハ前條ノ規定ニ依リ乙種ノ資本利子金額ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第十二條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル資本利子金額ニ對シテ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得
前項ノ請求アリタル場合ト雖政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セス

第十三條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得税法ノ所得審査委員會ノ決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得税法第五十二條及第六十一條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十四條 納稅義務者前條ノ決定ニ對シ不服アルトキハ訴願又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第十五條 甲種ノ資本利子ニ付テハ其ノ金額支拂ノ際支拂者其ノ資本利子稅ヲ徵收シ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ納ムヘシ

乙種ノ資本利子ニ付テハ資本利子稅ノ年額ヲ二分シ左ノ二期ニ於テ之ヲ徵收ス

第一期 其ノ年八月一日ヨリ三十一日限

第二期 其ノ年十一月一日ヨリ三十日限

第十六條 前條第一項ノ規定ニ依リ徵收スヘキ資本利子稅ヲ徵收セサルトキ又ハ其ノ徵收シタル税金ヲ納付セサルトキハ國稅徵收ノ例ニ依リ之ヲ支拂者ヨリ徵收ス

第十七條 乙種ノ資本利子ニ付テハ第三種ノ所得ニ對スル所得稅ノ納稅地ヲ以テ資本利子稅ノ納稅地トス

第十八條 收稅官吏ハ調査上必要アルトキハ資本利子ノ支拂ヲ受ケ又ハ其ノ支拂ヲ爲スト認ムル者ニ質問スルコトヲ得

第十九條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ因リ資本利子稅ヲ遁脱シタル者ハ其ノ遁脱シタル税金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出テタル者ハ其ノ罪ヲ問ハス

前項ノ場合ニ於テ乙種ノ資本利子ニ付資本利子税ヲ遁脱シタル者ノ資本利子金額ハ第八條第二項ノ規定ニ拘ラス政府ニ於テ之ヲ決定シ直ニ其ノ税金ヲ徴收ス

第二十條 資本利子ノ調査又ハ審査ノ事務ニ従事シ又ハ従事シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル祕密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒス但シ前條ノ罪ヲ犯シタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第二十二條 府縣市町村其ノ他ノ公共團體ハ資本利子税ノ附加税ヲ課スルコトヲ得ス

附則

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

乙種ノ資本利子ニ付テハ大正十五年分資本利子税ヨリ本法ヲ適用ス但シ大正十五年ニ限り第七條中三月十五日トアルハ四月三十日、第十五條中其ノ年八月一日ヨリ三十一日限トアルハ其ノ年九月一日ヨリ三十日限、第十條ノ規定ニ依ル期日五月三十一日トアルハ八月三十日トス

法人資本稅

○法人資本税法

(昭和十二年三月三十日法律第四號)

- 第一條** 本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ハ本法ニ依リ法人資本税ヲ納ムル義務アルモノトス
- 第二條** 前條ノ規定ニ該當セザル法人本法施行地ニ資本ヲ有スルトキハ其ノ資本ニ付テノミ法人資本税ヲ納ムル義務アルモノトス
- 第三條** 法人資本税ハ法人ノ資本ニ付之ヲ賦課ス
- 第四條** 第一條ノ規定ニ該當スル法人ノ資本ハ各事業年度ノ各月末ニ於ケル拂込株式金額、出資金額又ハ基金及積立金額ヨリ各月末ニ於ケル繰越缺損金額ヲ控除シタル金額ノ月割平均額ニ當該事業年度ノ月數ヲ乗ジタルモノヲ十二分シテ計算シタル金額ニ依ル
- 第二條ノ規定ニ該當スル法人ノ本法施行地ニ於ケル資本ハ前項ノ規定ニ準ジ命令ノ定ムル所ニ依リ計算シタル金額ニ依ル**
- 法人ガ事業年度中ニ解散シ又ハ合併ニ因リテ消滅シタル場合ニ於テハ其ノ事業年度ノ始ヨリ解散又ハ合併ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ一事業年度ト看做ス
- 第五條** 本法ニ於テ積立金額トハ積立金其ノ他名義ノ何タルヲ問ハズ所得税法第四條第一項ノ規定ニ依ル法人ノ普通所得中其ノ留保シタル金額ヲ謂フ
- 第六條** 合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ資

本ニ付法人資本税ヲ納ムル義務アルモノトス

第七條 營利ヲ目的トセザル法人ニシテ所得税法其ノ他ノ法律ニ依リ所得税ヲ課セラレザル者ニハ法人資本税ヲ課セズ

第八條 法人資本税ノ稅率ハ千分ノ一トス

前項ノ規定ニ依リ算出シタル稅額ガ年十圓ニ滿タザルトキハ年十圓トス
所得金額ナキ法人ノ法人資本税ハ之ヲ免除ス前二項ノ規定ニ依リ算出シタル稅額ガ其ノ事業年度ノ所得金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過額ニ相當スル法人資本税ニ付亦同ジ
所得税法第四條ノ規定ハ前項ノ所得金額ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第九條 納稅義務者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ資本額ヲ政府ニ申告スベシ

第十條 資本額ハ前條ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

第十一條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ納稅義務者又ハ納稅義務アリト認ムル者ニ質問ヲ爲シ又ハ其ノ帳簿物件ヲ検査スルコトヲ得

第十二條 第十條ノ規定ニ依リ資本額ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ

第十三條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル資本額ニ對シ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得
前項ノ請求アリタル場合ト雖モ政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セズ

第十四條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得税法ノ所得審査委員會ノ決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得税法第五十二條及第六十一條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十五條 前條第一項ノ決定ニ對シ不服アル者ハ訴願ヲ爲シ又ハ行政裁判法ニ依リ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十六條 法人資本税ハ事業年度毎ニ之ヲ徵收ス

第十七條 同族會社ノ行爲又ハ計算ニシテ法人資本税遁脫ノ目的アリト認メラルモノアル場合ニ於テハ其ノ行爲又ハ計算ニ拘ラズ政府ハ其ノ認ムル所ニ依リ資本額ヲ計算スルコトヲ得
前項ニ於テ同族會社トハ所得税法ニ規定スル同族會社ヲ謂フ

第十八條 詐僞其ノ他不正ノ行爲ニ依リ法人資本税ヲ遁脫シタル者ハ其ノ遁脫シタル税金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出デタル者ハ其ノ罪ヲ問ハズ

第十九條 第十一條ノ規定ニ依ル帳簿物件ノ検査ヲ拒ミ、妨ゲ若ハ忌避シ又ハ虚偽ノ記載ヲ爲シタル帳簿書類ヲ呈示シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十條 資本ノ調査又ハ審査ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル秘密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 第十八條ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四

十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ規定ヲ適用セズ

第二十二條 朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ノ本法施行地ニ於ケル資本ニ付テハ法人資本税ヲ課セズ

第二十三條 第六條ノ規定ハ朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ガ朝鮮、臺灣、關東州、樺太又ハ本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ト合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ガ本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル場合ニ付之ヲ準用ス

第二十四條 北海道、府縣、市町村其ノ他ノ公共團體ハ法人資本税ノ附加税ヲ課スルコトヲ得ズ

附則

本法ハ昭和十二年四月一日以後終了スル事業年度分ヨリ之ヲ適用ス

相
續
稅

○相續稅法

(明治三十八年一月一日法律第十號)

改正

明治四十三年三月二十五日法律第四號

大正三一年三月三十一日法律第二十二號

大正十一年四月十八日法律第四十八號

大正十五年三月二十七日法律第十三號

第一條

相續開始シタルトキハ開始地カ帝國内ニ在ルト否トヲ問ハス又被相續人若ハ相續人カ帝國臣民タルト否トヲ問ハス本法施行地ニ在ル相續財產ニハ本法ニ依リ相續稅ヲ課ス

第二條

被相續人カ本法施行地ニ住所ヲ有スルトキハ左ニ掲クル財產ヲ以テ本法施行地ニ在ル相續財產トス

一 本法施行地ニ在ル動產及不動產

二 本法施行地ニ在ル不動產ノ上ニ存スル權利

三 前二號ニ掲ケタルモノ以外ノ財產權

被相續人カ本法施行地ニ住所ヲ有セザルトキハ前項第一號及第二號ノ財產ヲ以テ本法施行地ニ在ル相續財產トス

船舶ノ所在ハ船籍ノ所在ニ依ル

相續開始前一年内ニ本法施行地内ヨリ本法施行地外ニ轉シタルモノノ住所又ハ船籍ハ本法施行地

内ニ在ルモノト看做ス

第三條 被相続人カ本法施行地ニ住所ヲ有スルトキハ相続開始ノ際本法施行地ニ在ル相続財産ノ價額ニ相続開始前一年内ニ被相続人カ本法施行地ニ在ル財産ニ付爲シタル贈與ノ價額ヲ加ヘ其ノ中ヨリ左ノ金額ヲ控除シタルモノヲ以テ課税價格トス

一 公課

二 被相続人ノ葬式費用

三 債務

被相続人カ本法施行地ニ住所ヲ有セサルトキハ相続開始ノ際本法施行地ニ在ル相続財産ノ價額ニ相続開始前一年内ニ被相続人カ本法施行地ニ在ル財産ニ付爲シタル贈與ノ價額ヲ加ヘタルモノヨリ左ノ金額ヲ控除シタルモノヲ以テ課税價格トス

一 其ノ財産ニ係ル公課

二 其ノ財産ヲ目的トスル留置權、特別ノ先取特權、質權又ハ抵當權ヲ以テ擔保セラルル債務

三 其ノ財産ニ關スル贈與ノ義務

永代借地權ハ相続税ノ課税價格ニ算入セス

公共團體又ハ慈善其ノ他ノ公益事業ニ對シ爲シタル贈與及遺贈ハ課税價格ニ算入セス(明治四十三年法律第四號改正)

第三條ノ二 (大正十五年法律第十三號刪除)

第四條 相続財産ノ價額ハ相続開始ノ時ノ價額ニ依ル

地上權、永小作權及定期金ニ付テハ政府ハ左ノ方法ニ依リ其ノ價格ヲ評定ス(大正十五年法律第十三號改正)

一 地上權ニ付テハ左ノ金額ヲ以テ其ノ價額トス

殘存期間十年以下ナルモノ 地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 二倍

殘存期間三十年以下ナルモノ 地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 三倍

殘存期間五十年以下ナルモノ又ハ存續期間ノ定ナキモノ 地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 五倍

殘存期間百年以下ナルモノ 地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 七倍

殘存期間百年ヨリ長キモノ 地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 十二倍

二 永小作權ニ付テハ左ノ金額ヲ以テ其ノ價額トス

殘存期間十年以下ナルモノ 永小作權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 二倍

殘存期間三十年以下ナルモノ又ハ存續期間ノ定ナキモノ 永小作權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 三倍

殘存期間五十年以下ナルモノ 永小作權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 五倍

有期定期金ハ其ノ殘存期間ニ於ケル總金額ヲ以テ其ノ價額トス但シ一年ノ定期金ノ二十倍ヲ超ユルコトヲ得ス

三 無期定期金ハ其ノ一年ノ定期金ノ二十倍ヲ以テ其ノ價額トス

四 終身定期金ハ其ノ年齢ニ依リ左ノ期間ニ於ケル定期金ノ總額ヲ以テ其ノ價

五 相続税法

額トス	
二十歳未満ノ者	十年
三十歳未満ノ者	八年
四十歳未満ノ者	六年
五十歳未満ノ者	四年
六十歳未満ノ者	二年
六十歳以上ノ者	一年

前項ニ於テ土地ノ賃貸價格ト稱スルハ貸主カ公課、修繕費、保険料其ノ他土地ノ維持ニ必要ナル經費ヲ負擔スル條件ヲ以テ之ヲ賃貸スル場合ニ於テ貸主ノ收得スヘキ金額ヲ謂フ

第五條 條件附權利、存續期間ノ不確定ナル權利、信託ノ利益ヲ受クヘキ權利又ハ訴訟中ノ權利ニ付テハ政府ノ認ムル所ニ依リ其ノ價格ヲ評定ス(大正十一年法律第四十八號改正)

第三條ニ依リ控除スヘキ債務金額ハ政府カ確實ト認メタルモノニ限ル

第六條 課稅價格カ家督相続ニ在リテハ五千圓、遺産相続ニ在リテハ千圓ニ滿タサルトキハ相続稅ヲ課セス(大正三年法律第二十二號及大正十五年法律第十三號改正)

第七條 軍人、軍屬ノ戰死又ハ戰爭ノ爲受ケタル傷痍疾病ニ起因シタル死亡ニ因リ相続開始シタルトキハ相続稅ヲ課セス但シ傷痍者又ハ疾病者ニシテ負傷又ハ發病後一年ヲ經過シ死亡シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第八條 相続稅ハ課稅價格ヲ左ノ各級ニ區分シ其ノ各區分ニ對シ相続人ノ種類ニ從ヒ遞次ニ各稅率ヲ適用シテ之ヲ課ス(明治四十三年法律第四號、大正三年法律第二十二號及大正十五年法律第十三號改正)

課稅價格	家督相続		率
	相続人カ被相続人ノ家族タル直系卑屬ナルトキ	相続人カ被相続人ノ指定シタル者、民法第九百八十二條ニ依リ選定セラレタル直系卑屬又ハ入夫ナルトキ	
五千圓以下ノ金額	千分ノ五	千分ノ六	千分ノ八
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ六	千分ノ七	千分ノ十
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ七	千分ノ八	千分ノ十五
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ八	千分ノ十	千分ノ二十
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十	千分ノ十五	千分ノ二十五
五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十五	千分ノ二十	千分ノ三十
七萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ四十
十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十	千分ノ五十
十五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十	千分ノ四十	千分ノ六十
二十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四十	千分ノ五十	千分ノ七十
二十五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ五十	千分ノ六十	千分ノ八十

課税価格	相続税		率
	相続人カ直系 ナルトキ	相続人カ配偶者又ハ 直系尊屬ナルトキ	
三十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ六十	千分ノ七十	千分ノ九十
四十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ七十	千分ノ八十	千分ノ百
五十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ八十	千分ノ九十	千分ノ百二十
七十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ九十	千分ノ百	千分ノ百三十
百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百	千分ノ百十	千分ノ百四十
二百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百十	千分ノ百二十	千分ノ百五十
三百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百二十	千分ノ百三十	千分ノ百六十
五百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百三十	千分ノ百四十	

遺産相続

課税価格	相続税		率
	相続人カ直系 ナルトキ	相続人カ配偶者又ハ 直系尊屬ナルトキ	
千圓以下ノ金額	千分ノ十	千分ノ十二	千分ノ十七
千圓ヲ超ユル金額	千分ノ十二	千分ノ十四	千分ノ二十
五千圓ヲ超ユル金額	千分ノ十四	千分ノ十七	千分ノ二十五
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十七	千分ノ二十	千分ノ三十五
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十	千分ノ二十五	千分ノ四十五
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十五	千分ノ三十五	千分ノ五十五

課税価格	相続税		率
	相続人カ直系 ナルトキ	相続人カ配偶者又ハ 直系尊屬ナルトキ	
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十五	千分ノ四十五	千分ノ六十五
五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四十五	千分ノ五十五	千分ノ七十五
七萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ五十五	千分ノ六十五	千分ノ八十五
十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ六十五	千分ノ七十五	千分ノ九十五
十五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ七十五	千分ノ八十五	千分ノ百
二十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ八十五	千分ノ九十五	千分ノ百十
三十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ九十五	千分ノ百	千分ノ百十
四十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百	千分ノ百五	千分ノ百十
五十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百五	千分ノ百十	千分ノ百十
七十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百五	千分ノ百二十五	千分ノ百十
百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百二十五	千分ノ百二十五	千分ノ百十
二百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百三十五	千分ノ百四十五	千分ノ百十
三百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百五十	千分ノ百六十	千分ノ百十
五百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百六十五	千分ノ百七十五	千分ノ百十

外國ノ法律ニ依リ開始シタル相続ニ關シテハ遺産相続ニ關スル税率ヲ準用ス但シ相続人二人以上
 アル場合ニ於テ其ノ適用スヘキ税率相異ルトキハ最低キ税率ヲ適用ス

第九條 相続人ノ廢除若ハ其ノ取消ニ關スル裁判ノ確定前又ハ相続ノ承認若ハ拋棄前ト雖政府ハ必
 要ニ依リ其ノ推定家督相続人又ハ推定遺産相続人ニ對スル税率ヲ適用シ相続税ヲ課スルコトヲ

得
相続人アルコト分明ナラサルトキハ税率ノ最高キ相続人ニ對スル税率ヲ適用シテ相続税ヲ課ス
前二項ニ依リ課税シタル後相続人確定シタルトキハ税率ノ適用ヲ改訂シ税金ノ差額ヲ追徴シ又ハ
還付ス

第十條 相続税ヲ課セラレタル後五年以内ニ於テ更ニ相続開始シタルトキハ前ノ相続額ニ對スル相
續税ニ相當スル相続税ヲ免除ス
相続税ヲ課セラレタル後七年以内ニ於テ更ニ相続開始シタルトキハ前ノ相続額ニ對スル相続税ノ
半額ニ相當スル相続税ヲ免除ス(明治四十三年法律第四號改正)

第十一條 相続人ハ相続開始ヲ知リタル日ヨリ遺言執行者又ハ相続財産管理人ハ就職ノ日ヨリ三箇
月以内ニ相続財産ノ目錄及相続財産ノ價額中ヨリ控除セラルヘキ金額ノ明細書ヲ政府ニ提出スヘ
シ

相続カ帝國外ニ於テ開始シタルトキ又ハ前項ノ書類ヲ提出スヘキ者カ帝國內ニ住所ヲ有セザルト
キハ前項ノ期間ハ六箇月トス
相続人確定シタルトキハ前二項ノ書類ヲ提出スルト同時ニ又ハ其ノ確定ノ日ヨリ一箇月以内ニ相
續人ノ相続關係ヲ記載シタル書面ヲ政府ニ提出スヘシ

第十二條 戶籍吏左ノ事項ニ關スル屆書ヲ受理シタルトキハ之ヲ收稅官廳ニ報告スヘシ
一 死亡又ハ失踪

二 戶主ノ隱居又ハ國籍喪失

三 戶主カ婚姻又ハ養子縁組ノ取消ニ因リテ其ノ家ヲ去リタルコト

四 入夫婚姻ニ因リ女戶主カ戶主權ヲ喪失シタルコト

五 戶主タル入夫ノ離婚

第十三條 課稅價格ハ政府之ヲ決定ス

課稅價格ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ相続人、遺言執行者又ハ相続財産管理人ニ通知スヘシ

第十四條 相続人、遺言執行者又ハ相続財産管理人前條ノ決定ニ對シ異議アルトキハ通知ヲ受ケタ
ル日ヨリ二十日以内ニ申立テ再審査ヲ求ムルコトヲ得

相続人、遺言執行者又ハ相続財産管理人帝國內ニ住所ヲ有セザルトキハ前項ノ期間ハ之ヲ三箇月
トス

第十五條 前條ノ請求アリタルトキハ相続稅審査委員會ノ諮問ヲ經テ政府之ヲ決定ス
審査委員會ノ組織及會議ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條 課稅價格ノ決定ニ對シ不服アル者ハ訴願又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第十七條 相続税ハ一時ニ之ヲ納付スヘシ但シ稅金額百圓以上ナルトキハ相続税ニ相當スル擔保ヲ
提供シ七年以内ノ年賦延納ヲ求ムルコトヲ得(明治四十三年法律第四號及
大正十五年法律第十三號改正)
前項ニ依リテ年賦延納ヲ求ムトスル者ハ第十三條ノ通知ヲ受ケタル後二十日以内ニ政府ニ出願
スヘシ

相続人、遺言執行者又ハ相続財産管理人帝國内ニ住所ヲ有セサルトキハ前項ノ期間ハ三箇月トス
第十八條 審査ヲ求メ訴願又ハ行政訴訟ヲ爲シタル場合ト雖相続人、遺言執行者又ハ相続財産管理
人ハ通知ヲ受ケタル金額ニ依リ税金ヲ納付スヘシ

第十九條 相続人、遺言執行者又ハ相続財産管理人ハ相続税ヲ納付シ又ハ其ノ延納ノ許可ヲ受ケタ
ル後ニ非サレハ遺贈ノ辨濟ヲ爲スコトヲ得ス

第二十條 相続財産ヲ以テ相続税ヲ完納スルコト能ハサルトキハ相続開始前一年内ニ被相続人ヨリ
本法施行地ニ在ル財産ノ贈與ヲ受ケタル者ハ其ノ限度ニ於テ不足額ヲ納付スヘシ但シ相続税ノ延
納ヲ許可シタル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス

第二十一條 相続税ノ審査ニ參與シタル者ハ其ノ審査ニ關スル事項ヲ他ニ漏洩スルコトヲ得ス

第二十二條 相続人、遺言執行者又ハ相続財産管理人期限内ニ第十一條ニ依ル書類ヲ提出セサル
キハ政府ハ期間ヲ定メテ催告ヲ爲スコトヲ得

相続人二人以上ナル場合ニ於テハ政府ハ其ノ一人ニ對シテ前項ノ催告ヲ爲スコトヲ得

前二項ノ場合ニ於テ相続人、遺言執行者又ハ相続財産管理人其ノ期間内ニ書類ヲ提出セサルトキ
ハ政府ノ認ムル所ニ依リ課税價格ヲ決定シ催告ニ關スル費用及税金ノ十分ノ一ニ相當スル金額ヲ
相続人、遺言執行者又ハ相続財産管理人ヨリ徴收スルコトヲ得

相続人二人以上ナル場合ニ於テハ各相続人ハ前項ノ徴收金ニ付連帶納付ノ責ニ任ス

第三項ノ金額ノ徴收ニ關シテハ國稅徴收法ノ規定ヲ準用ス

第二十三條

左ニ掲クル場合ニ於テ本法施行地ニ在ル不動産及船舶以外ノ財産ニ付爲シタル贈與ノ
價額カ千圓以上ナルトキハ遺產相続開始シタルモノト看做シ其ノ財産ノ價額ヲ課税價格トシテ本
法ニ依リ相続税ヲ課ス(大正十五年法律
第十三號改正)

一 親族ニ贈與ヲ爲シタルトキ

二 分家ヲ爲スニ際シ若ハ分家ヲ爲シタル後本家ノ戸主又ハ家族カ分家ノ戸主又ハ家族ニ贈與ヲ
爲シタルトキ

前項ノ遺產相続ニ關シテハ第十條ノ規定ヲ適用セス

第二十三條ノ二

信託ニ付委託者カ他人ニ信託ノ利益ヲ受クヘキ權利ヲ有セシメタルトキハ其ノ時
ニ於テ信託ノ利益ヲ受クヘキ權利ヲ贈與又ハ遺贈シタルモノト看做シ第三條、第二十條及前條ノ
規定ヲ適用ス但シ不動産又ハ船舶ノ歸屬スヘキ權利ニ付テハ前條ノ規定ヲ適用セス(大正十二年四月法
律第四十八號追加)

前項ノ場合ニ於テ受益者不特定ナルトキ又ハ未タ存在セサルトキハ委託者ノ直系卑屬ヲ受益者ト
爲シタルモノト看做シ其ノ受託者ヲ相続財産管理人ト看做ス(大正十五年法律
第十三號追加)

第二十四條

第十一條ニ依リ提出シタル書類ニ虛偽ノ記載ヲ爲シタル者其ノ他不正ノ所爲ヲ以テ相
續税ノ遁脱ヲ圖リ又ハ遁脱シタル者ハ其ノ遁脱シ又ハ遁脱セムトシタル税金ノ三倍ニ相當スル罰
金又ハ科料ニ處ス但シ自首シタル者ハ其ノ税金ヲ徴收シ其ノ罪ヲ問ハス(明治四十三年法
律第四號改正)

第二十五條

第二十一條ニ違反シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス
前項ニ依リ處罰セラレタル者ハ其ノ職ヲ失フ(明治四十三年法律第四號改正)

第二十六條 府縣市町村其ノ他ノ公共團體ハ相續稅ノ附加稅ヲ課スルコトヲ得ス

附則

本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則 (明治四十三年法律第四號)

本法ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍舊法ヲ適用ス

附則 (大正三年法律第二十二號)

本法ハ大正四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍舊法ヲ適用ス

附則 (大正十一年法律第四十八號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム (大正十二年一月一日ヨリ施行)

附則 (大正十五年法律第十三號)

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍舊法ヲ適用ス
依ル

鑛
業
稅

○鑛業法(抄録)

(明治三十八年三月八日法律第四十五號)

改正

明治四十年四月十日法律第四十一號

明治四十三年三月二十五日法律第十號

明治四十四年三月十一日法律第九號

昭和二年三月三十一日法律第三十六號

昭和六年七月二十五日法律第六十五號

昭和九年三月二十九日法律第三十七號

第一章 總則

第一條 本法ニ於テ鑛業ト稱スルハ鑛物ノ試掘、採掘及之ニ附屬スル事業ヲ謂フ

第二條 本法ニ於テ鑛物ト稱スルハ金鑛、銀鑛、銅鑛、鉛鑛、蒼鉛鑛、錫鑛、安質母尼鑛、水銀鑛、亞鉛鑛、鐵鑛、硫化鐵鑛、格魯謨鐵鑛、滿俺鑛、重石鑛、水鉛鑛、砒鑛、ニッケル鑛、コバルト鑛、燐鑛、黑鉛、石炭、亞炭、石油、土瀝青、硫黃、石膏及重晶石ヲ謂フ但シ砂鑛ハ此ノ限ニ在ラス(昭和九年法律第三十七號改正)

含油層ト密接ノ關係アル可燃質天然瓦斯ハ之ヲ石油ト看做ス但シ工業用其ノ他ノ營利ヲ目的トセシテ單ニ一家ノ自用ニ供スルモノニハ本法ヲ適用セス(明治四十年法律第四十一號追加)

第三條 未タ掘採セサル鑛物(廢鑛及鑛滓ヲ含ム)ハ國ノ所有トス

第四條 本法ニ於テ鑛業權ト稱スルハ試掘權及採掘權ヲ謂フ

鑛業權者ハ鑛區ニ於テ其ノ許可ヲ受ケタル鑛物ヲ掘採シ及之ヲ取得スル權利ヲ有ス但シ鑛區ノ重複シタル場合ニ於テハ鑛業權者ハ互ニ其ノ權利ヲ制限セラル

第五條 帝國臣民又ハ帝國法律ニ從ヒ成立シタル法人ニ非サレハ鑛業權者トナルコトヲ得ス

第六條 本法ニ規定シタル鑛業權者ノ權利義務ハ鑛業權ト共ニ移轉ス

本法ノ規定ニ依リ爲シタル手續其ノ他ノ行爲ハ鑛業ヲ出願セムトスル者、鑛業出願人、鑛業權者、土地所有者又ハ關係人ノ承繼人ニ對シテモ其ノ效力ヲ有ス

第七條 二人以上共同シテ鑛業ヲ爲シ又ハ之ヲ爲サムトスルトキハ内一人ヲ選定シテ代表者ト爲シ

鑛山監督局長ニ届出ヘシ其ノ届出ナキトキハ鑛山監督局長之ヲ指定ス

代表者ハ國ニ對シ共同鑛業出願人又ハ共同鑛業權者ヲ代表ス

共同鑛業出願人又ハ共同鑛業權者ハ組合契約ヲ爲シタル者ト看做ス

第十三條 本法ニ於テ鑛業稅ト稱スルハ鑛區稅及鑛產稅ヲ謂フ

第十四條 本法ハ第八章ノ規定ヲ除クノ外國ノ鑛業ニ之ヲ適用ス

第二章 鑛業權

第十八條 試掘權ノ存續期間ハ登錄ノ日ヨリ二箇年トス

前項ノ期間ハ鑛區ノ増減又ハ改正ノ爲變更セララルコトナシ

第十九條 鑛業權及抵當權ノ設定、變更、移轉、消滅並處分ノ制限ハ鑛業原簿ニ登錄ス共同鑛業權

者ノ脱退ニ付テモ亦同シ但シ鑛業權ノ處分ヲ制限セラレタルトキハ廢業ノ登録ヲ爲スコトヲ得ス
(第二項以下省略)

第三十五條 探掘權者ハ鑛區ノ合併又ハ分割ヲ主務大臣ニ出願スルコトヲ得鑛區ノ一部ヲ分割シテ之ヲ他ノ鑛區ニ合併セムトスルトキ亦同シ(第二項省略)(昭和九年法律第三十七號改正)

第四十一條 鑛業權者第七十二條ノ命令ニ從ハサルトキ又ハ鑛業稅ヲ納メサルトキハ主務大臣ハ鑛業權ヲ取消スコトヲ得(昭和九年法律第三十七號改正)

第六章 鑛業稅

第八十一條 鑛業權者ニハ鑛業稅ヲ課ス

金鑛、銀鑛、鉛鑛及鐵鑛ニ付テハ鑛產稅ヲ課セス

自己ノ掘採シタル鑛物ト他人ヨリ取得シタル鑛物トヲ合併シ製鍊スル場合ニ於テ其ノ取得鑛物ヨリ製出シタル鑛產物ニ付テモ亦前項ニ同シ但シ其ノ取得鑛物ノ數量カ自己ノ掘採シタル鑛物ノ數量ニ超過スルトキハ其ノ超過部分ヨリ製出シタル鑛產物ニ付テハ此ノ限ニ在ラス(明治四十四年法律第九號追加)

第八十二條 鑛業權者ニハ其ノ鑛業ニ付營業稅及營業收益稅ヲ課セス(昭和二年法律第三十六號改正)

第八十三條 鑛區稅ハ鑛區一千坪毎ニ毎年試掘ニ付テハ三十錢、探掘ニ付テハ六十錢トス但シ一千坪未滿ハ之ヲ一千坪ト看做ス(明治四十三年法律第十號改正)

第八十四條 鑛區稅ハ毎年十二月中ニ翌年分ヲ前納スヘシ

第三十五條第一項ニ依ルモノヲ除クノ外鑛業權ノ設定若ハ變更ノ登録ニ依リ新ニ負擔シ又ハ不足

セル鑛區稅ニシテ其ノ登錄ノ年ニ係ルモノハ之ヲ即納スヘシ
前項ニ依リ納付スヘキ鑛區稅ハ月割ヲ以テ之ヲ計算ス鑛業權ノ存續期間滿了ノ年ニ係ルモノ亦同
シ

第八十五條 鑛產稅ハ鑛產物ノ價格ノ千分ノ五トス(昭和六年法律第六十五號改正)

鑛產物ノ價格ハ主要ナル市場ノ平均相場ヲ標準トシ主務大臣之ヲ告示ス其ノ告示セサルモノハ之
ヲ檢定ス(昭和九年法律第三十七號改正)

第八十六條 鑛產稅ハ毎年三月中ニ前年分ヲ納付スヘシ但シ鑛業權消滅ノ場合ニ於テハ即納スヘシ

第八十七條 共同鑛業權者ノ納稅義務ハ連帶トス

第八十八條 北海道、府縣及市町村ハ鑛業稅ニ對シ各左ノ制限内ノ附加稅ヲ課スルコトヲ得(明治四十年法律第六十五號改正)

一 北海道、府縣

試掘鑛區稅 千分ノ三十

採掘鑛區稅 千分ノ七十

鑛產稅 千分ノ二百

二 市町村

試掘鑛區稅 千分ノ三十

採掘鑛區稅 千分ノ七十

鑛產稅 千分ノ二百

前項ノ附加稅ノ外北海道、府縣及市町村ハ鑛業ニ對シ又ハ鑛夫、鑛產物、鑛區若ハ直接鑛業用ノ
工作物、器具、機械ヲ標準トシテ課稅スルコトヲ得ス

前二項ノ規定ハ北海道及沖繩縣ノ區並開切島其ノ他町村ニ準スヘキモノニ之ヲ準用ス

第八章 罰則

第一百條 詐偽其ノ他不正ノ所爲ヲ以テ鑛業稅ヲ免レ又ハ免レムトシタル者ハ其ノ脫稅金額三倍ニ
相當スル罰金ニ處ス

第一百二條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ違背シタル者ニハ刑法ノ減輕、再犯加重及數
罪俱發ノ例ヲ用キス

第一百三條 鑛業權者カ未成年者又ハ禁治產者ナルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ノ規定ニ
依リ鑛業權者ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ法定代理人ニ適用ス但シ鑛業ニ關シ成年人者ト同一ノ能力ヲ
有スル未成年者ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第一百四條 鑛業權者ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關
シ本法ヲ犯シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

本法ニ基キテ發スル命令中別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外其ノ命令ニ規定セル罰則ニ付テモ亦同
シ

第一百五條 前二條ノ場合ニ於テハ禁錮又ハ拘留ノ刑ニ處スルコトヲ得ス

第六條 明治三十三年法律第五十二號ノ規定ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依ル犯罪ニ之ヲ準用ス

附則

第七條 本法ハ明治三十八年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

鑛業條例ハ之ヲ廢止ス

第十三條 日本坑法ニ依リ借區ノ許可ヲ得タル者及鑛業條例ニ依リ試掘ノ認可又ハ採掘ノ特許ヲ得タル者ハ本法施行ノ日ヨリ六十日以内ニ明治三十八年分ノ鑛區稅又ハ其ノ不足額ヲ納付スヘシ其ノ鑛區稅ハ月割ヲ以テ計算ス

第十四條 明治三十八年分ノ鑛產稅ハ本法施行前ニ得タル鑛產物ニ付テモ之ヲ課ス

附則 (明治四十三年法律第十號)

本法ハ明治四十四年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

非常特別稅法中鑛區稅ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス

附則 (明治四十四年法律第九號)

本法ハ明治四十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附則 (昭和二年法律第三十六號)

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附則 (昭和六年法律第六十五號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム (昭和七年十一月十二日勅令第三百五十二號ヲ以テ)

附則 (昭和九年法律第三十七號)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム (昭和九年六月二十七日勅令第九十四號ヲ以テ昭和九年七月一日ヨリ施行)

○砂鑛區稅法 (明治四十三年三月二十五日法律第九號)

第一條 砂金採取ヲ目的トスル砂鑛權者ニハ左ノ割合ニ依リ毎年砂鑛區稅ヲ課ス

河床 砂鑛區域一町毎ニ 金三十錢

河床ニ非サルモノ 砂鑛區域一千坪毎ニ 金三十錢

前項ノ場合ニ於テ一町未滿又ハ一千坪未滿ノ端數ハ一町又ハ一千坪トシテ計算ス

第二條 砂鑛區稅ノ賦課徵收ニ關シテハ鑛區稅ノ賦課徵收ニ關スル規定ヲ準用ス

第三條 北海道、府縣及市町村ハ砂鑛區稅ニ對シ百分ノ十以内ノ附加稅ヲ課スルコトヲ得

附則

本法ハ明治四十四年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

非常特別稅法中砂金採取地稅ニ關スル規定ハ之ヲ廢止ス